T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 13
発行日 / Pub. date	1997,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

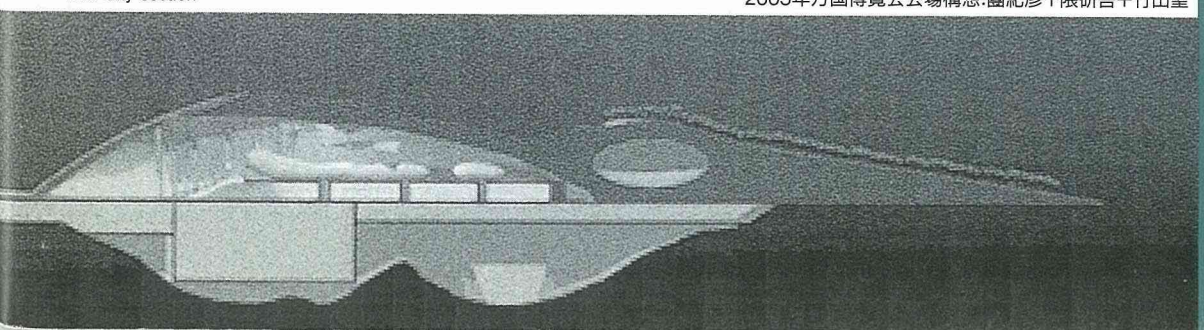
冬号/Winter

Ka No.13 1997

1996年度設計製図第一(2年生)優秀作品より——2
1996年度設計製図第三(3年生)優秀作品より——6
学生コンペ作品紹介——16
Visitor's View：竹山聖——24
OB作品紹介：篠崎好明／岡河貢——26
異文化体験:留学生からのメッセージ——30

Eco-City section

2005年万国博覧会会場構想:團紀彦+隈研吾+竹山聖



閲覧用

1996年度設計製図第一（2年生）優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Spring Semester

【木造小住宅】
Small Wooden House

講評

講師 團 紀彦

「木造小住宅」の課題は，建築学科に入ってからの最初の設計課題であり，建築に対する戸惑いや，知識不足をもちながらも，それらを補って，とにかく「建築」にまとめあげることが求められる．建築の設計は，文章を書くことと似ていて，手を動かして，習練を重ねるほど少しずつでも，自分の言いたいことが自然にでてくるようになるものだ．心がこもっていて，明確な主題をもち，文章全体が詩的なものにまで高められているものもあれば，必要事項だけ羅列しただけのものもある．そして，その違いがどこにあるかを考え続けることが大切だ．

私も学生の時の最初の課題では，そうした主題をみつけられずに文法的にも意味の通らないものになってしまった苦い思い出がある．ここに掲げた３人の学生の作品は，他の学生のものと比べ，より明確なテーマをもち，まったく異なるアプローチをとりながら，「建築」としてあるレベルの成功を収めているように思われる．

赤尾祐一郎君の作品は，シンプルな構成をもちながら，敷地の方向性をよく読み取っており，ディテールに対しても，愛情をもって丁寧にデザインされている点で高く評価できる．数々の建築的ボキャブラリーを駆使しながら，それでも建築として状況とかみ合っていないものが多い中で，こうした方法で建築的成功を収めていることは，特筆すべきことである．

増田泰良君の作品は，敷地の中に回遊性をもたせるために，週末住宅のプログラムを分解している．ある意味でこうした分解は，住宅のひとつのまとまりに対する破綻をもたらしかねない作業となるが，外部空間に対して開かれた新しい型式を追求するチャレンジを評価したい．

荒木亮太君の作品は，古典的な構成法を用いて，この敷地に外部に開かれた変化のある場をもたらしている点がよい．はじめから美文を書く必要もないが，美辞麗句を並び立てただけで魂のこもっていない方向に傾斜するよりも，多少木訥でも，自分にとって確かなものをつかむように心がけて自信をもって前進していってほしい．

●課題

敷地：自然林の豊富な那須国立自然公園内．
（なるべく自然林を残し，あまり造成はしない）
敷地面積820㎡

法的制限：建蔽率＝20%，許容建築面積＝164㎡
容積率：30%，許容延床面積＝246㎡
（延床面積は150～200㎡程度を目標）

製図目標：⑴住宅イメージの把握
⑵木造住宅の工法的理解
⑶設計コンセプトの立案

家族構成：両親・子供２人（小学生男女）

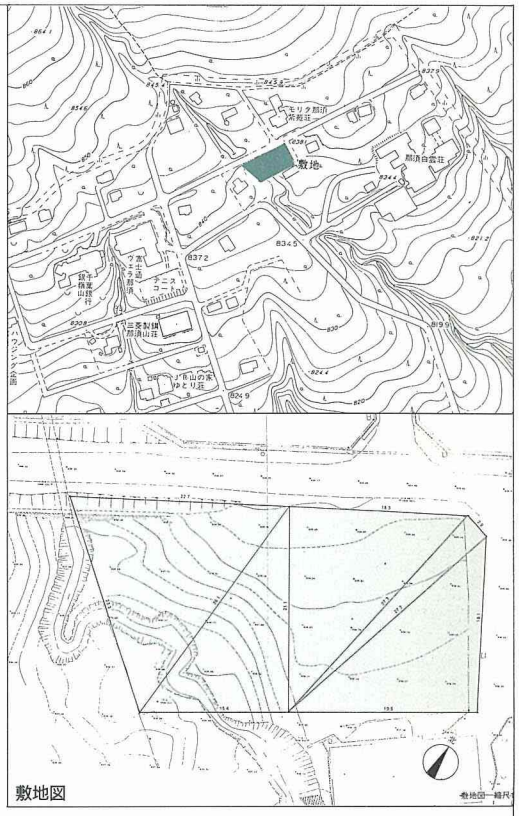
概要：趣味豊かな40歳前後の芸術家（建築家を含む）のアトリエ（ワークスペース）付きセカンドハウス

●提出図面

①設計趣旨　400字以内
②配置図　１：200（周辺環境を含めた配置）
③各階平面図　１：100
④立面図　１：100（周辺環境を含めた主要立面）
⑤矩計図　１：50
以上①～⑤をＡ１版１枚におさめる．
⑥パース　内観・外観各一面
パースはＡ１版１枚におさめ，９月４日提出
（注意：図面の切り貼りは認めない）
⑦模型　１：100

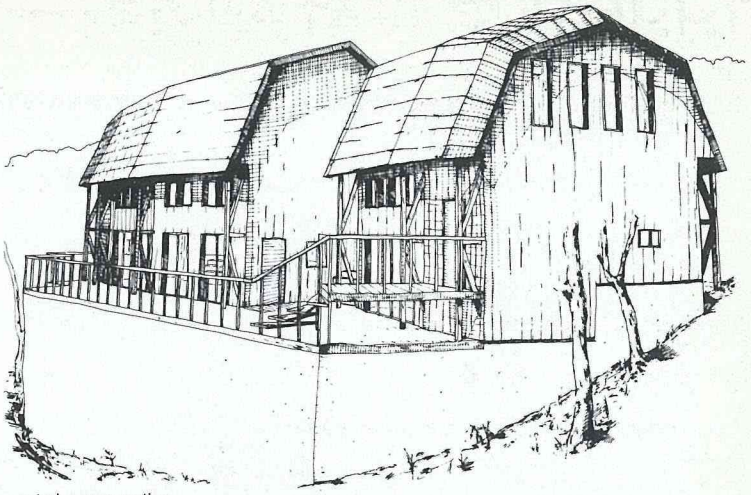
●スケジュール

6/12　課題説明・スライドレクチャー
6/19　第１回中間チェック
敷地模型・建築ボリューム模型提出
6/24　第２回中間チェック
7/1　第３回中間チェック
7/8　第４回中間チェック
7/15　図面・模型提出・中間講評
9/4　最終講評

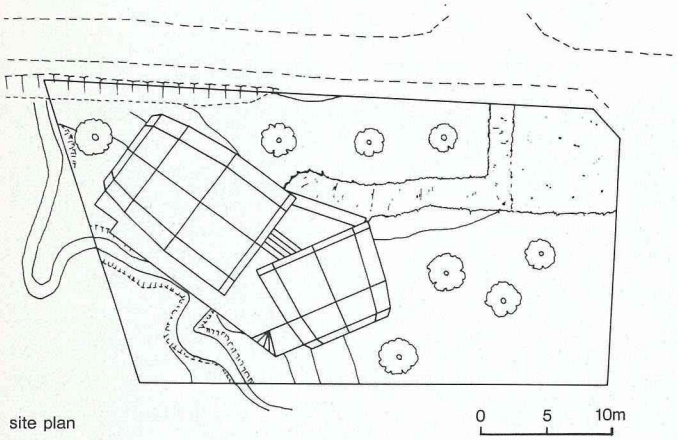


那須の週末住宅
Weekend House in Nasu

赤尾祐一郎
Yuichiro Akao

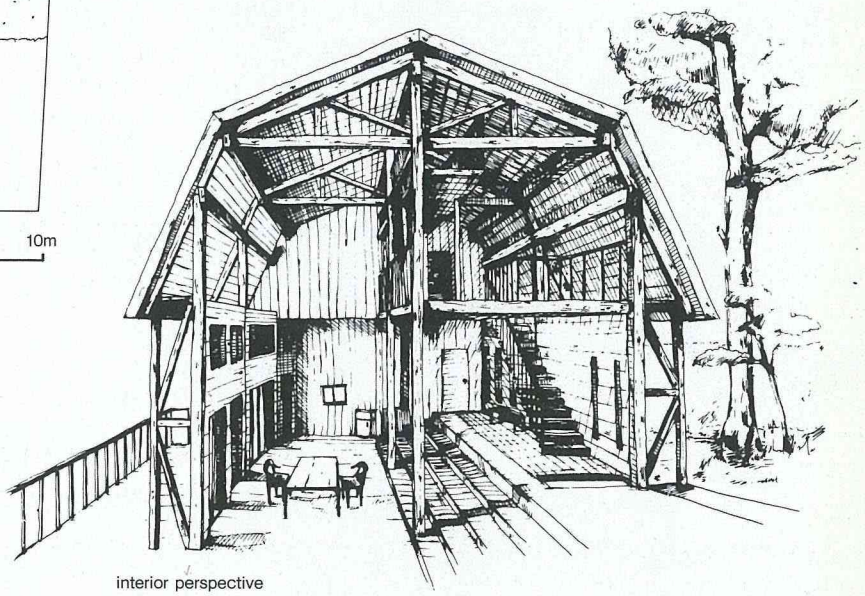


exterior perspective

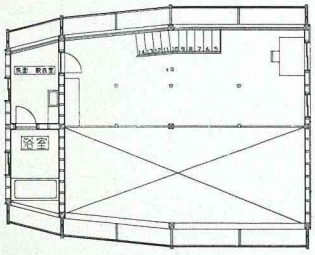


site plan

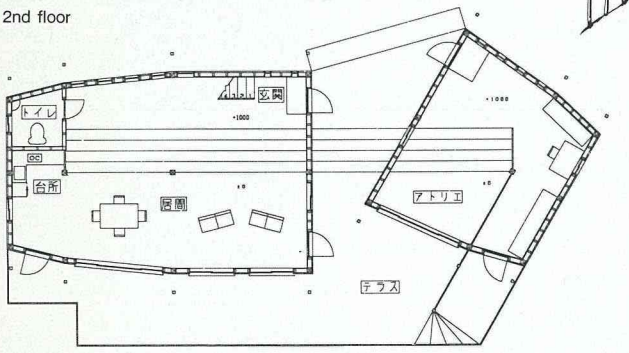
0 5 10m



interior perspective

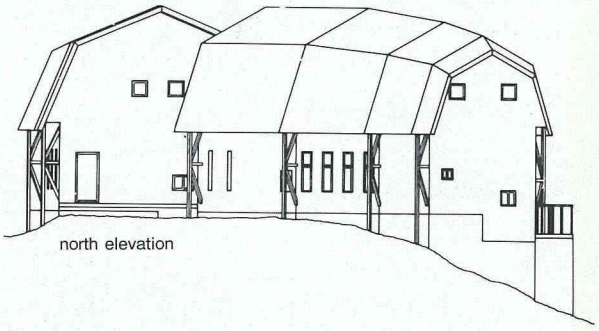


2nd floor

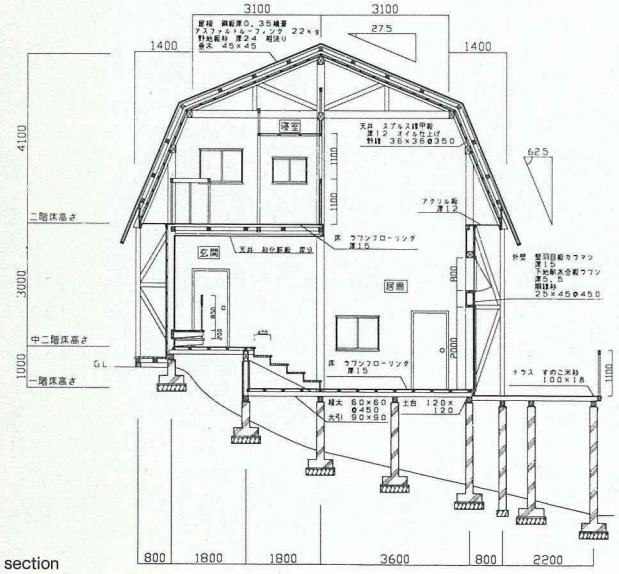


1st floor

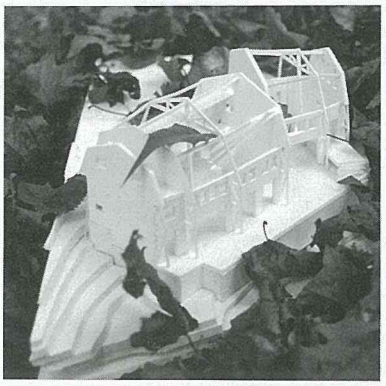
0 2 5m



north elevation



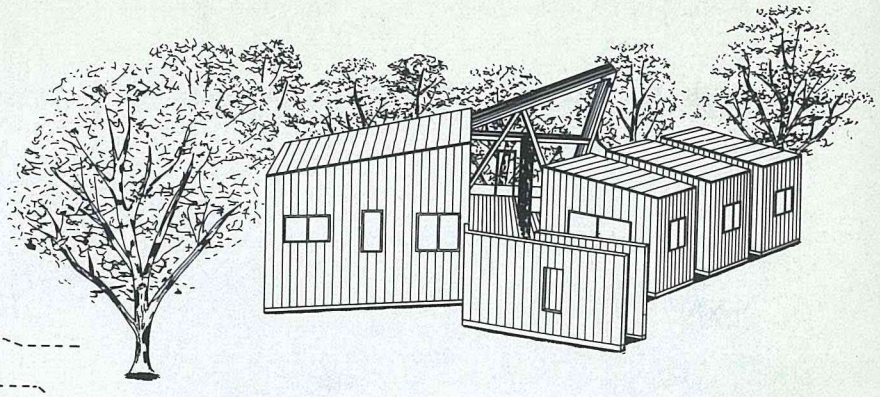
section



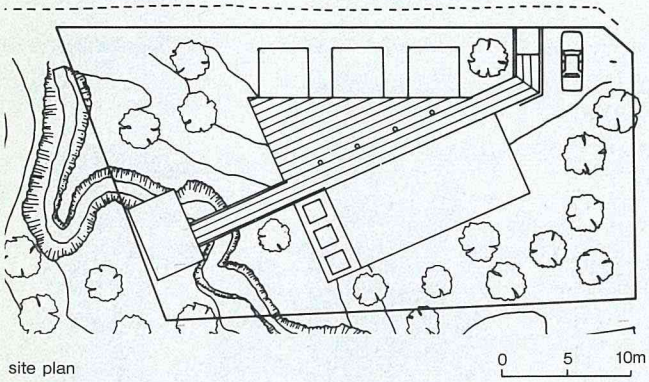
■包むという言葉からこの画家のための週末住宅を考えた．■ただ自然から人間を包み，守るということではなく，切れ目を入れることによりそこから自ずと入ってくる自然を取り込むよう配置した．またその切れ目は生活と仕事の場の境界でもある．しかし，完全な分断ではなく，テラスを介して生活，遊び，仕事の場に回遊性をもたせた．内部はできるだけ間仕切りを排し，開放感のある空間にした．■屋根と壁との間にも隙間を入れることで，外部との交流を多いものにしようと試みた．■ここがよきアトリエとなり，家族と価値ある余暇を過ごしていただければ幸いである．

那須の家
House in Nasu

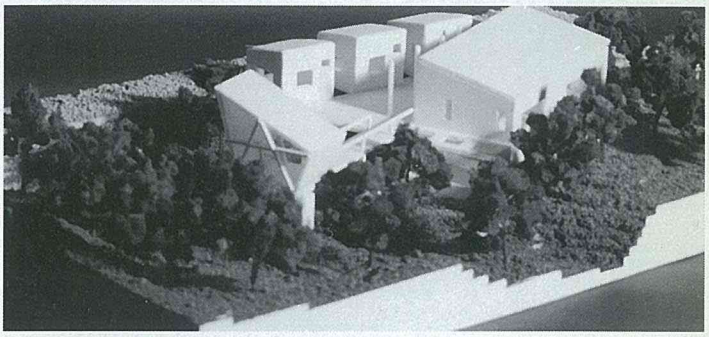
荒木亮太
Ryota Araki

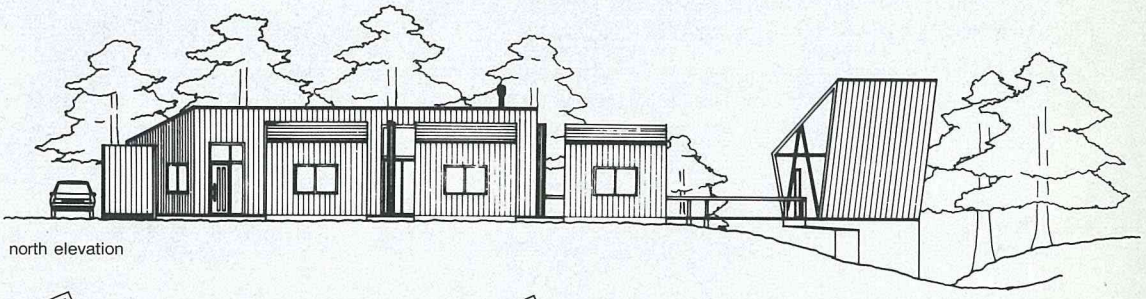


exterior perspective

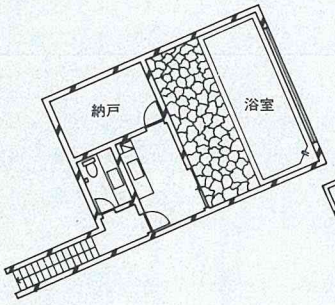


site plan

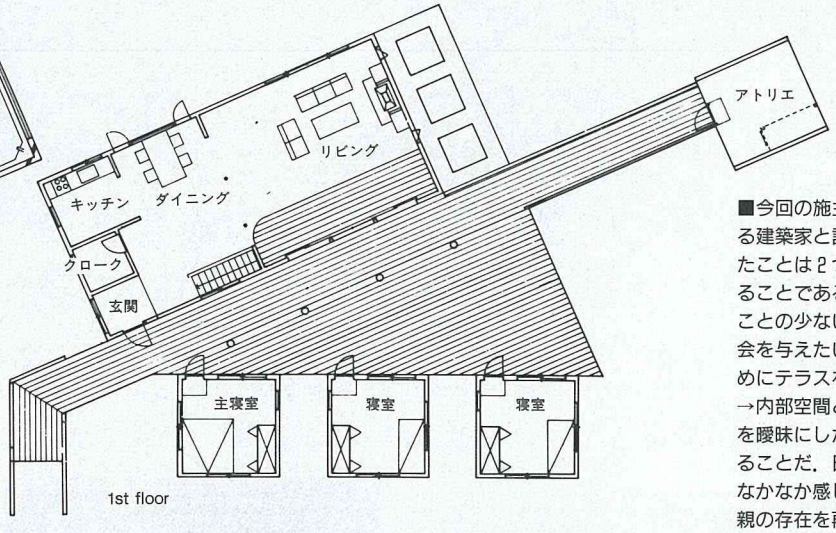




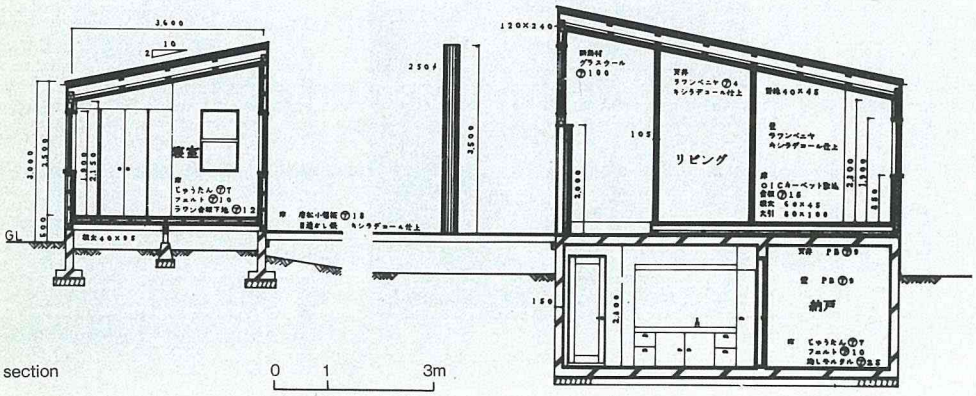
north elevation



basement



1st floor



section

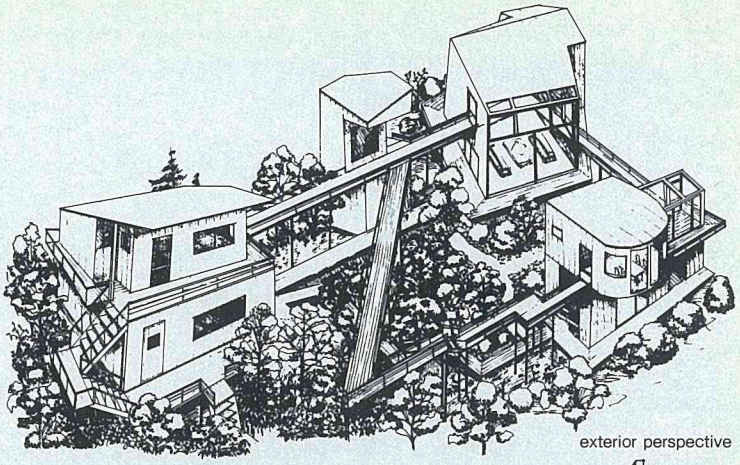
■今回の施主はマンション暮らしをする建築家と設定した．この計画で考えたことは2つある．まず，自然を感じることである．ふだん，自然に触れることの少ない子供たちにとってその機会を与えたいと考えたからだ．そのためにテラスを設け，外部空間→テラス→内部空間という流れをつくり，境界を曖昧にした．■次に「父親」を感じることだ．日ごろ忙しくてその存在がなかなか感じられない子供たちに，父親の存在を再確認してもらおうということである．その方法として，まっすぐアトリエまで続いている軸を真ん中に通す．これにより，家に入ってきた時はもちろん，中にいる時も，私室と公室が分かれていることで，毎日その存在を確認できる．■その他の特徴として，3つの箱があげられる．これは，先の目的と共に個々のプライベートを大切にし，子供たちの自立心を育むために提案した．また気を休めるために浴室を約16畳という大きいものにした．全体としては，豊かな自然の風景を損なわないため，遠景では木々に埋もれて見えないように平屋にした．

Resort House 回廊のある別荘

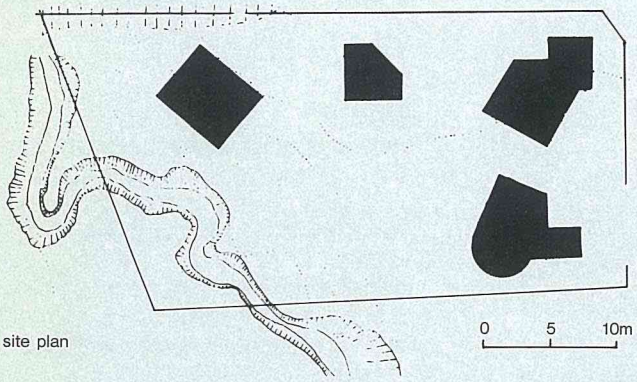
Villa with Corridors

増田泰良

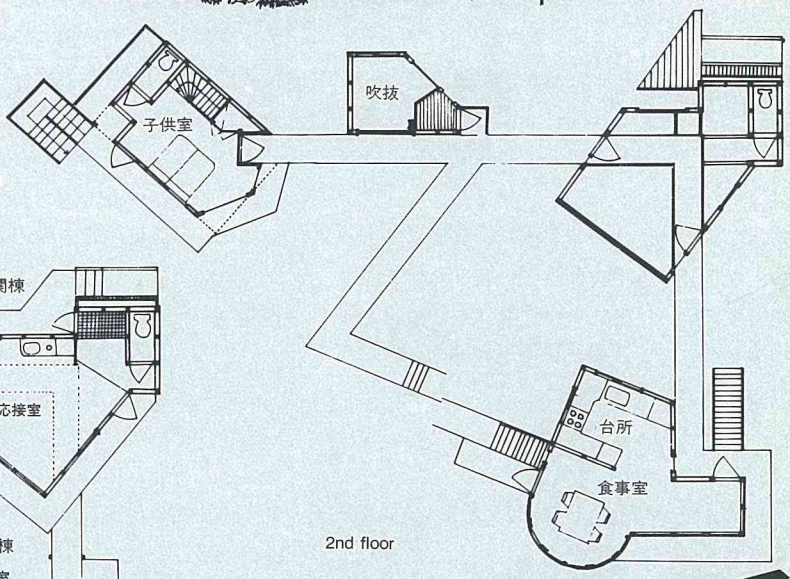
Taira Masuda



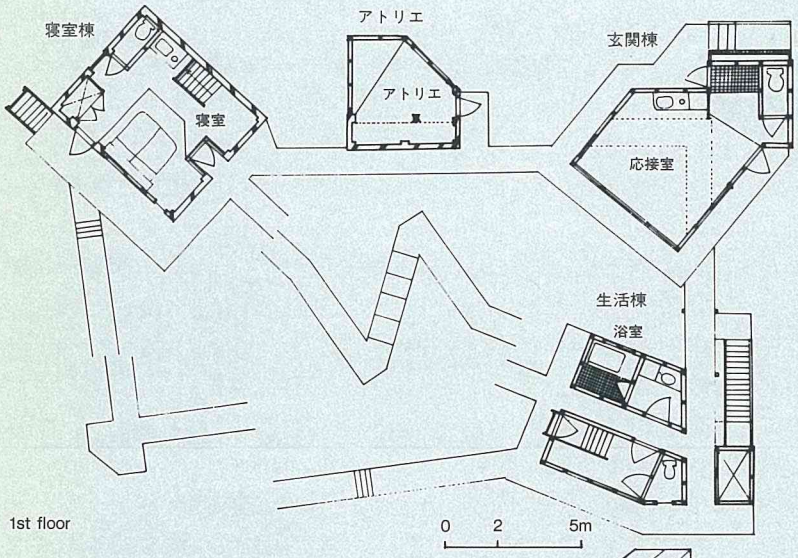
exterior perspective



site plan

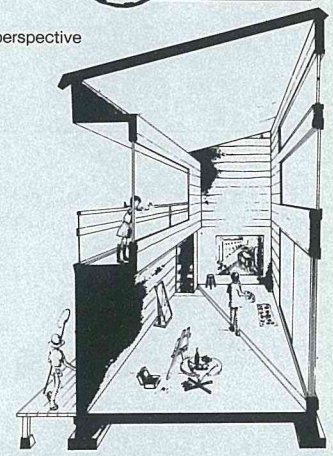


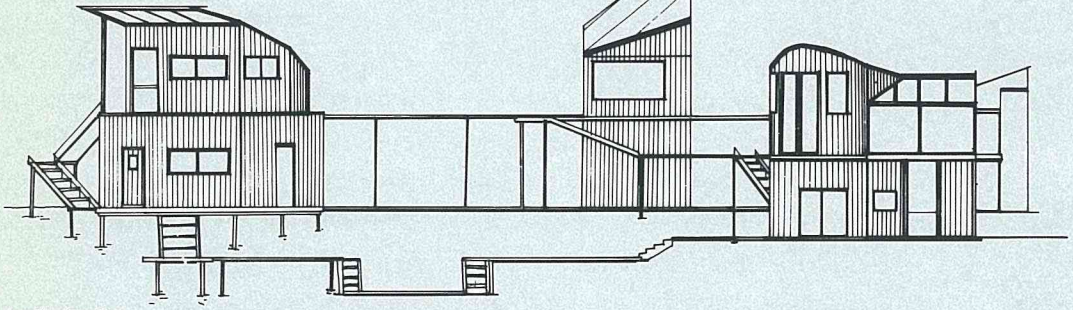
2nd floor



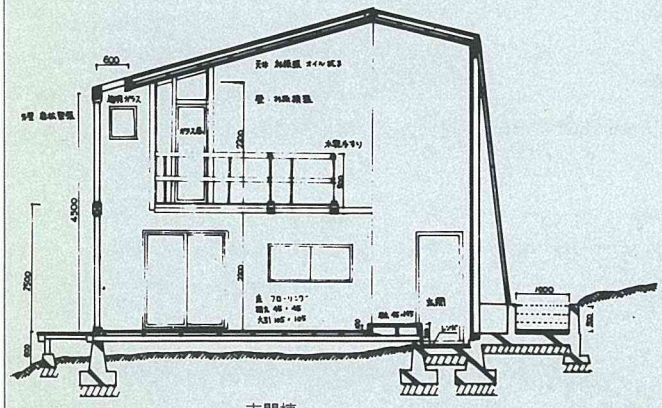
1st floor

interior perspective

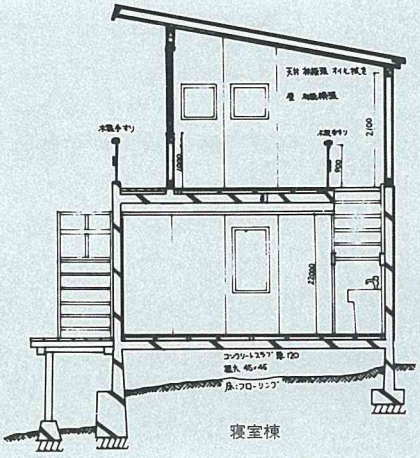




south elevation



section



■都市の喧噪から離れ，自然に親しむために人は別荘を建て，訪れる．しかしただ建物の中に生活しているだけでは本当に自然に親しんでいるとは言えない．外気に直接触れ，五感を用いて直接自然を体験すべきである．■この別荘は直接自然を体験する機会をより多くもつため，各部屋ごとに別棟の建築とし，移動時に外気に触れるようにした．また広く変化に富んだ敷地を最大限に生かすために各棟は敷地いっぱいに配置し回廊のように木道で結んだ．木道は建物を取り囲み，上を跨ぎ下を潜り，陥入し貫通することで建物と一体化し，さらに高度変化によって縦方向への広がりも作りだす．木道を通ることは単なる移動ではなくさまざまな意味をもった行為となる．■この別荘が都会を一時離れた人に安らぎを与えることができれば幸いである．

1996年度設計製図第三（3年生）優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Spring Semester

洗足池周辺に建つ博物館

Museum Adjoining Senzokuike

講評　非常勤講師 戸尾任宏

この課題では，敷地が身近な洗足池周辺と定められているため，学生にとって計画案を構想する過程で，極めて現実的な対応を迫られることになった．

洗足池周辺をあらためて観察・調査し，どのようなテーマの博物館を提案すべきかを思い巡らすうちに，この地に博物館をつくることが妥当であるか，今までの形態の博物館が必要であるか，住宅地の中に残された小さな自然――散歩道としても親しまれているこの場所に，新しい施設の挿入でより良い環境を創りだすことができるか等々の疑問を感じる学生たちもいたようである．

このような思考・疑問は，知識によるものというより本能的に察知した正しい感覚といえ，私には好ましいものとして理解された．これから建築の世界に入っていく学生たちにとっていつまでも忘れないでいてほしい原点である．

池埜君の案は自分が感銘を受けた先人の警句や箴言を自分なりに理解し，イメージを膨らませて建築空間に表現しようとしたものである．選ばれた10のアフォリズム――箴言に見合った空間を連ね，遠い道のり，あるいは遥かな高み，あるいは閉塞した空間を構成することで思索的な空間体験を示したユニークな案として評価したい．環境に対して少し建築のスケールが大き過ぎるのが気になった．

野村君の案は都会の中に埋もれた洗足池の上にぽっかり広がる空，周辺環境を考える上で空に着目するという発想がまず秀逸である．いかに空を切り取り，意識させるかを建築的にどう表現するかが腕の見せどころであるが，提案はこぢんまりとした優しい感じの建物になった．空を意識させる建築的手法をもう少し多角的に提起してほしかった．

伊藤君の案は従来の形の美術館をつくることへの疑問からスタートし，展示のデジタル化と共により広範な情報を提供し，新しい展示手法，鑑賞法の可能性を追求したという発想に共感がもてる．空間構成も良く整理され，造形的にも完成度が高い．構造材，仕上材の選択も明快である．現代の建築の傾向を消化した，少し硬派なこの建物の計画位置の選択も適切である．

長岡君の案は池の畔に建物を埋め，池の中に設けられたレストランと水面下の回廊で結び，それに接し水面下と水上に配される展示室を巡る中で，光や映像をモチーフにした作品を鑑賞するという発想である．光と水による内部空間の変化を強く意識したものであろうが，それよりも洗足池周辺環境に及ぼす影響を考慮しながら，新しい体験と変化を与える施設のスケール感の良さに好感がもたれた．

●課題
洗足池周辺に自由に敷地を選定し博物館を計画する．博物館の内容についても自由に提案してよい．構造も自由とし，規模は約4,000㎡とする．（敷地選定範囲については別紙参照）
●提出物
①配置図（外構・植栽も行うこと）　1：500
②平面図　断面図　立面図　1：200
③詳細図（展示室の部分の矩計または平面詳細）　1：50
④パース（内観パース）
⑤説　明（800字以内を図面の中に入れよ）
⑥模　型（できれば模型写真も提出）1：500
＊用紙サイズはＡ１とする．
（縦横自由であるが，どちらかに統一すること）

講評　教授 仙田 満

博物館の課題は２つの大きな目標がある．建築設計の企画性と場所性である．ここでは設計のプログラムを設計者自身が組み立てることが求められている．第１に，どのような博物館を構想するかということである．そしてこの構想を実現するためのプログラムを提案しなければならない．第２に，洗足池という地域は与えられているが，その中でどの場所を用いて設計していくかという場所の選択をしなければならない．池を含めた周辺環境の中で，建築をどううまく座らせるかということが大きな問題である．

今回の４人の作品すべてがこの２つの課題に対して良い解答をだしているとはいえない．しかし，共通して魅力をもった「何か」を提案していることは確かである．表現としてこの４人はすべて絵がおもしろい．自分のイメージを強く表現しているところがよい．池埜君の案は観念的で自己満足的な案ではあるが，絵が魅力的である．しかし，プログラムがまだ素朴すぎる．最初のアイデアというのはだれでも極めて素朴なものであるが，それを現実的な条件の中で，空間として育成していくわけである．そういう点では，今後どう自分自身でアイデアを育てていく力を磨くかが問題だ．野村さんの案は環境としてはまとまっているが，案としての迫力は今ひとつない．しかし模型の雰囲気はとてもよい．長岡君の案は全体に楽しさがある．建築のそれぞれの場所で人びとがどのように振る舞うべきかが，多くのスケッチで示され，多様性というコンセプトがわかりやすい．伊藤君の提案はもっとも構成的あるいは硬性的といえるかもしれない．展示の意味が極めて変化に富む現代博物館の問題を深く考察している点が好ましい．

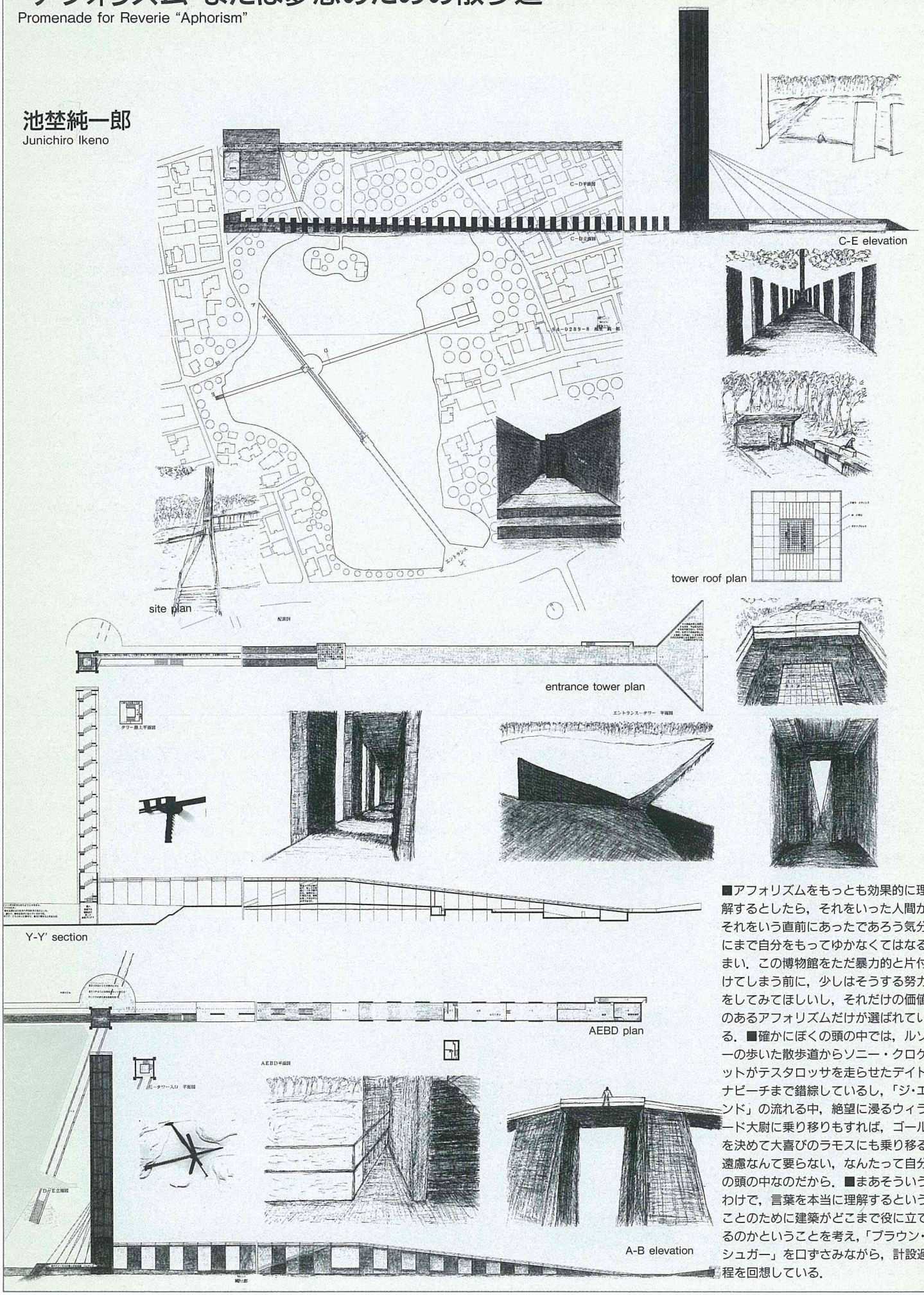
戸尾任宏
Tadahiro Toh

1930年　兵庫県生まれ
1954年　東京工業大学建築学科卒業
1954年～69年　坂倉準三建築研究所
1960年～63年　エコール・デ・ボザールに留学
1974年　建築研究所アーキヴィジョン設立
東京工業大学，工学院大学，東京理科大学非常勤講師
日本建築家協会理事，日本建築学会理事
主な作品：奈良県立橿原考古学研究所・付属博物館（BCS賞），佐野市郷土博物館（日本建築学会賞），清瀬市郷土博物館（東京建築賞最優秀賞），奈良県新公会堂（甍賞金賞，公共建築賞優秀賞），川越市立博物館（さいたま景観賞，公共建築賞優秀賞），奈良県立橿原考古学研究所（公共建築賞優秀賞），相模原市立博物館（神奈川県建築コンクール最優秀賞）

"アフォリズム"または夢想のための散歩道

Promenade for Reverie "Aphorism"

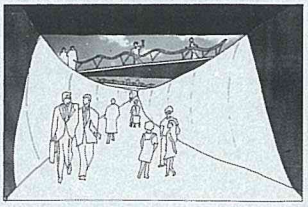
池埜純一郎
Junichiro Ikeno

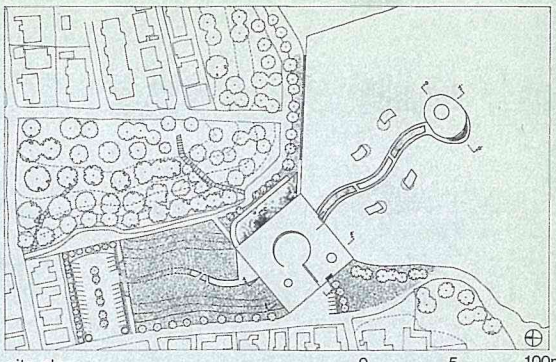


■アフォリズムをもっとも効果的に理解するとしたら，それをいった人間がそれをいう直前にあったであろう気分にまで自分をもってゆかなくてはなるまい．この博物館をただ暴力的と片付けてしまう前に，少しはそうする努力をしてみてほしいし，それだけの価値のあるアフォリズムだけが選ばれている．■確かにぼくの頭の中では，ルソーの歩いた散歩道からソニー・クロケットがテスタロッサを走らせたデイトナビーチまで錯綜しているし，「ジ・エンド」の流れる中，絶望に浸るウィラード大尉に乗り移りもすれば，ゴールを決めて大喜びのラモスにも乗り移る．遠慮なんて要らない，なんたって自分の頭の中なのだから．■まあそういうわけで，言葉を本当に理解するということのために建築がどこまで役に立てるのかということを考え，「ブラウン・シュガー」を口ずさみながら，計設過程を回想している．

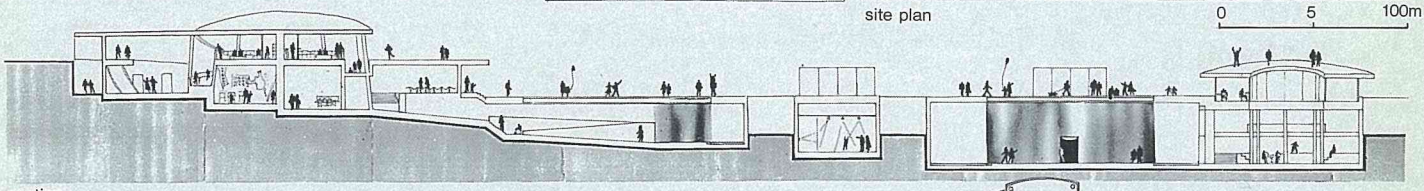
Senzokuike Light Art Museum

長岡大樹
Taiju Nagaoka

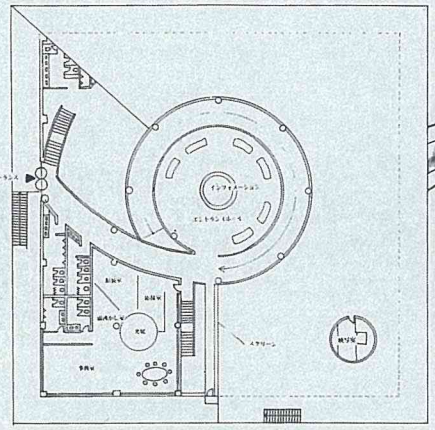


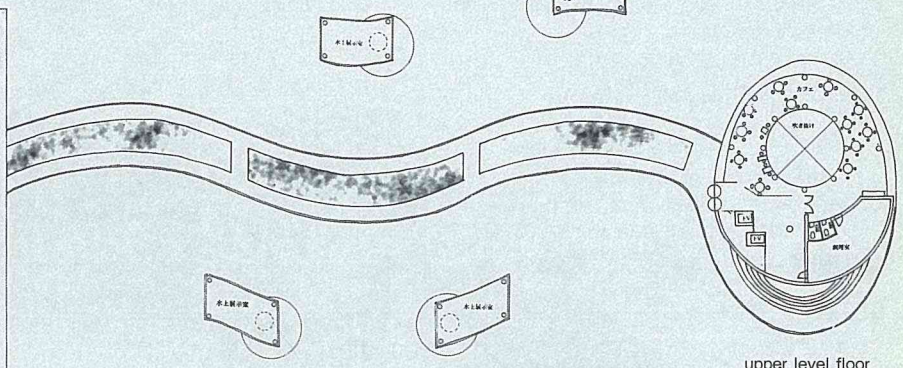


site plan

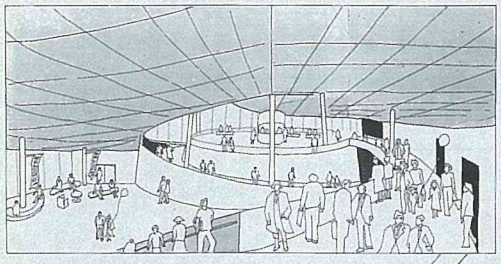


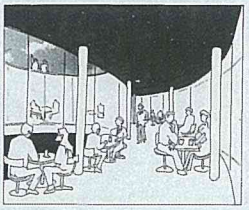
section

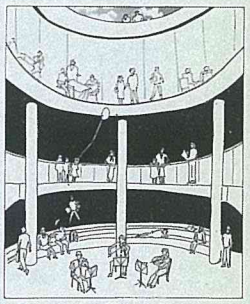


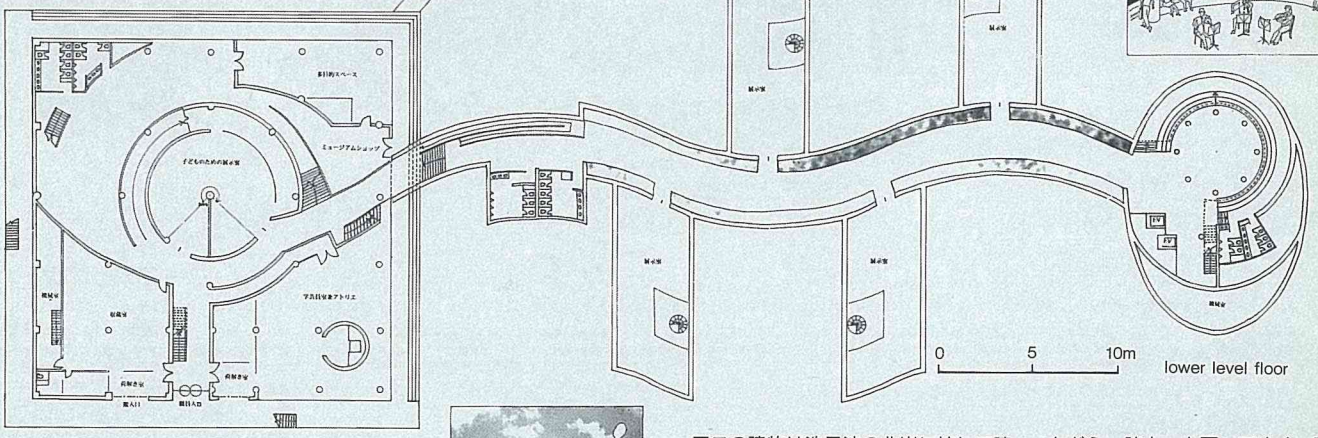


upper level floor

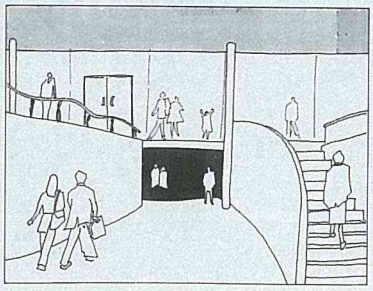


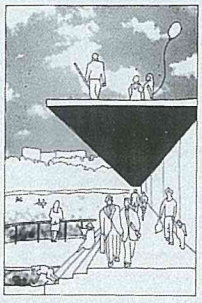






lower level floor





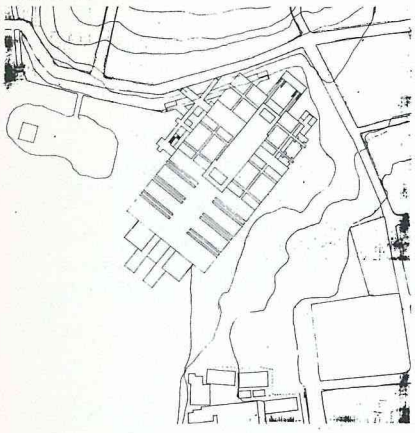
■この建物は洗足池の北岸に接して建つ，光や映像をモチーフにした芸術作品を制作，展示するための美術館である．■管理室や収蔵庫といったバック部門以外のほとんどの機能を洗足池の水の中，あるいは水の上に配した．■訪れた人は，陸上の建物を経由して，水の中へと導かれる．そこは，透明な天井や流れ落ちる水の膜を備えた人工池へのアプローチと展示室から成る．そして，人は池の真ん中の人工島を経て，夜間であれば，水上展示室を眺めながら，陸上へと戻ってゆく．■水を建築の構成要素として重視することで，多種多様な場が生みだされた．そもそも水や土といった自然の構成要素を，建築のような人工物の対極のものとして扱うのは難しくなってきているように思える．特に，洗足池のような都市の中のささやかな自然においてはそうである．ここでは，自然と建築を共存させるのではなく，建築がいかにうまく自然を消化することができるかが試されたといえよう．

離散(デジタル)化された常識

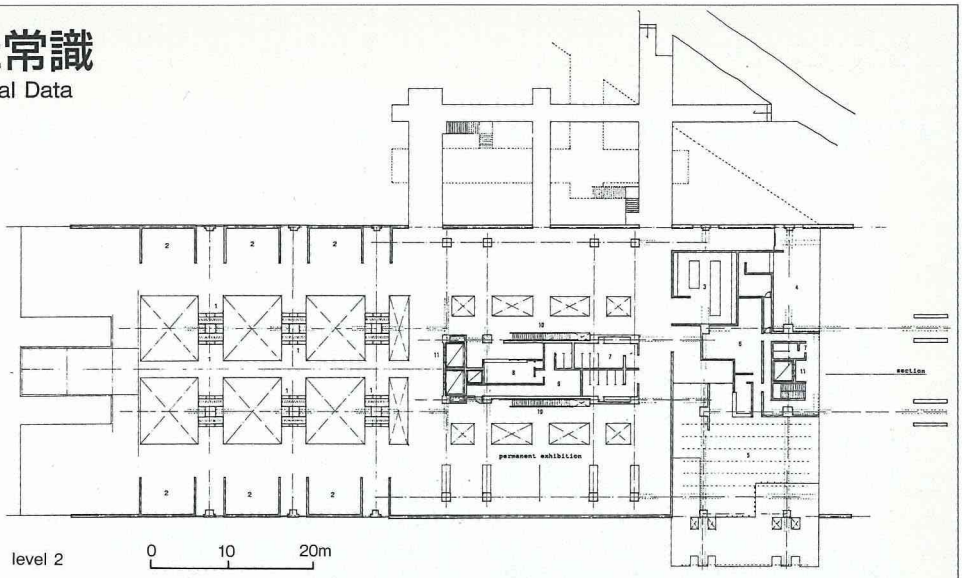
Commonsense Translated into Dispersed Digital Data

伊藤立平

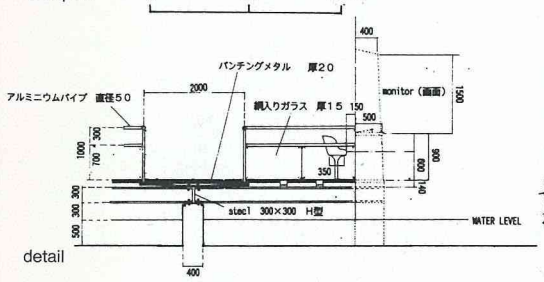
Tappei Ito



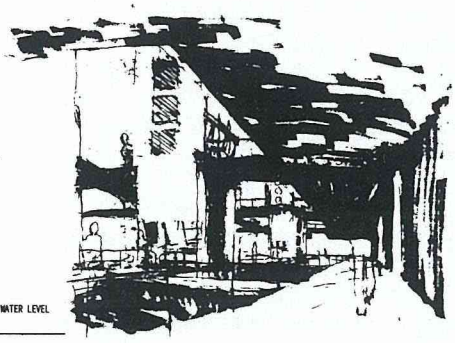
site plan 0 50 100m

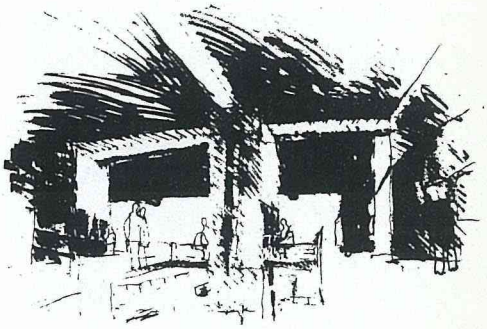


level 2 0 10 20m



detail

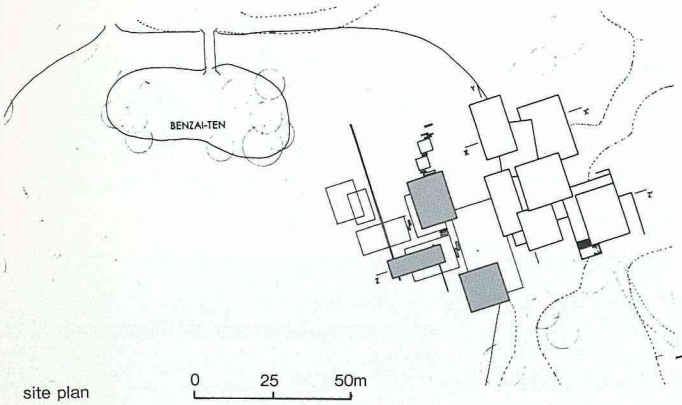




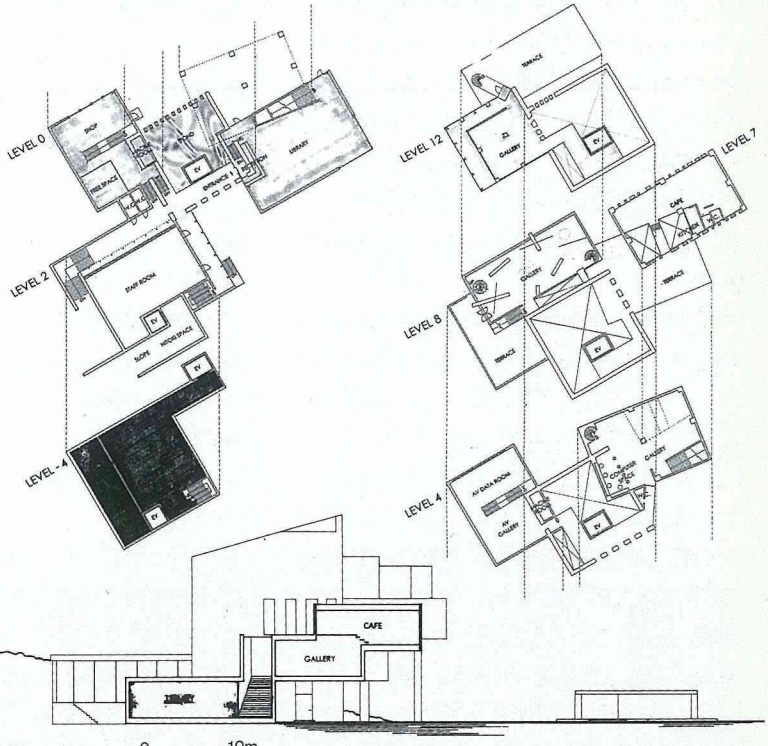
The Sky Museum

野村陽子

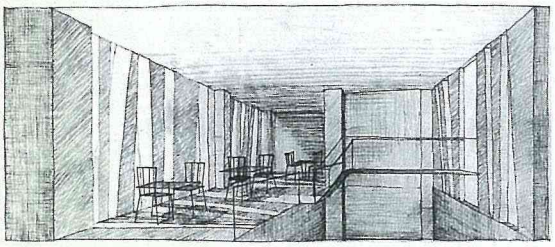
Yoko Nomura

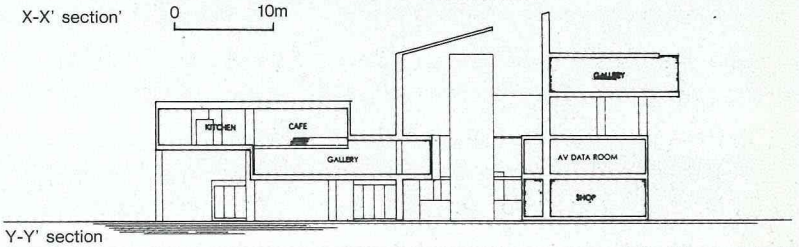


site plan 0 25 50m



X-X' section' 0 10m





Y-Y' section

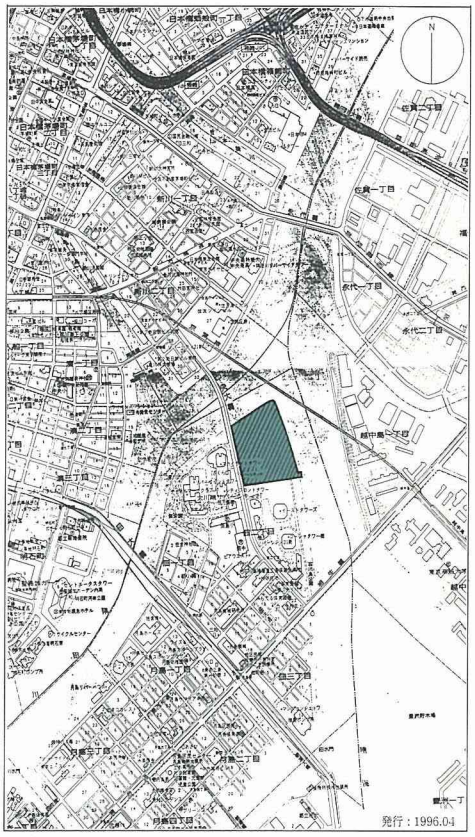
1996年度設計製図第三（3年生）優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Spring Semester

【大空間建築】

Huge Space

●課題：大架構で覆われる部分の投影面積が5,000㎡以上の空間を計画する．構造方式・材料は自由．
●敷地：大川端リバーシティ地区
●機能：自由．スポーツ施設，展示場，ホール，レクリエーション施設など自由に設定してよい．
●提出物
①模型　1：300
大架構部分の構造システムを表現すること．
②図面　以下をA1版3枚以内におさめる．
a 配置図　1：500　　周辺環境との関係が説明できるものであること．必要であれば，周辺地区の既存施設を見直すことを併せて提案してもよい．
b 平面図　1：300　各階
c 立面図　1：300　2面以上
d 断面団　1：300　2面以上
e 説明図　計画主旨及び構造システムを模式図等を用いて簡潔に説明すること．
f 仕上表　主架構を含む主要部分のみでよい．
g パース　着色とし，外観・内観（大架構で覆われている部分）各1面
●スケジュール：
6/4　課題説明・大架構講義　仙田教授・木村講師
6/6　大架構講義　久保寺講師
6/11　スライドレクチャー　只野講師
6/25　計画エスキス　只野講師
7/2　構造エスキス　木村講師・久保寺講師
7/9　計画エスキス　只野講師
7/18　図面・模型提出
9/3　講評　全員



講評　非常勤講師 只野康夫

エッフェル塔が建てられたのは，ほぼ1世紀前の1989年，フランス革命100周年を記念して開かれたパリ万国博覧会の時だが，実はその実現の過程では強力な対抗馬があった．それは，その前の万国博覧会の際，トロカデロ宮殿を設計するなど建築家としての地位を確立していたJ・ブールデによる高さ366mの石造りの塔である．しかし，これは重力や風圧にとても抗しきれそうになく，これらをクリヤーできるものとして，当時橋梁設計で実績のあったG・エッフェルによる高さ300mの鉄の塔の案が採用されたのだった．

石造りの様式建築が主流の当時のパリにあって，このエッフェル塔は知識人から醜悪で無用の怪物と酷評されたが，ル・コンビュジエはこれに近代建築の萌芽をみてとり，スケッチブックに「これこそパリだ！」と感嘆のメモを残している．

3年生前期の設計製図第三のスタートにあたってのスライドレクチャーは，以上のような考えによる．

建築の設計には個性とか感覚とかいったもっぱら個人の資質に依存する才能が求められるが，いっぽうで工学とか技術といった時代や社会が共有する知識が不可欠である．したがって，この両者のバランスのとれた学習・修練が必要なのであり，しかも往々にして前者が後者に触発されることがあることを知ってほしい．「大空間建築」という課題は，そういう類の恰好のテーマだと思ったのである．

また，これは少々大げさな言い方ではあるが，新しい世紀に建築家として名乗りでようとしている学生諸君が，1世紀前の近代建築のエポックを振り返ることを通じて，次なる建築の主役としての自覚をもってほしいとも思った．

さて，スライドレクチャーとその後2度のエスキスおよび図面・模型提出時の寸評を行ったが，それが何ほどの役に立ったのか心許ない．しかし，こちらの指摘や問いかけにひるむことなく反応してくる若い熱意に，眩しいような可能性をみる思いがした．

〈長岡大樹案〉大架構の本質をよく捉えた上で，しかも単調な形にせず，またさまざまな機能を組み合わせることにより空疎な，あるいはスケールオーバーな平面とならぬ心配りがなされている．〈高木俊輔案〉比較的小さなアーチ群とそれらをつなぐ折板構造の屋根という2つの構造形態をうまく組み合わせて，しかも全体の形は構造一辺倒ではない面白い形にまとめている．頭で考えたものを模型で検討し，それでまた考え直すというスタディーのサイクルがうまく活かされて生まれた案といえよう．〈香川貴範案〉大架構屋根を支柱ごとにスライドさせることによって，多機能性をもたせようとするもので，いかにも今日的で大胆な案．CADによるプレゼンテーションも一応の効果をだしているが，案に奥行きが感じられぬ点がやや気にる．〈山口路夫案〉中央部に扁平なアーチを架け，これを軸に大空間を構成するもので，それ自体は目新しいものではないが，敷地北側の川に突きでたコーナー部分を内部空間の構成要素として取り込んだり，少々オーバーな嫌いもなしとしないが，アーチ上面を中央大橋方向からウォーターフロントへの架け橋とするといったあたりに，配置計画とのバランスがよく考えられている．

講評　非常勤講師 木村克次

大空間建築という課題は，従来においてはあくまでも要求される空間およびその空間の演出をいかに表現するかという，いうなれば，ニーズ型の創造であった．宗教的，政治的ニーズがあり，それを見事に表現する方法として大空間構築技法が用いられていた．いっぽう現在では，確固たるニーズはもはやほとん

どの場合存在せず，シーズ型にかなり近い状況となっている．したがって設計者がつくりあげた空間が，利用者の思いもかけない利用方法により用いられているのである．これは設計者にとって必ずしも敗北とは限らないが，少なくともこれからの設計者は新たなマーケティングの創造能力をも要求されていくことを覚悟しなければならない．

高木君の作品は，大空間イコール無柱空間という大前提を捨て，ユニークな形態を採用している．また構造的にも興味のもてる作品ではある．ただなぜこの空間の中にテニスコートを配置するのか，なぜ線対称のプランにもかかわらず軸対称性を形態にもたせているのかという，興味をもたせる案だけに，不満も強く残ってしまう．これとは対照的な香川君の作品は，羊羹型の空間の中にさまざまな用途あるいは演出に対応する仕掛けを設定している．このような考え方は空間の演出という観点からも今後大きな可能性をもっている．ただしこれらの仕掛けの意図がはっきりしない．現代の技術をもってすればこれくらいのことができるというだけでは，設計者として少し寂しいのでは…．長岡君の作品は，各種のスポーツを組み合わせて大空間としている．現実性をもっとも有している利用形態であると思う．が，単なる空間の組み合わせではなく，いかに融合させるかがこのような複合体における課題ではないだろうか．山口君の作品は，用途を限定し，それに対する空間をどうするべきかという課題とまじめに取り組んだ点が評価される．また屋根の上を一般に開放することも今後十分考えられる手法である．ただし，渡るという行為はあくまで何らかの目的地に向かうという要求がさせるものであるのに，この案では何のために人がわざわざ屋根を歩行するのかが曖昧なままとなっているのが残念である．

今回の作品はいずれも個性のある作品であり，大変興味深く見せてもらった．このような作品の中から大空間建築における新たな表現が生まれることを今後も期待する．

講評　非常勤講師 久保寺 勲

3年生前期の設計製図第三の課題「大空間建築」をみさせていただいて4年になるが，この間に日本の建築にかかわる最大事件は阪神大震災であろう．地震と大空間建築が直接結びつくものではないが，言うまでもなく大地震は超高層であれ，大空間であれ，民家であれ同じように襲ってくるものであり，当課題の作成時期が阪神大震災から1年半経過した時点であることから，構造面で何らかの形で耐震性を相当に意識した作品がでてくることを期待していた．しかし残念ながら，この点に関しては震災前の学生諸君の作品と変っていないように感じた．阪神の経験から被害の現れ方は地盤の特性で大きく変化する．課題の設定地が隅田川岸で地下数十mに及ぶ軟弱地盤を有する場所であることから，地盤の固有周期が長周期となり大空間建築の周期とほぼ一致すること（共振の可能性），地盤の液状化の危険も大きい地域であることなど，計画時点で配慮すべき構造課題は多いはずである．

もちろん学生諸君は地震や構造の専門家ではないので，詳細な検討や数値解析は必要ないが，明らかに地震がきたら危ないと思われるような構造には配慮願いたい．大空間建築は鉛直力にしても，地震や風による水平力にしても，屋根全体の荷重を集約して地盤に伝える特性をもってるので，支持部分近傍の構造的納まりが特に重要になるが，この部分で危うい作品が多々目についた．したがって学生諸君には，構造物全体の力のバランスを大把みに捉えて効率的に力を処理できる安定形状を表現できる構造的センスを磨いてほしい．

意匠計画面で非常に優れた作品があるいっぽうで，構造センスを疑う例も多いことを学生自身が認識すべきであると思う．建築に限らず技術の発展は大災害などの事件を契機に大きく発展してきた経緯は疑うべくもない．その意味で日本における耐震構造の歴史を大きく変えるほどの大惨事を映像ではあっても直接目にした学生諸君なのだから，2年前（阪神大震災以前）の学生とは異った構造的感受性を身につけていて当然であるし，少なくとも建築を学ぶ限りそれが義務であると思う．

講評　教授 仙田 満

大空間建築はストラクチュラル・デザインの課題である．したがってそこに構造的なアイデアが存在しなければ評価されない．しかし，いっぽうで大川端という立地性も十分考慮した提案でなければならない．長岡君のスポーツプラザは外部空間との関係に優れた解決をみせている．アリーナ，プール，武道場というスポーツのための空間と，図書館，レストラン，店舗などをうまく構成し，それに大屋根を架け，複合的機能を一体化させる意図をみせている．また川との関係もうまい．パース，模型とも環境的にも魅力的である．香川君の提案はシステマチックで可変性に富む空間を意図している．周辺環境との関係についてももう少し説明的であってもよいと思われる．山口君のスイミングプールの提案は，運河との関係，立地のポテンシャルをうまく利用している提案であり，構造的にも十分おもしろい．高木君のアリーナの中央に大きな橋が立つという案は極めて常識的ではないが，その造形的発想から魅力的な内部空間を折板によってつくり，ユニークでおもしろい案に昇華させることに成功している．

大きな空間をどのように構成していくかということはストラクチュラル・デザインの醍醐味であって，多くの学生のこの分野への挑戦を期待したい．

只野康夫
Yasuo Tadano

1939年　神奈川県生まれ
1964年　東京工業大学建築学科卒業
　　日建建設入社
　現在　日建設計東京本社副代表
主な作品：埼玉厚生年金休暇センター，法政大学多摩キャンパス，筑波国際科学博覧会テーマ館，豊洲センタービル，キャノン下丸子本社，パシフィコ横浜・国立横浜国際会議場

木村克次
Katsuji Kimura

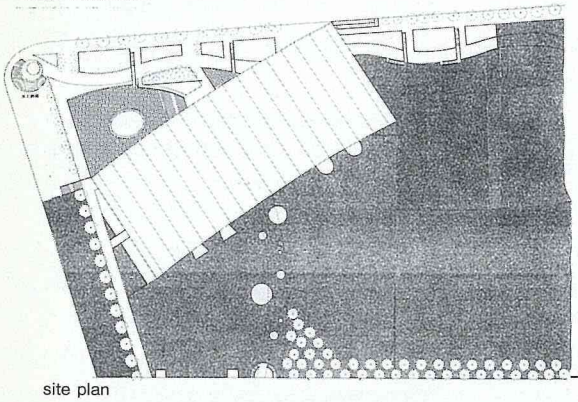
1940年　秋田県横手市生まれ
1964年　日本大学卒業
1993年　東京工業大学にて工学博士取得
　現在　東急建設㈱設計本部構造設計部長

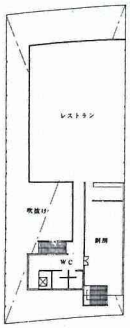
久保寺 勲
Isao Kubodera

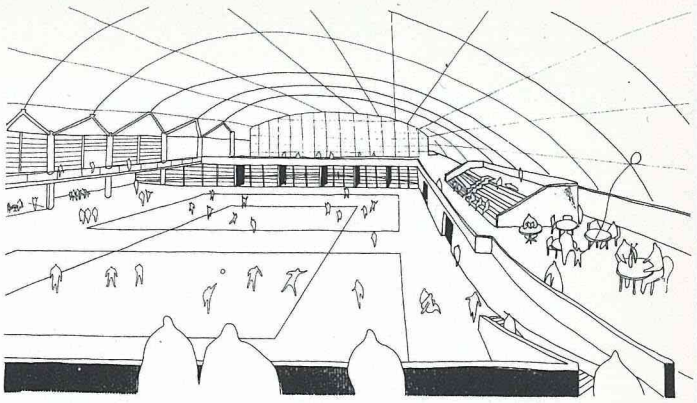
1944年　長野県塩尻市生まれ
1969年　名古屋工業大学建築学科大学院修士修了
1969年　巴組鐵工所（現巴コーポレーション）建築構造設計部
1983年　同構造設計部部長
1986年　東京工業大学にて工学博士取得
1989年　巴コーポレーション取締役
1993年　同常務取締役
1994年　同代表取締役専務，現在に至る

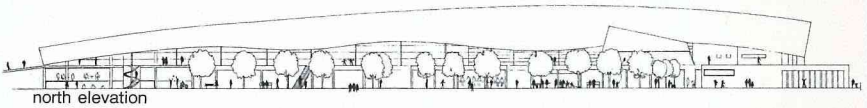
大川端スポーツプラザ
Sports-plaza in Okawabata

長岡大樹
Taiju Nagaoka

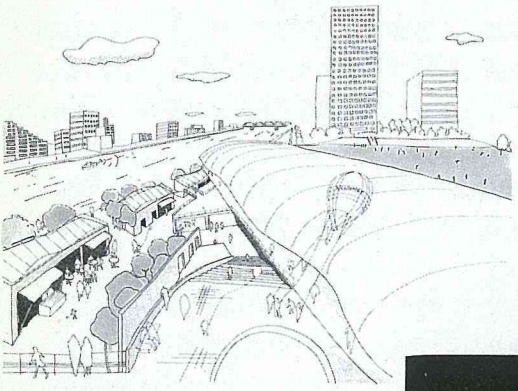

site plan

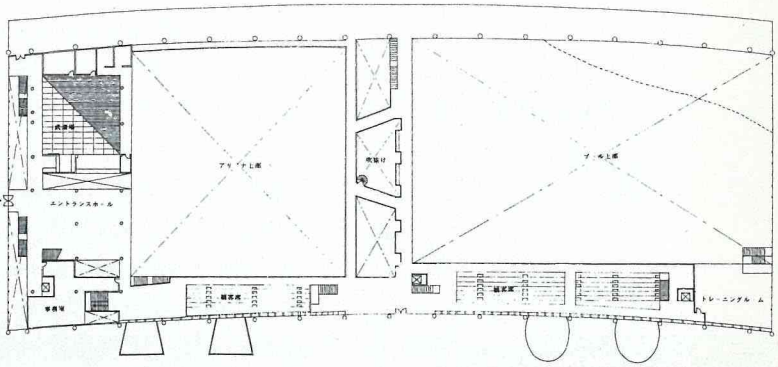

2nd floor

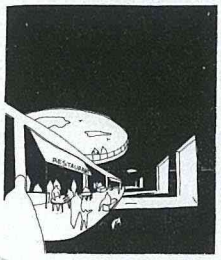


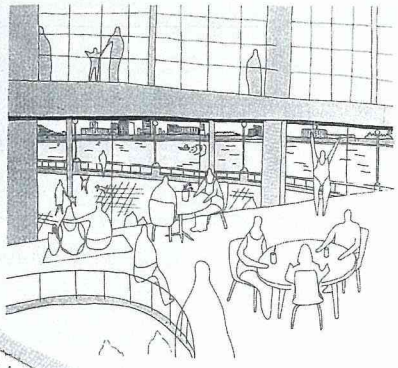

north elevation

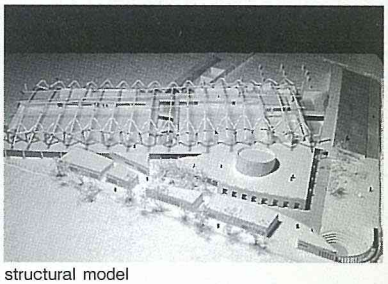
east-west section

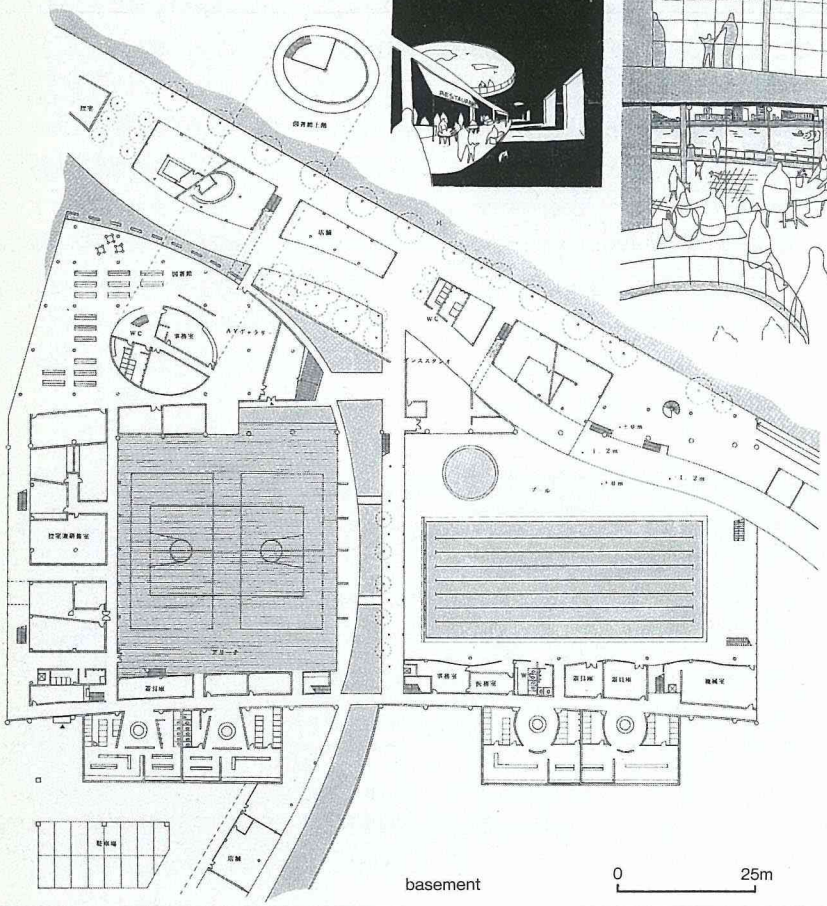




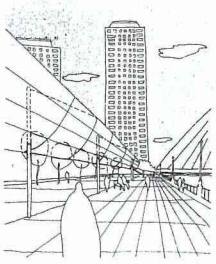





structural model


basement

0 25m

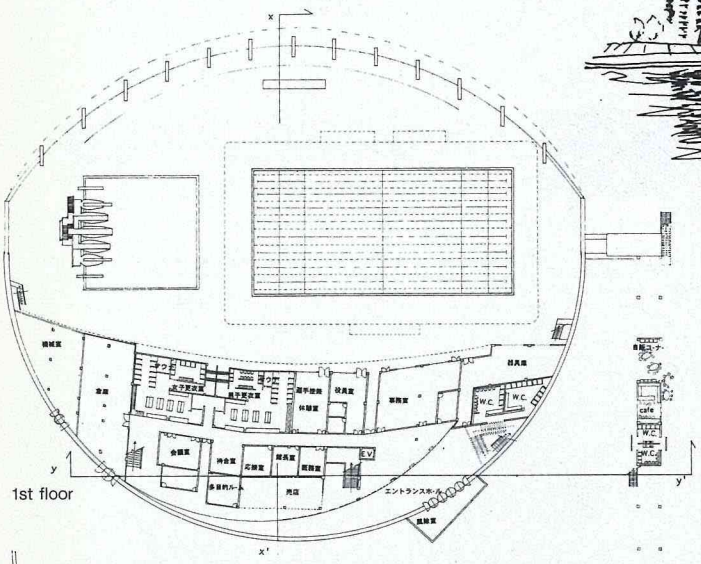


■大空間建築は，その規模が大きいため，物理的にも情報的にも周辺環境に与える影響が大きいように思う．にもかかわらず，この手の建物は，形態的にも情報的にも閉じてしまっていて，それだけで完結してしまいがちである．どうせ大きいものを作るなら，もっとたくさんのものと関わっていた方がよいのではないだろうか．■計画にあたっては，この敷地が，近年の周辺河川の護岸整備にともない，周辺を取り巻いた遊歩道の重要な一地点になりうることが予想されたため，これらの遊歩道から連続する形で，諸施設を大小さまざまな通路が，つないでいく構成をとることにした．このような構成をとることにより，この施設へのアクセスを容易にすることはもちろん，さまざまな施設を何の違和感もなく横断することが可能となる．■結果として，さまざまな性格をもつ機能は，おおらかな大屋根のもと，ゆるやかに統合され，訪れる人にさまざまな発見をもたらすことになるであろう．

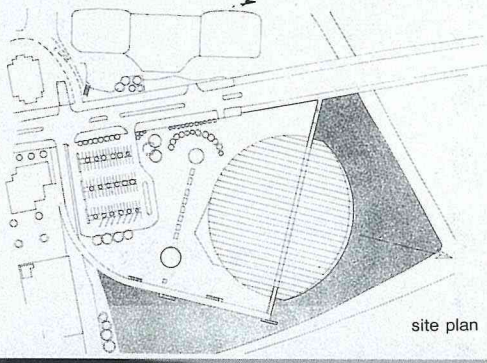
Tsukishima Swimming Center

山口路夫
Michio Yamaguchi

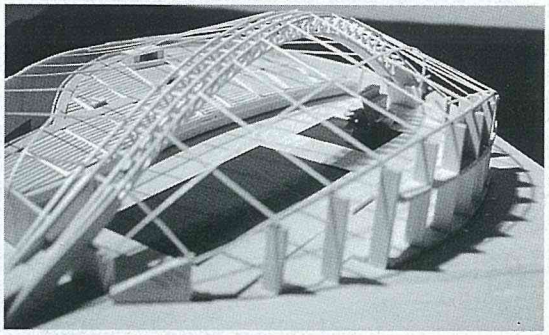
exterior perspective



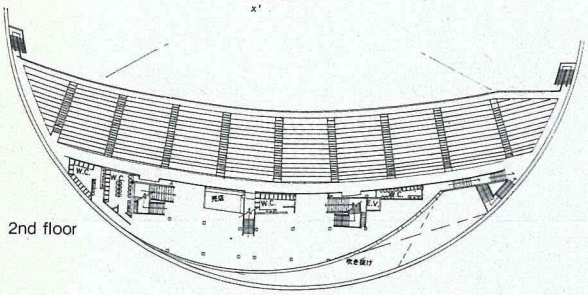
1st floor



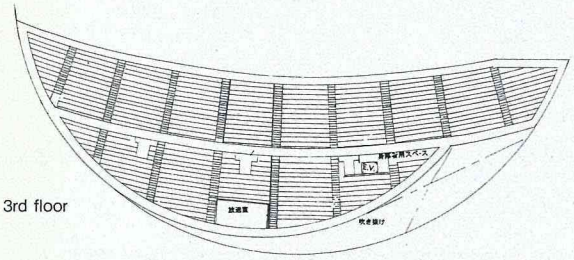
site plan



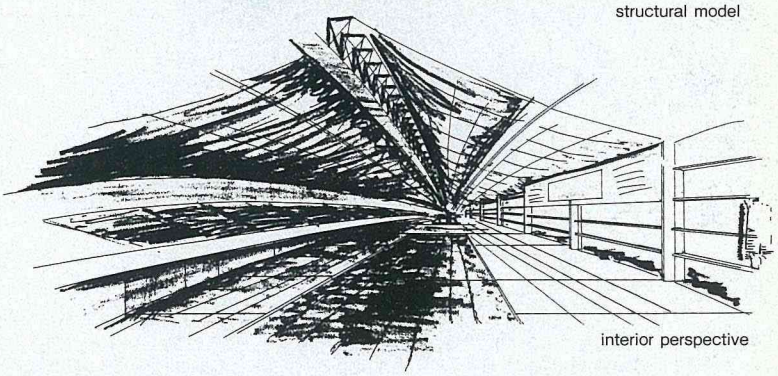
structural model



2nd floor

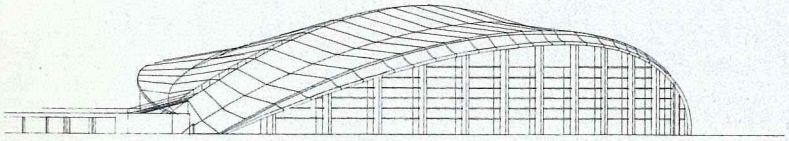


3rd floor

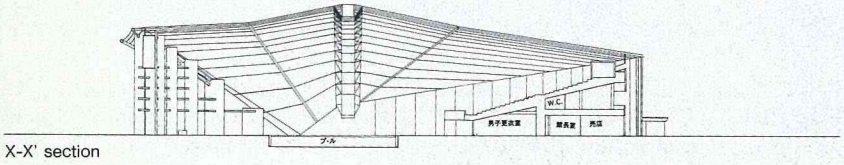


interior perspective

0 25m



north elevation

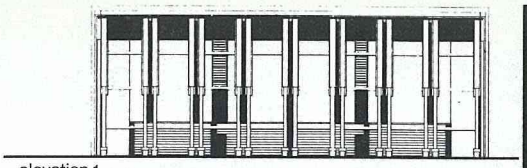


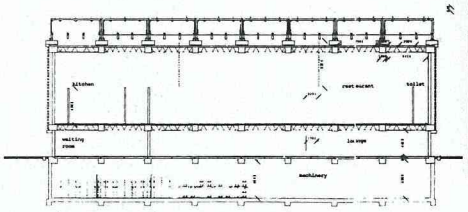
X-X' section

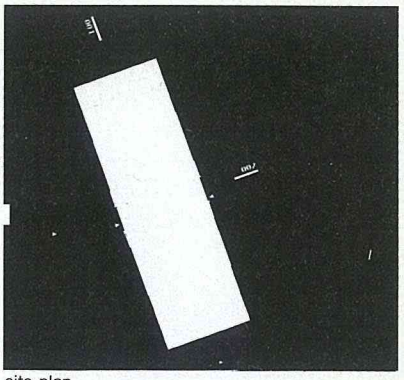
①構造上のメインアーチを中央大橋から川岸への橋として捉え，人はそこを歩くことができ，中の様子をうかがうことができる．また，大空間からは自然光を取り込む採光の場となっている．
②リバーシティー21地区から歩道を設け，川岸へと誘う．その下は住民が自由に利用できるスペースとして開放される．
③円形に近い全体から，三日月形の観客席をわずかに傾け，生じる隙間をエントランスとした．そこは閉ざされた空間で大きく開けたプール側と対比される．

Shift, and Fix It Up

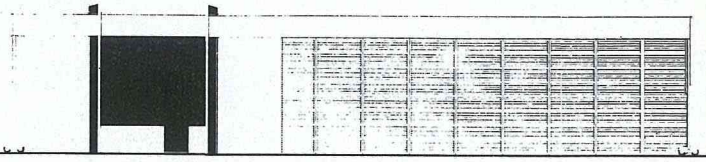
香川貴範
Takanori Kagawa

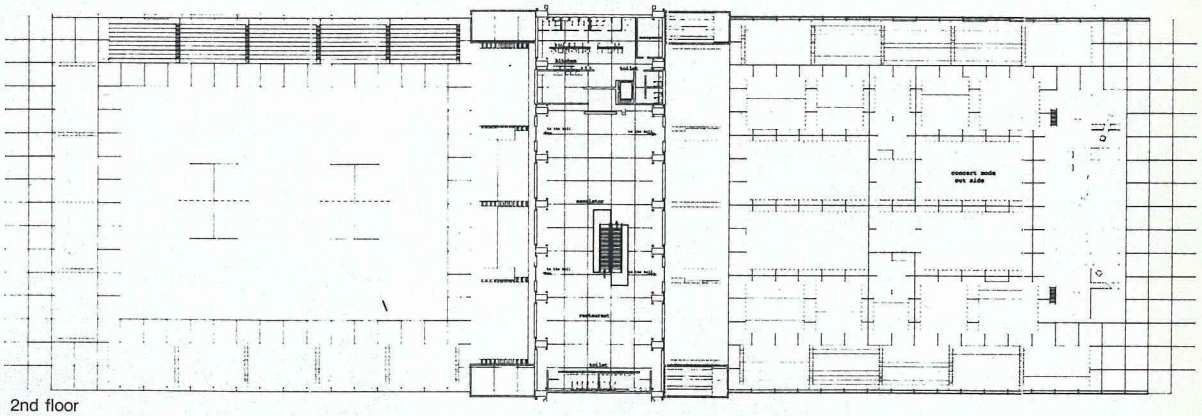

elevation 1

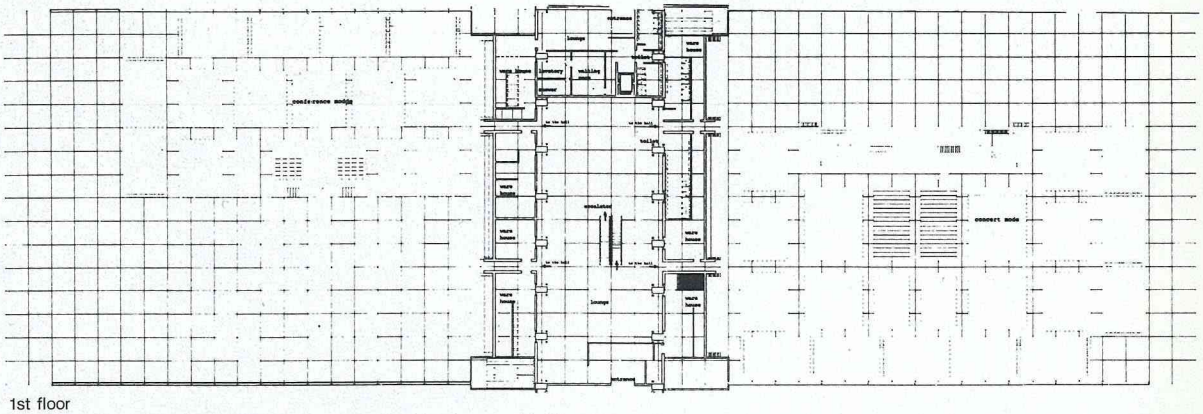

section

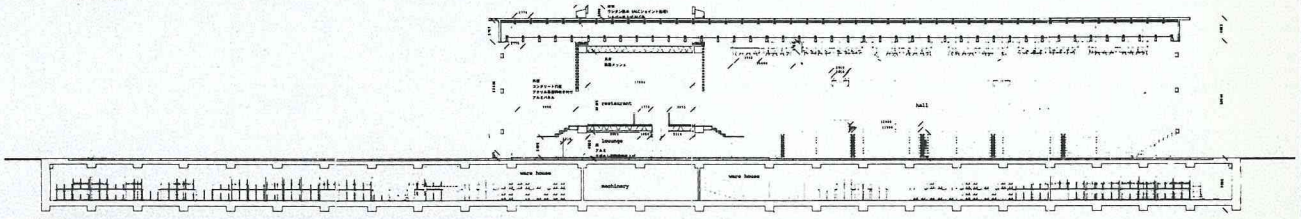

site plan

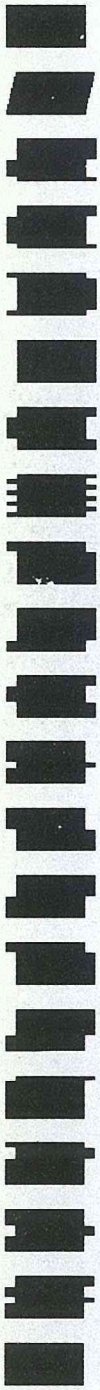
0 100m

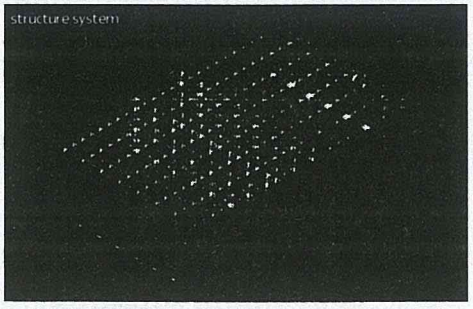

elevation 2


2nd floor


1st floor


section


variation



structure system

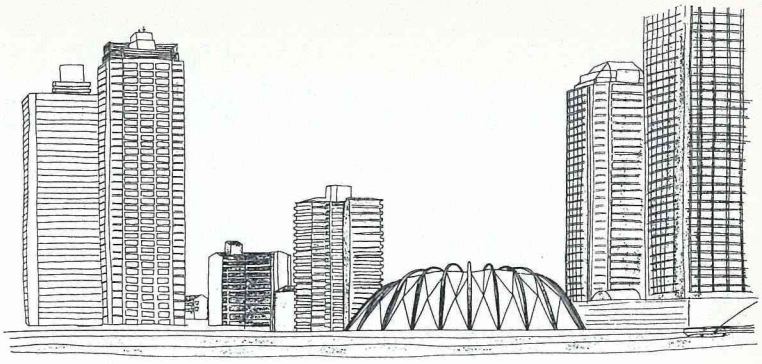
■これは大空間建築である．われわれは，住宅をつくる際にはエレベーターの介入にすら躊躇する．しかし，large scaleの建築においては，動かすことさえためらわない．これは権威の象徴なのだろうか？　技術力の象徴なのだろうか？　とりあえずlarge scaleの建築というものが普通の規模の建築とは違ったものであることは間違いない．

■この機械的な建築もまたlarge scaleである．8つの帯状に取り付けられた屋根は，それぞれが，独立して長軸方向にスライドする．その後，戸袋に収められた巨大な引き戸によって使用される空間が閉じられる．各々の空間はコンサートや講演，スポーツなどのさまざまな用途に合わせて決められることになる．ここでは予め〝決められた大きさの空間〟は用意されておらず，目的に応じて作り換えられる．

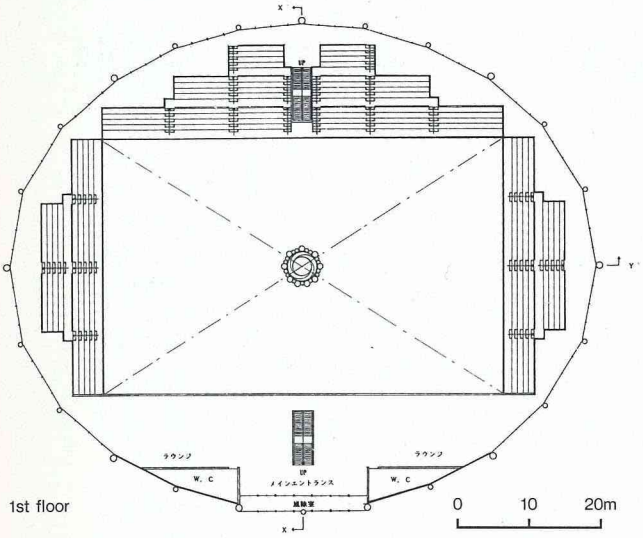
■間延びした湾岸地区にこの建築は何を提示できるのであろうか．

佃競技場
Tsukuda Gymnasium

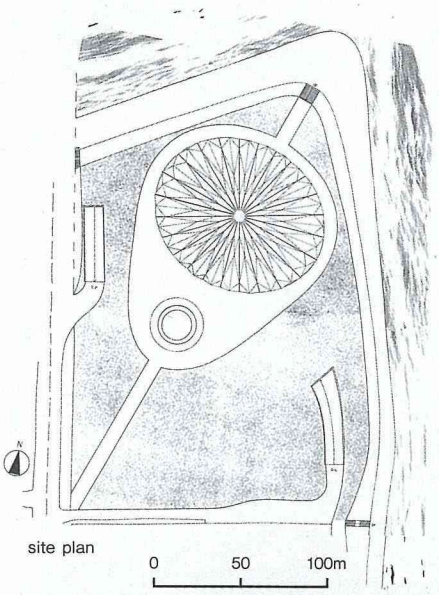
高木俊輔
Shunsuke Takagi



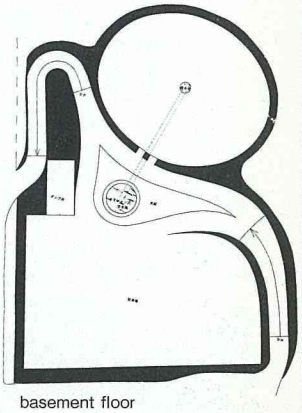
exterior perspective



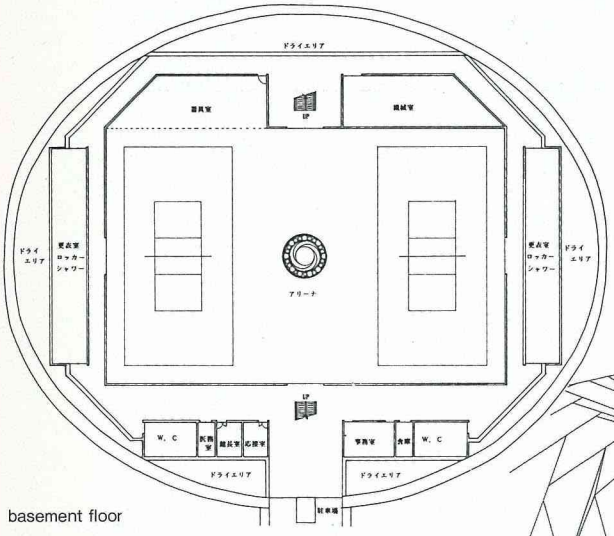
1st floor



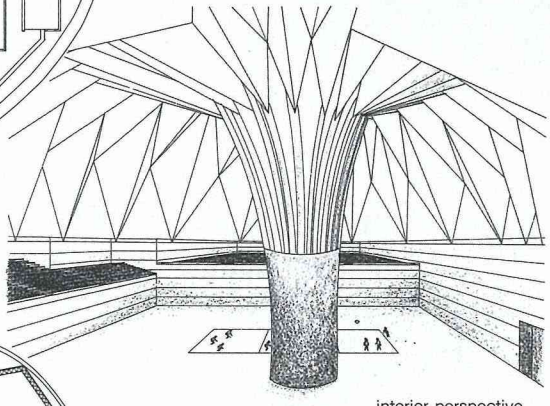
site plan



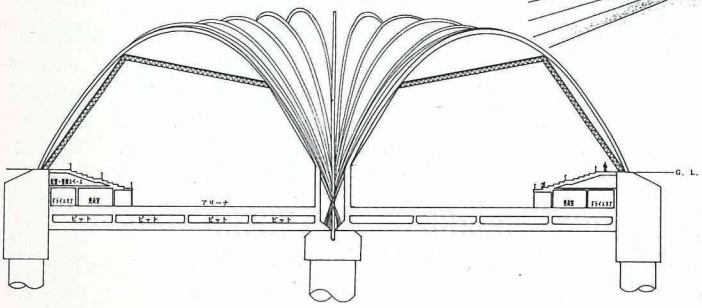
basement floor



basement floor



interior perspective



Y-Y′section

■計画敷地は隅田川の分岐点，佃島の北端．川面を吹き渡る風と開けた視界が都会を忘れさせる場所．交通至便のこの地に室内競技場を提案する．

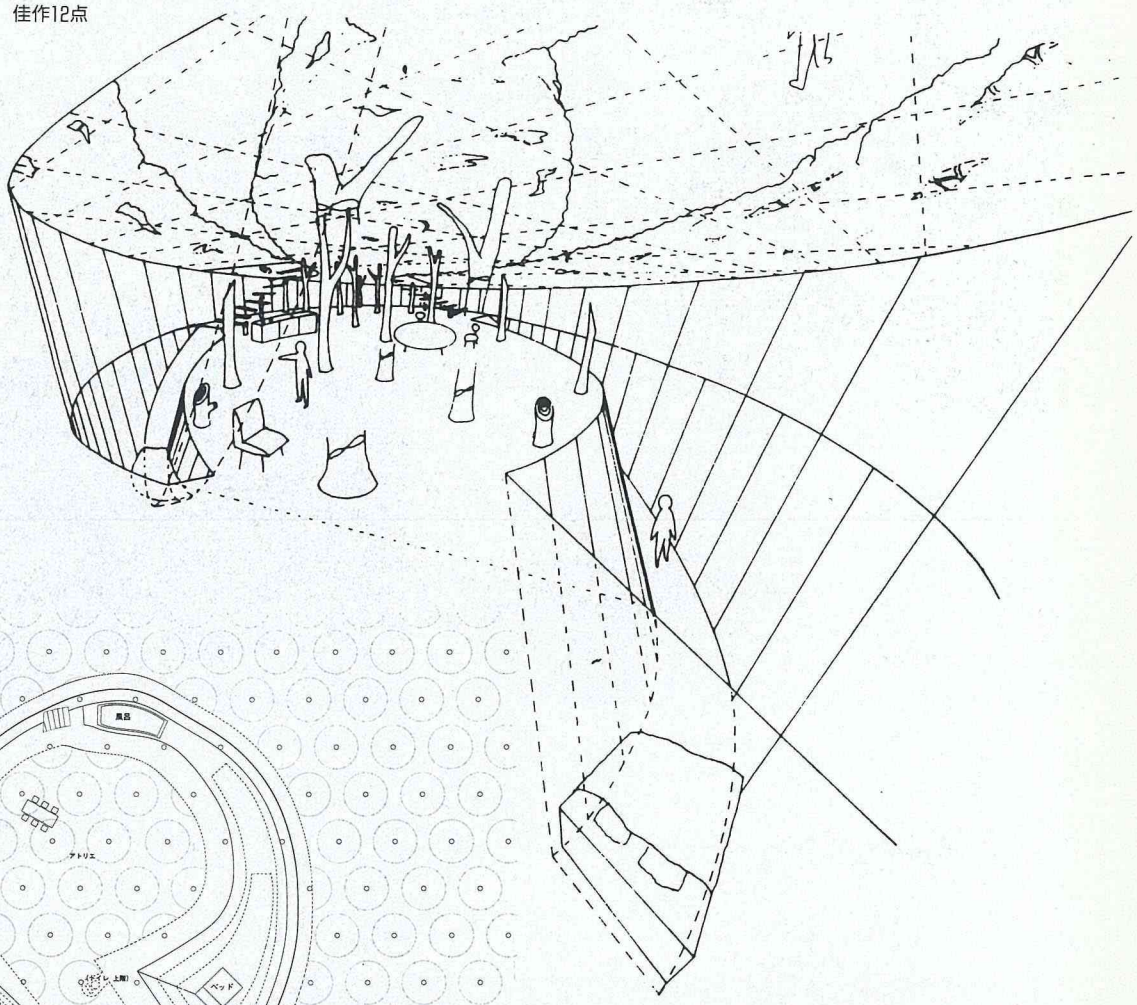
■外形としては，内部から周囲の連続したパノラマが楽しめるようコーナーのない平面形，周囲の高層ビルからの視線を考慮して上からみても面白い形を目指し，同時に，構造体自体の造形的な美しさを表現する形をと考えた．その結果，主構造体のスケルトン状アーチフレームが軽やかさを演出し，副構造体の折板の陰影が立面に表情を与えることを期待した．

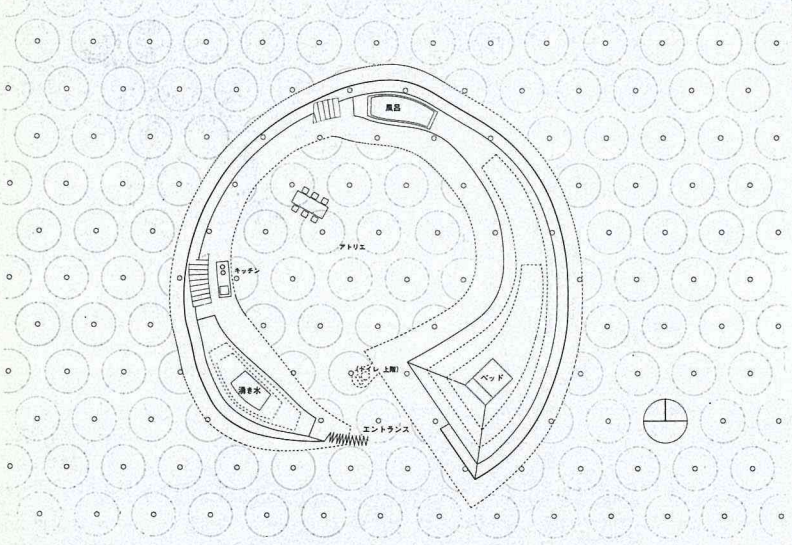
■中央のアーチ柱束部分の光井戸と周囲の窓から自然光を導入し，ともすれば暗くなりがちな大架構空間の照明を考慮した．降雨時には光井戸を伝う水流が美しいであろう．柱束部分に集まる雨水はサイフォンの要領で受水池に排出される．

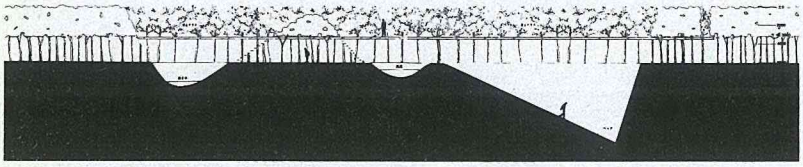
写楽の家
House for SHARAKU

■妹島和世賞
久野靖広(建築学修士1年)
Yasuhiro Kuno
安森亮雄(建築学修士1年)
Akio Yasumori
中井邦夫(建築学博士3年)
Kunio Nakai

主催：エス・バイ・エル株式会社
審査員：出江寛(委員長)
妹島和世　早川邦彦　内藤廣　村上徹　中島昭午
提出日：1996年4月15日
賞：大賞1点，審査委員賞6点，佳作12点







[距離を彫る家]

■浮世絵が一枚の紙と，滑らかな版木の表面に刻まれる1本1本の彫り跡から生まれるものであるならば，浮世絵師とは，いわば紙と版木との間に極めて微妙な「距離を彫る」ことによって絵を描きだす名人である．■彼にとって，線の太さや曲がり方などといった多様な差異は，すべてこの「距離」の変化として理解されているのだろう．■森林という天然の版木に彫りつけられた家．浮世絵師写楽にとって，この森での避暑の生活におけるさまざまな行為を組み立てることは，すなわち彼がここに見つけた日の照りつける豊かな森林の表面に「距離を彫る」ことにほかならないのである．

くまもとアートポリス参加事業

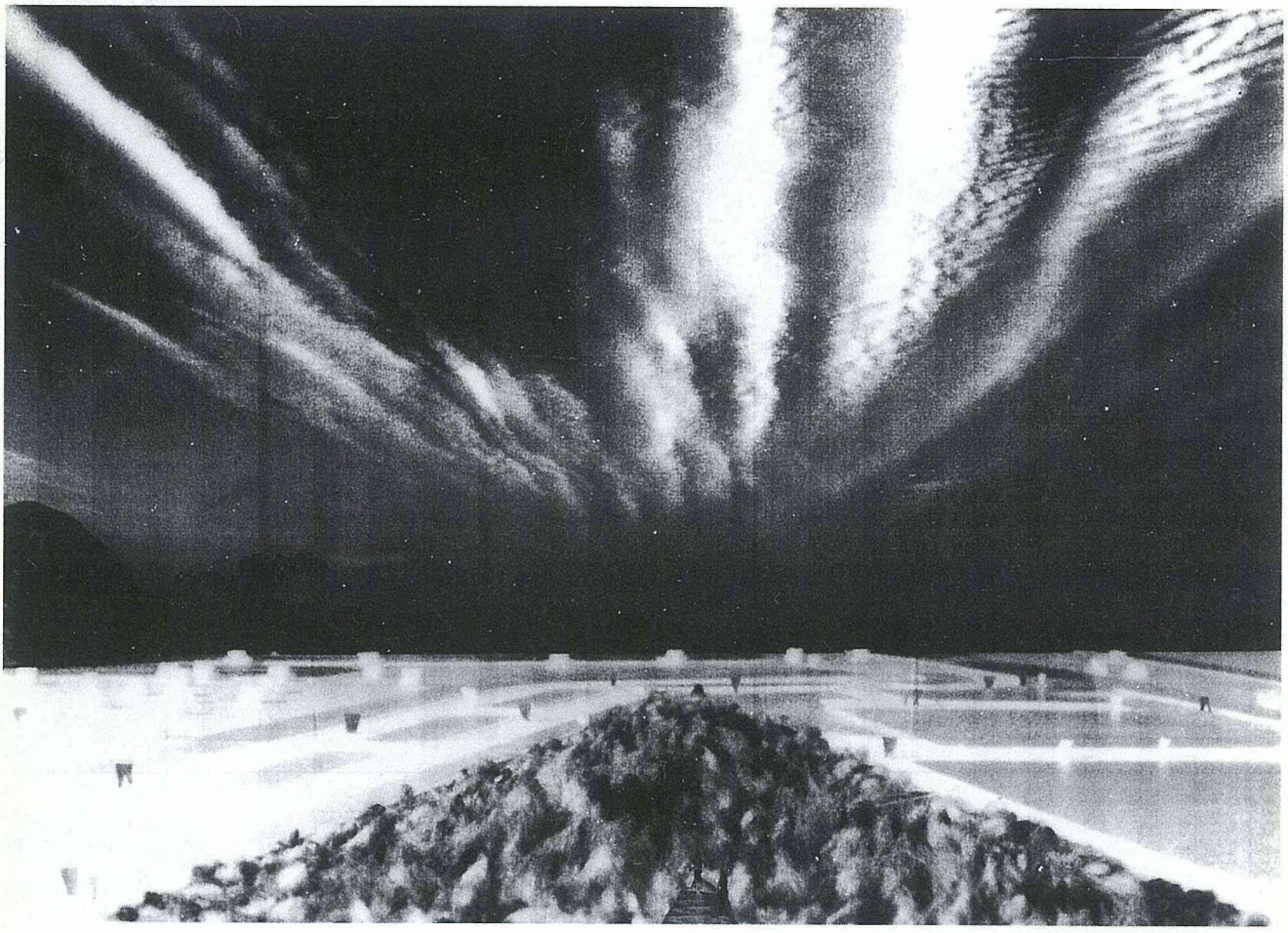
阿蘇町農村公園 アートプロジェクト

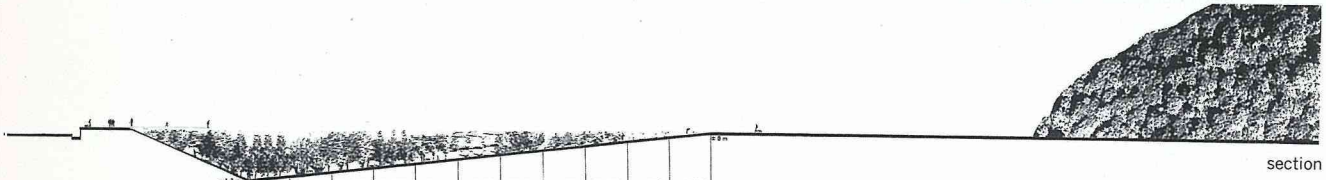
Design Project for the Rural Park in Aso, Kumamoto

主催：阿蘇町
審査員：磯崎新
提出日：1996年10月4日
賞：最優秀賞1点，優秀賞3点，佳作6点

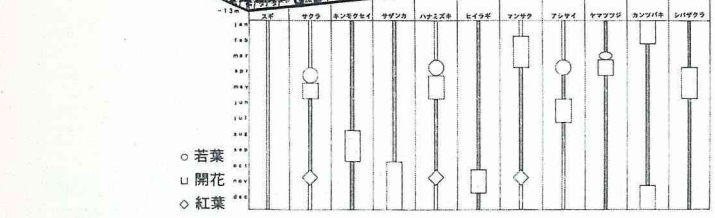
■優秀賞
はしご

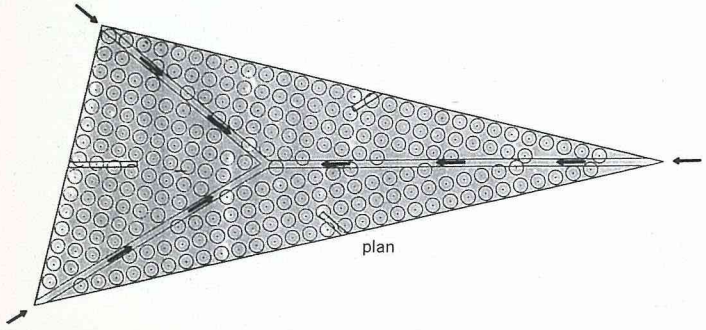
荒木裕紀子（研究生）Yukiko Araki
横山武志（人間環境システム修士2年）Takeshi Yokoyama
工藤由貴子（日本大学4年）Yukiko Kudo
庄野健太郎（武蔵工業大学修士2年）Kentaro Shono
太田啓介（建築学修士2年）Keisuke Ota
菅野二美（日本大学4年）Tsugumi Kanno
源田博（浅野工学専門学校3年）Hiroshi Genta
元谷豊（早稲田大学研究員）Yutaka Motoya





section





plan

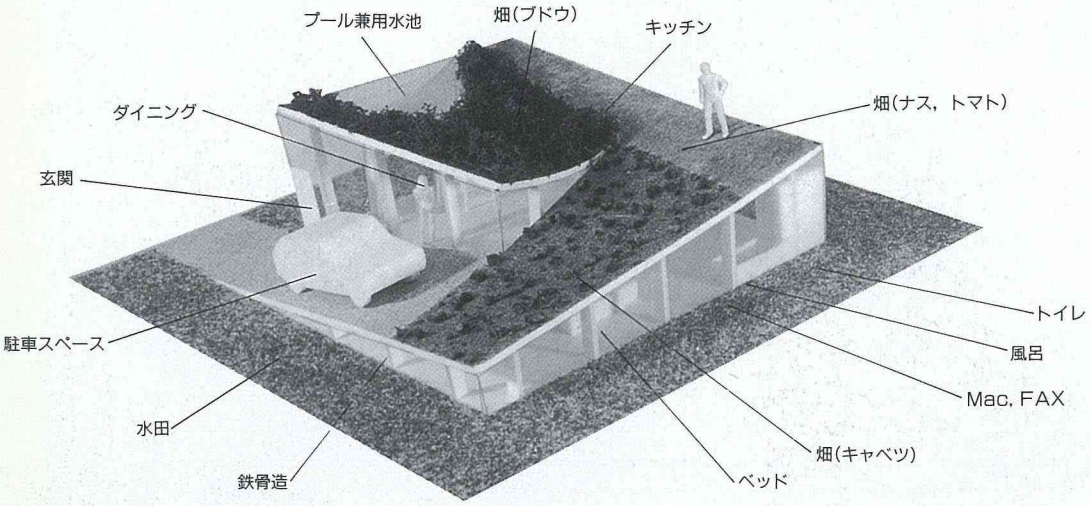
[緑湖]

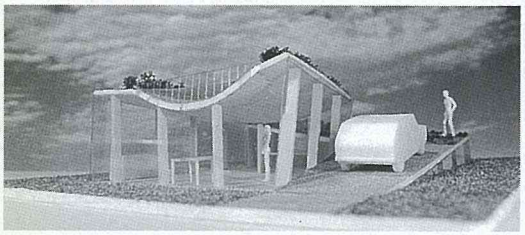
■敷地は阿蘇の外輪山と内輪山に囲まれた盆地のほぼ中央に新しく計画された農村スポーツ公園の中に位置する，約160m×80mの直角三角形の土地である．周囲はグリッド状に耕地整理された田畑がパッチワーク状に幾何学的な平面模様を形成している．敷地のすぐ隣にはこんもりと水平面から隆起した丸い塚が3つあり，外輪山に登るとこの強い平面と3つの塚，そして幾何学模様がよく目立つ．■私たちはこのような敷地形状，パッチワーク状の田畑，隆起した塚という強烈なコンテクストから，平面的には柔らかい絨毯のような新しい水平面を，断面的には塚が反転して土地をえぐったようなランドスケープを考えた．三角形の各辺から一定の角度で掘り込んだ土地に高さの異なる数種類の樹木を地表面からの深さに応じて植えていくことで，こうした柔らかい表面と反転した塚を実現した．■ふだん見おろされている山々の樹木を，周囲から張り出すブリッジの上から見渡したり，斜面を降りて樹木の中に潜ったりできることで，阿蘇の豊かな自然環境に囲まれて生活する人びとに新たな樹木との接し方を提示している．そして，この緑の湖は季節的に変化し，新しいパッチワークを阿蘇に描く．

21世紀の私たちの住まい
ライフスタイルの変化が住宅をこう変える
House for the 21st Century

■準1等
安森亮雄（建築修士1年）
Akio Yasumori

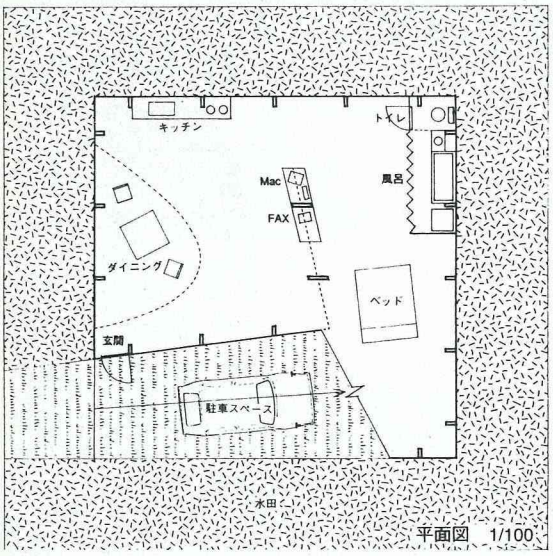
主催：大和ハウス工業・ライフスタイル研究会
審査員：高橋公子（委員長）
小滝一正　坂本一成　高橋鷹志　西出和彦　西村伸也　初見学　平手小太郎　東郷武　吉田健太郎
提出日：1996年8月7日
賞：1等1点，2等3点，佳作5点



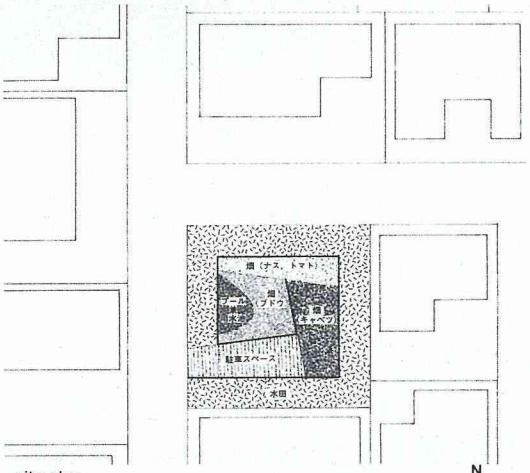


[大地をつくる家（田畑のある家）]

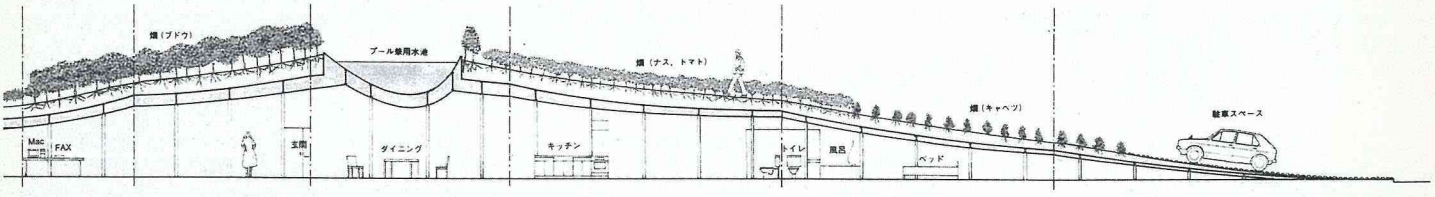
■このコンペでは，新しいメディアが発達した21世紀における住宅を求められました．■私は，スラブという建築の要素は，柱や壁に比べて建築性や空間性が希薄だと感じています．それだけに，ドライにスラブのモノとしての可能性を考えることは興味深いことです．ここでは「スラブの情報化」を考えました．■このスラブは，概念的には15m×15mの敷地に1本の切り込みを入れて持ち上げるという操作で成り立っています．スラブの高さが徐々に高くなることで，内部空間は微妙に差異づけられています．スラブの上面は水田やいくつかの作物の畑になっていて，最頂部のプール兼貯水池により水が供給されます．また，その厚みは作物の種類によって必要な土量や貯水池の水の荷重で決まっています．つまりここでは，スラブは空間を垂直方向に分節するだけでなく，水田，畑，水，それらの荷重という物理的な情報を扱うメディアになっているのです．■「スラブの情報化」については，この後の大学院の設計製図でもう少し発展させました．



平面図　1/100
1st floor

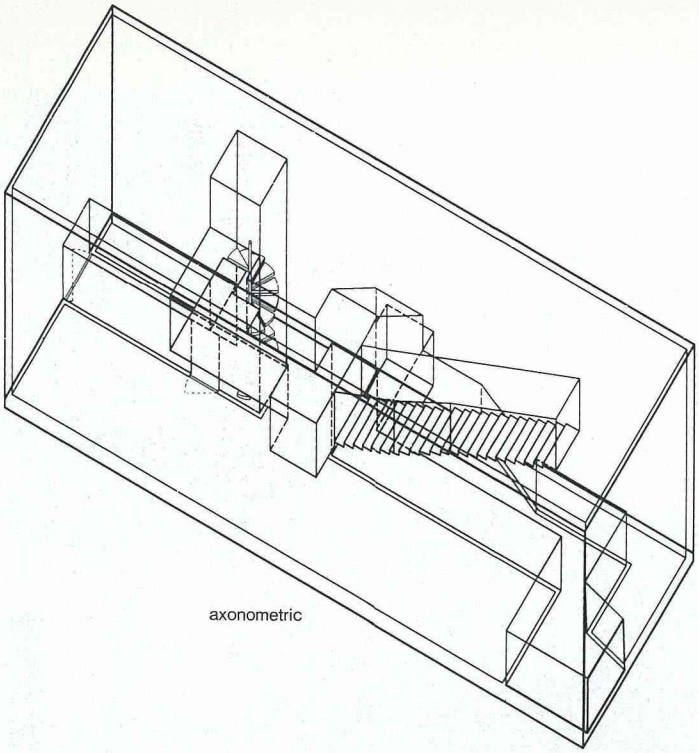


site plan

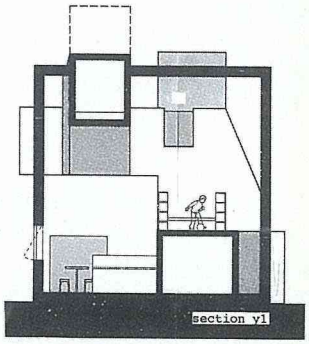


section
0　50　100m

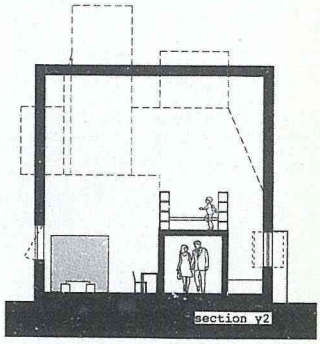
■2等
村田 淳(建築学科4年)
Jun Murata



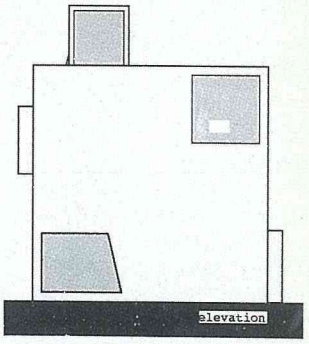
axonometric



section Y1

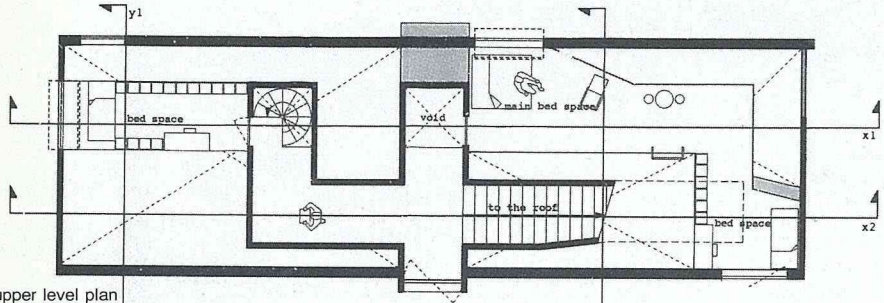


section Y2

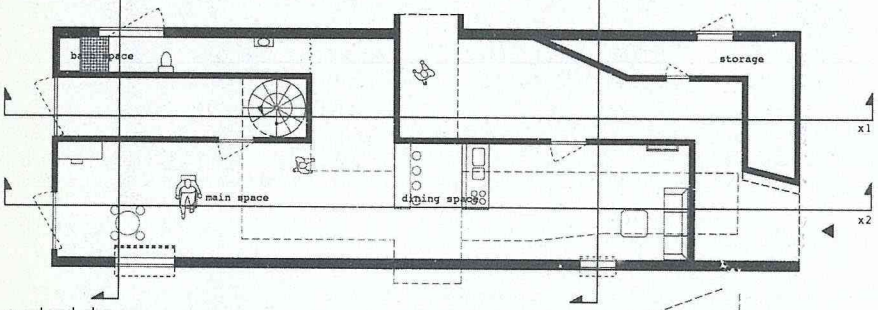


elevation

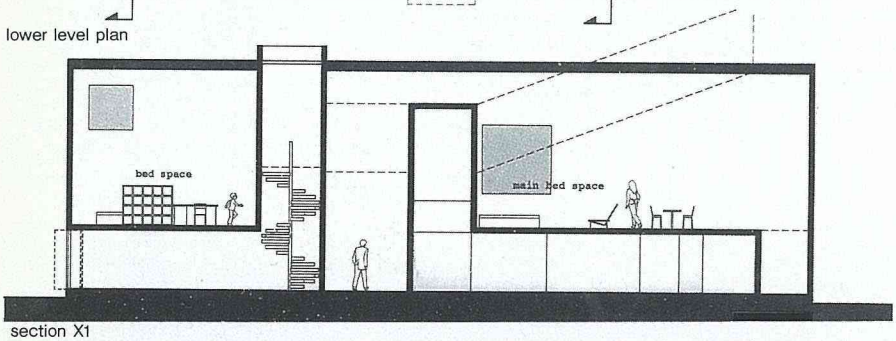
0 5m



upper level plan

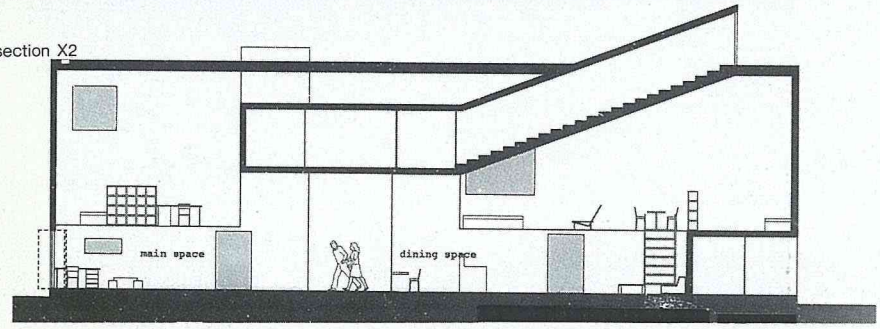


lower level plan



section X1

section X2



[虚の入れ子構成による住宅]

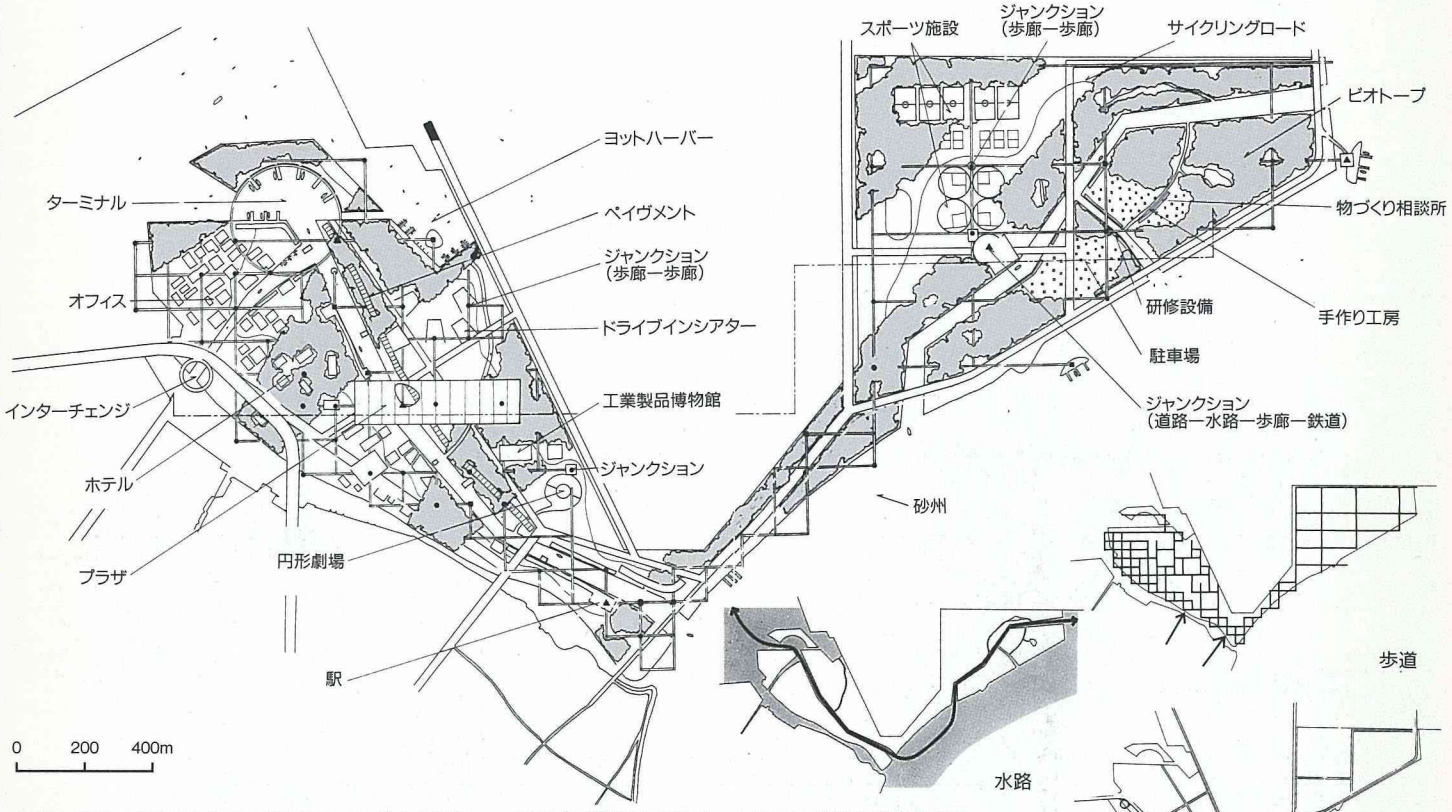
■これは21世紀のライフスタイルを想定し，それに対する住宅を提案するコンペの案である．ここでは，携帯電話やコンピューター回線に代表されるような，住宅の外部である都市空間に突然プライベート・スペースが発生する状況や，逆に住宅内部に都市空間が持ち込まれるという状況を捉え，これからは明確な都市／プライベートという分節ではなく，その境界が曖昧になり，入れ子状に両者が連続していくというライフスタイルが成立していくのではないかと考えた．■この住宅では都市空間から連続するチューブが，幅を変化させながら内部を貫き空間を分節する．住宅に外部空間が入れ子状に取り込まれ，さまざまな場を生みだしている．これは内部の中に内部をつくる従来の入れ子とは違い，いわば虚の入れ子といえるのである．

羽田空港沖合展開跡地利用イメージプロポーザル

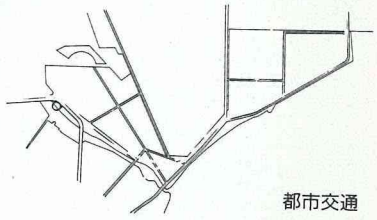
Image Proposal for Effective Use of Former Haneda Airport Tirminal Site

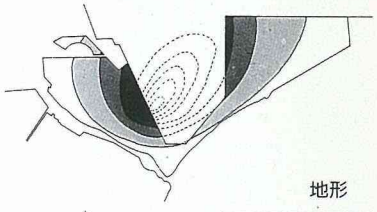
主催：東京商工会議所大田区総合開発協議会
審査員：蓑原敬　縄野克彦　名倉隆雄　田邊正喜
　　日端康雄
提出日：1996年４月15日
賞：最優秀賞１点，優秀賞１点，特別賞若干名

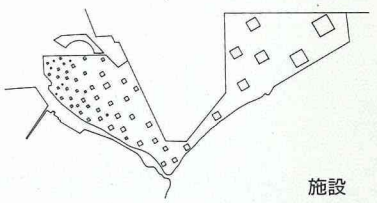
■優秀賞
柳博通（建築学修士1年）
Yanagi Hiromichi
中野智行（建築学修士1年）
Tomoyuki Nakano
土井良浩（情報環境学修士1年）
Yoshihiro Doi
丸山宏司（建築学修士1年）
Kouji Maruyama
瀬戸強士（環境物理学修士1年）
Tsuyosi Seto
新野聡一郎（社会工学修士1年）
Soichiro Niino

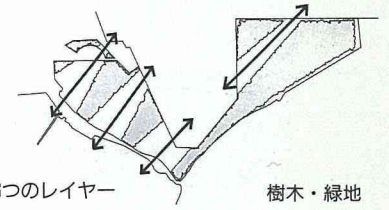


■私たちは，本計画を作成するにあたって敷地の特性を，200haと広大であること，大田区の住宅地・町工場・空港と隣接していることと考えた．■そこでこの敷地に対する社会的要請を，できるかぎりくみ取った上で，①複合的な機能をもたせること，②敷地内と周辺の町工場や空港との連続性を保つこと，③空港利用者，周辺の住民，遠来者などのさまざまな立場の人びとが利用可能とすること，この３点を目標にすえた．■まず，市街地・空港の空間的特性を敷地方向に延長させることによって，空間の重層化による相互の新たな関係の構築を目指した．そこで，敷地を構成する要素を独立した６つのレイヤーとして捉え，そのレイヤー内にさまざまな条件を含みこませ，重ね合わせた．その結果生じる要素の接点は，偶然性・意外性を備えた空間となる．■また，重なり合う交通システムにおいては，相互の空間のアクティビティーを目撃しあうことができる．プログラムに関しては，市民の主体的な参加を促進させるような手作り工房，消費者が敷地周辺の町工場の工業製品に親しむことのできるような工業博物館などを計画した．

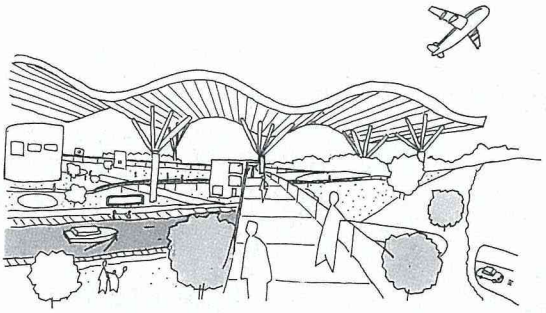




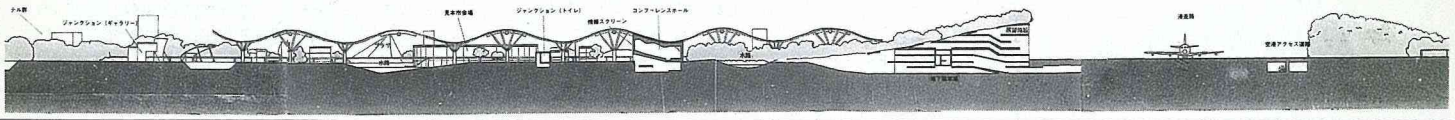




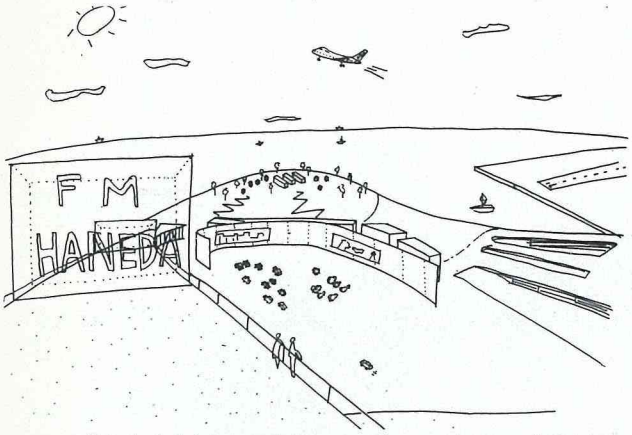
水上バス停から川辺のジャンクションを見る



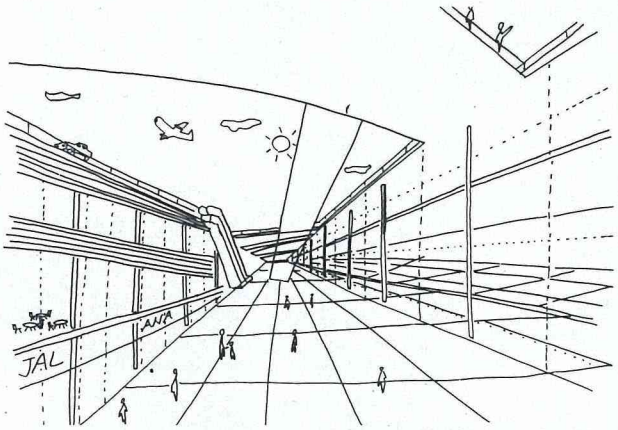
ジャンクションからプラザを見る



■アイデア賞
久野靖広(建築学修士1年)
Yasuhiro Kuno
塩見理絵(研究生)
Rie Shiomi
海野宏樹(人間環境システム修士1年)
Hiroki Unno

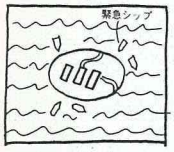


プラント上方からドライブインシアター，丘(キャンプ場)を望む

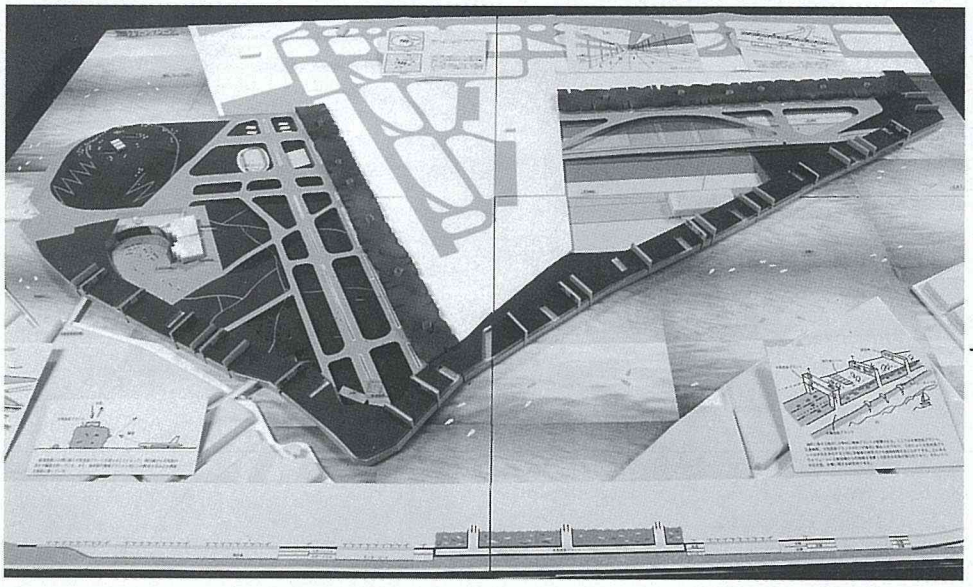


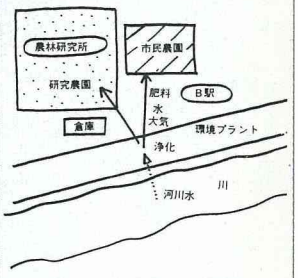
滑走路下のパッサージュ

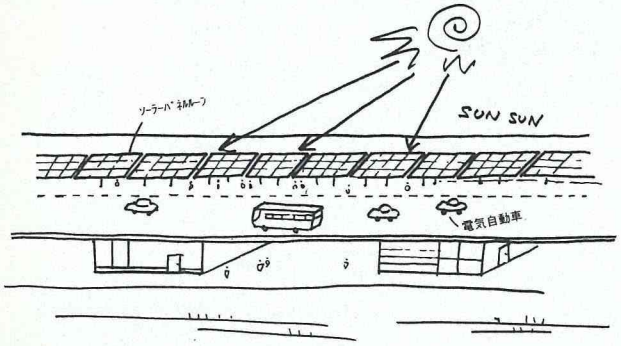
平常時

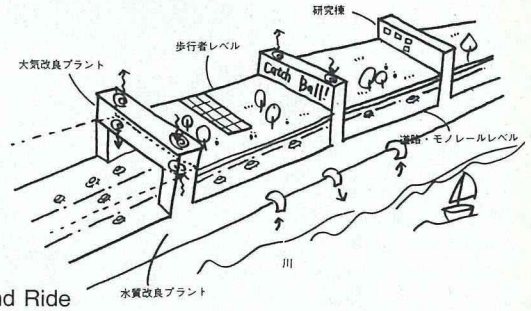


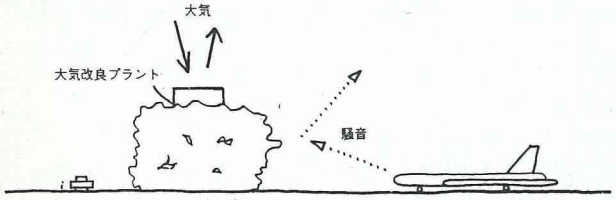
緊急時











Clean＋Park and Ride

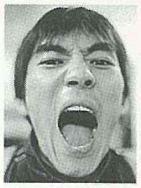
■敷地は多摩川の河口近く，かつ京浜工業地帯に位置するという条件から，汚水・大気浄化プラントを設けることで，東京湾の全体的な環境改善を期待した．また，羽田地区は横浜からの首都高速湾岸線と京浜急行，モノレールとが交錯する場であり，プライベートな交通手段から公共輸送機関，つまりパブリックな交通手段への交換点ともいえる．ここでの2つの交通間の乗り換えを誘発する巨大駐車場の存在は慢性的な都心部の渋滞を緩和することが期待できる．■建築は現在の滑走路，格納庫を再利用し，地形を連続的に変形させることで，滑走路下の空間や丘をつくりだしている．高速道路，各環境プラント，キャンプ場(避難所)，商業施設，国際交流施設，パーキングなどがこの大構築物＝建築のなかに織り込まれるようにつくられている．また，内部での交通に太陽発電による電気自動車を用いることで，クリーンで省エネルギーなシステムをつくった．■この計画では単に大田区の一地区という従来の枠組みにとらわれるのではなく，より大きな東京という都市が抱える問題を考察し，それらを建築がどう解決できるかということを思考の基盤とし，生活環境への提案を考えた．

第2回リビングデザイン賞

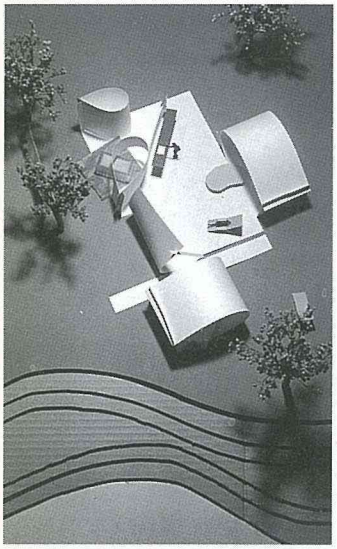
自分で組み立てられる家

House Constructed by Myself

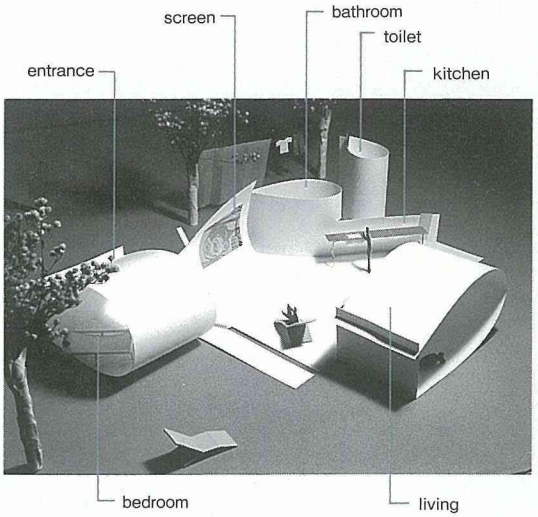
■入選
佐々木省吾(建築学修士1年)
Shogo Sasaki
千葉洋(建築学修士1年)
Hiroshi Chiba

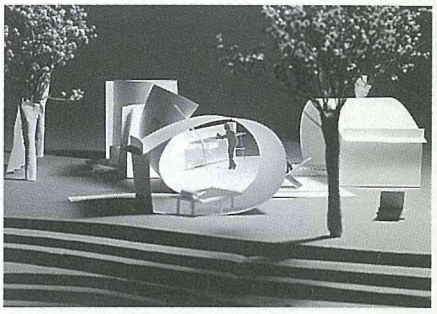


主催：リビングデザインセンターOZONE
審査員：柏木博　内田繁　沢田知子　キャサリン・フィンドレイ　大橋歩
提出日：1996年7月31日(一次審査)
賞：グランプリ1点　準グランプリ2点　入選15〜20点

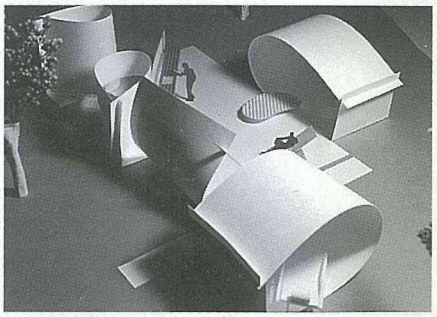


site plan

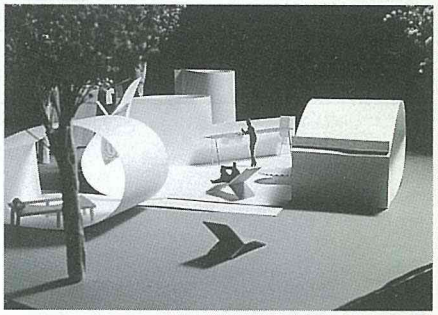




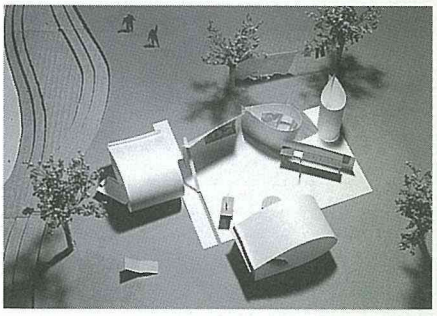
My wife is cooking

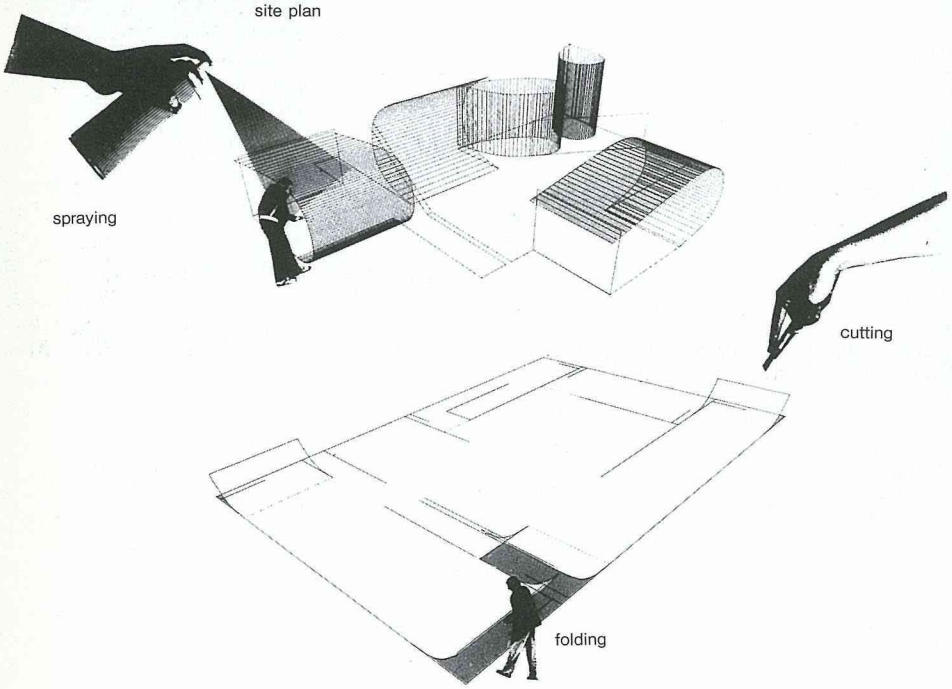


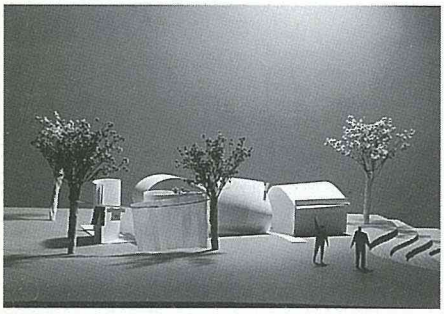
I am relaxing and watching my wife



My friends are coming to my house







elevation

[1枚の紙からつくる家]

■キャンプ時でもかわいい家に泊まりたい人に，安価でマイホーム気分を味わいたい人に，気持ちのいい草原や砂浜をみつけて，そこに住みたいと思っている人に．

■この家は1枚の紙からつくります．説明書の切り取り例にしたがって，組み立てていってください．そのほか，自分で設計したオリジナルの家にも挑戦してみてください．

■つくり方．①まず切り取り線にそって，カッターまたははさみで切り取ります．②次に，折り曲げ線にそって折ってゆきます．③そして切り込みしたもの同士を差し込んで，組み立てていってください．④組み立てが終わったら，丈夫にしたい部分に，コーティングスプレーを吹き付けてください．⑤コーティングスプレーが乾いて，表面が硬くなったらできあがりです．

価格：12万円（シート18m×12m＋コーティングスプレー8本）

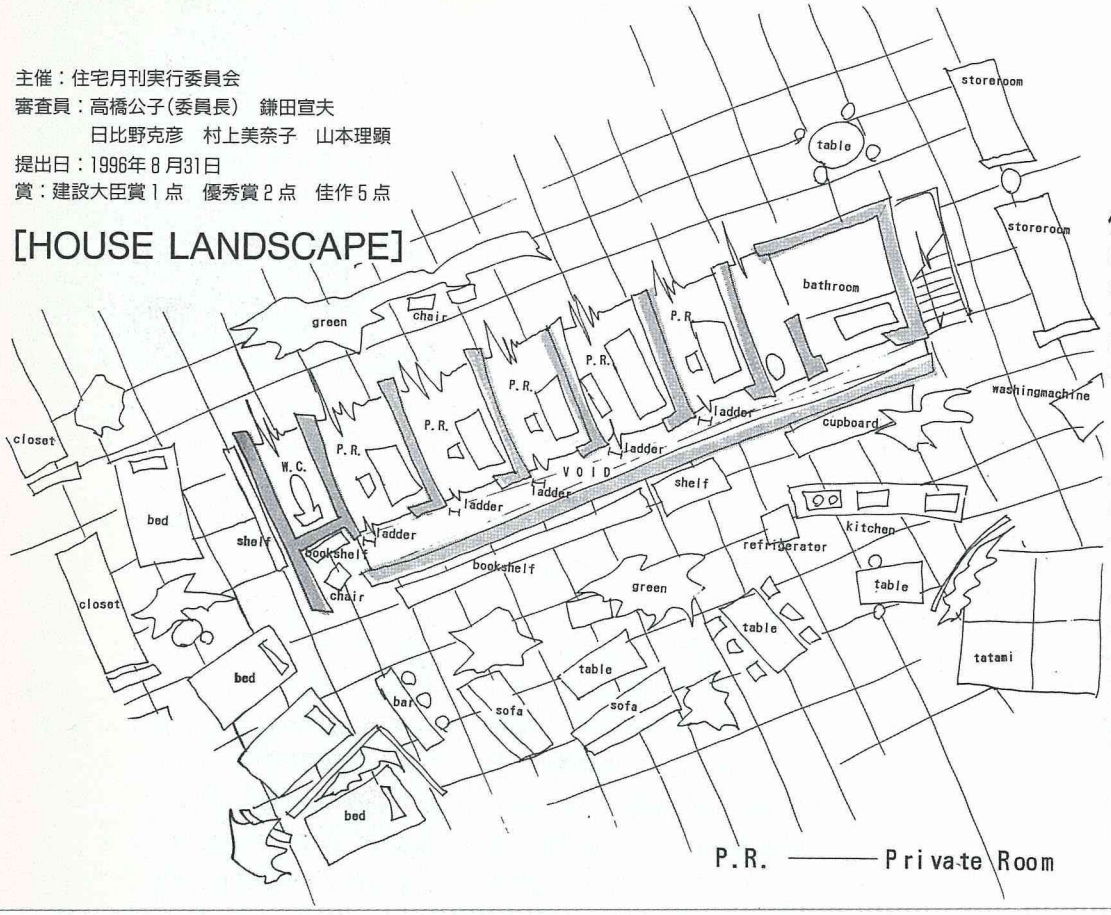
作業時間：組み立て4時間＋スプレー乾燥12時間．

住まい新時代
House for a New Age

■優秀賞
米津正臣(建築学科4年)
Masaomi Yonezu

主催：住宅月刊実行委員会
審査員：高橋公子(委員長)　鎌田宣夫
　　日比野克彦　村上美奈子　山本理顕
提出日：1996年8月31日
賞：建設大臣賞1点　優秀賞2点　佳作5点

[HOUSE LANDSCAPE]



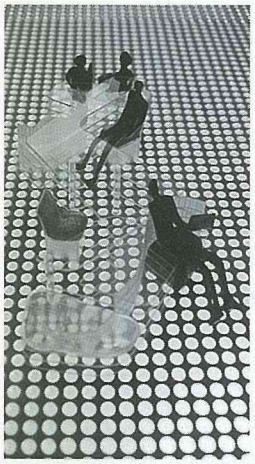
個室の凝縮

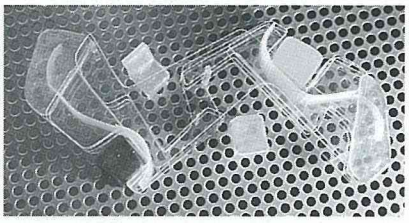
■個人に個室が与えられプライバシーが尊重される中，家族間のコミュニケーション不足ということが，ここ数年問題となってきている．■そして，次なる情報化社会はコンピュータやテレビ電話などの新しいメディアの普及により，その傾向はさらにエスカレートしてゆくことが予想される．■そこで今回個室の要素を，再整理，凝縮し，それをコア部分にまとめ，生じたスペースに，その他の要素をランドスケープしていった．■個々のプライバシーの確保と同時に，家族共有の場を広く豊かに生みだす．——もはやベッドやタンス，本棚は個室をとびだし，キッチンやテーブル，ソファとともにレイアウトされる．■なおコアに収められた各個室は，コア内のボイド空間を梯子によって「垂直」方向に連続させ，地上階では外部へ，最上階では屋上庭園へ連続させる．■また各平面は，コア部分を構造の幹として，敷地の形状に応じて「水平」方向に広がってゆく．

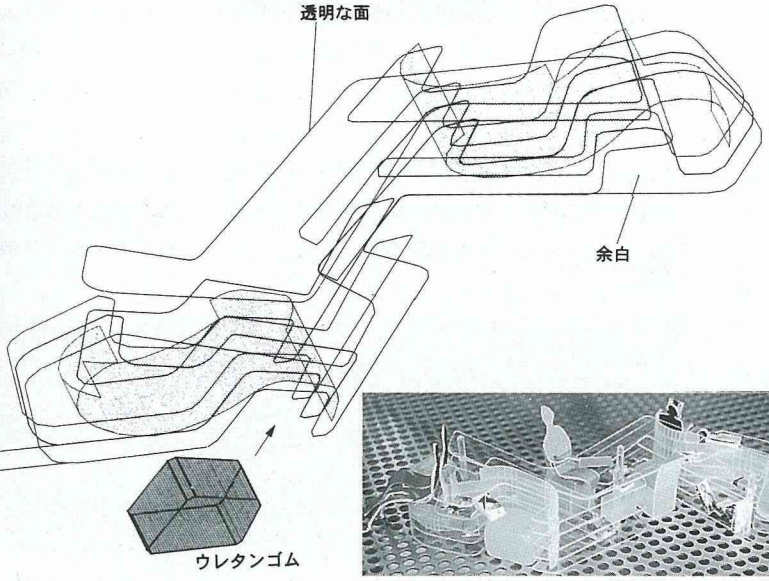
オフィスデザインコンペティション'96
ネットワーク時代のオフィスデザイン
Network Era Office Design

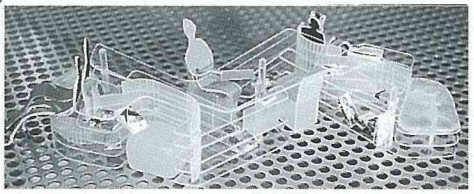
■奨励賞
増山絵理奈(研究生)
Erina Mashiyama
協力：高橋功次(人間行動システム学修士1年)

主催：インター・オフィス
審査員：妹島和世　中川憲造　服部紀和
　　藤井栄一　原田孝行
提出日：1996年9月20日
賞：フューチャーオフィス賞1点　準大賞2点　奨励賞若干名









■会社の共有書類のデータベース化や個人端末の自由化は，オフィス空間においてデスクトップや机等の配置計画を決定不能に陥らせることとなる．もはや，固定すべきものは見出しにくい．■130mmごとに層状に重ね合わせた各々形の異なる透明な面により明確な輪郭をもたない量塊を形成し，透明な塊としてのモノを分解した．面の重ね合わせの仕方によりさまざまなタイプを形成することが可能である．■面同士の重合とズレにより不定形な余白が生じるが，余白をウレタンゴムの塊で埋め，ヒトの座る位置を塊内において特定する．■透明な塊の動かないはずの形態は層状の非固定的なモノに分解されることで，流動性の表現を獲得するであろう．■これはヒトとヒトとの距離を定め隔てる一方で，モノ（透明な面）を共有することでつながれ，個人と全体（会社）という階層的な従属関係に縛られない，モノを介在したヒトとヒトとの関係—human network—を構築することになる．

Visitor's View

建築の可能性

Potentiality of Architecture

非常勤講師

竹山 聖先生に聞く

Visiting Kiyoshi Sey Takeyama, *Lecturer*

インタビュアー
菅 菜々子 Nanako Suge
本田哲也 Tetsuya Honda

インタビューは京都にある，竹山先生の事務所アモルフで行われた．学生時代の話や京大竹山研での研究内容，阪神大震災についてなど，先生の建築家としての姿勢を知ることができた．

先生の学生時代のお話を．

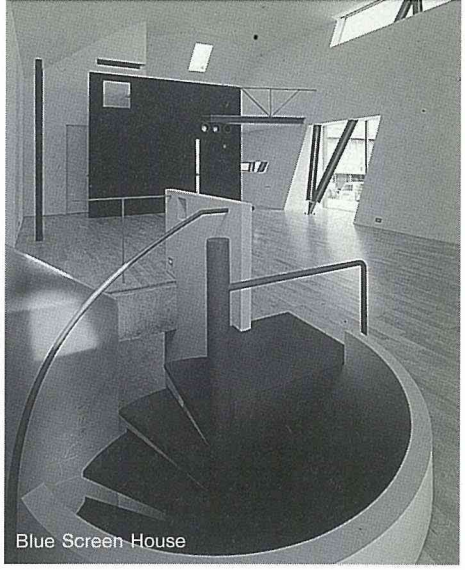
京大は，当時は学園紛争の後でね，けっこう教育の空白期なんですよ．増研っていってね，増田友也っていうカリスマ的な先生が，大学で設計をしていたんだけれども，けっこう密やかにやられていて，僕らはほとんど窺い知ることのできない世界だったんですよ．だから，設計をわりと好きで頑張りたい一般の学部生は，情報もなくてあんまり刺激もなくて．僕らの時は設計演習も講評会もなければ締切もまったく守られなかったから，なんかしらないけど徹夜して出すけど出したら終いだし．京大の時は建築は面白いとは思ったけれども，そんなにちゃんとトレーニングができていたかどうかは，甚だあやしいかな．

東大に行って，隈研吾とか小林克弘とかと同級生になって彼らと常に一緒に行動するようになると，やっぱりギャップがすごいんです．東大の方が圧倒的に情報をもっている．いろんな建築家のこととか歴史のこととか，今思えば本質的な知識じゃなくて表面的な知識だったかもしれないけれど，大学院のスタートラインで比べると，ああかなり出遅れているなあ，と．だから刺激がすごくあって，気持ちを新たに頑張らなきゃっていう感じだった．ちょうどその時に「グルッポ・スペッキオ」っていうグループ名で毎月『SD』の「国内建築ノート」っていうコラム連載に参加させてもらったんですね．それで，批評って言えるほどのものじゃないかもしれないけれど，あるルールの中で文章を書き，一応読んでもらえるようなものにもっていくっていうトレーニングにはなった気がしますね．その時のメンバーを中心に，文章だけじゃなく実際設計をしたい，仕事がきたらいつでも設計ができるような体制を整えてみようか，と．

何をやったかというと，まずは名前を決めたんだ．アモルフというのは小林克弘と僕とが電話で話をしていて，当時大江健三郎の小説を２人ともよく読んでいて，大江健三郎が不定形っていう日本語にアモルフってルビを振って，今は形が定かでないけれどもそのうち形があるものになるっていう希望のような使い方をしていたんで，アモルフでいきましょうかっていうことになった．名前を決めて名刺を作る，やったのはほとんどそれだけかもしれないね．原研には１級下に，今千葉大で先生やってる宇野求がいて，当時彼が最初にものになる仕事をもってきたのかな．それが建つ時に一応設計料をもらったし，きっちりとした方がいいだろうということで，事務所登録をしたんですよ．それが1980年．

京大の研究室と事務所とでは，どのような仕事の進め方をしているのですか．

基本的には設計は全部事務所でやっているんですね．大学の方はコンペやプロジェクトをやりますけど，プロジェクトはどちらかというと企画とか提案とか，こちらから社会に対して何かメッセージを発していくようなことをやっているのかな．社会から受ける仕事というのは現実化するわけで，その場合は建ったものの責任とかいろんなことがあるから，社会的な組織じゃないとなかなか難しいと思うので，株式会社になっている事務所でやるようにしているかな．設計のやり方は，別に学生の時から変わらないんじゃないんですか．とにかく３度の飯より建築好きだっていう人ばっかりが周りにいるわけでしょ．ずっとそういう人ばっかりが大学の方にもいるし，事務所の方にもいるから，なんかそのまんまきている感じがするね．


Blue Screen House

大学での研究は何をやっているのですか．

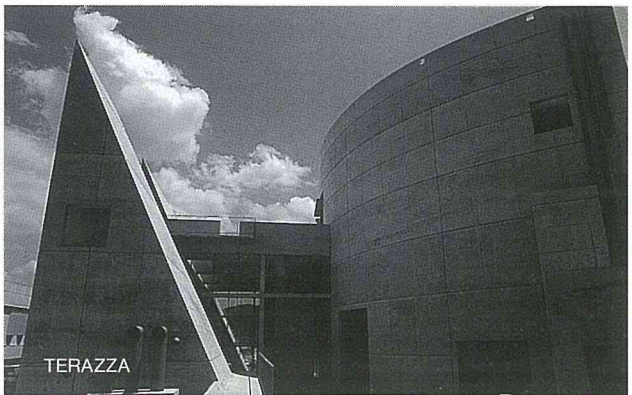
大きくいって，空間論，居住形態論，設計の３つをやっています．アーキテクチャーを，ものじゃなくて非物質的な，知的にものを構成する方法・技術と捉えると，建築は建築というひとつの思考の形式と捉えられると思う．空間論というのは，そのような建築という思考がどのような実際の空間表現の系譜をたどってきているかを，いろいろなテーマでいろいろな時代を取り上げてやっている．

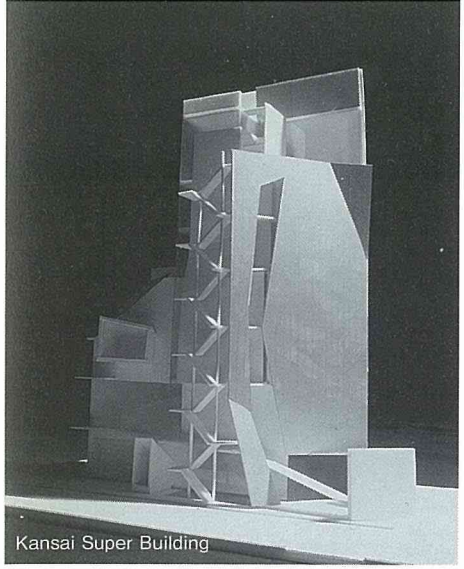
もうひとつはフィールドワークですね．居住形態論．この中に３つあって，集落論と都市論と景観論．まず原研時代からずっとやっているのが集落論．集落ってのは人間が定住して以来の非常に小さなコミュニティーが自然とかなり近しい関係をもって，密接に築き上げている居住形態．次に都市論ですね．公共性，裏を返せば権力だけれどそういったものをもって発生した都市というものをちゃんと考えていこうと．

それと今，景観デザイン論というのを講義でやっていて，景観論を考えているかな．景観論自体がまだ「論」になっていないですね．だから今は景観という言葉の広がりとそれがカバーしうる領域と，その中の論理みたいなことをできるだけ幅広く収集しておいた方がいいんじゃないか．景観をどう読むか，景観をどう捉えるか．これは勝手につけている名前だけれども，京都大学都市景観研究会というものを作って，その名前で発表するし，提案もしている．

竹山 聖 Kiyoshi Sey Takeyama

1954年 大阪府生まれ
1979年 京都大学工学部建築学科卒業．東京大学にて修士・博士課程修了．大学院在学中に設計組織アモルフ創設．92年より京都大学助教授
主な作品：OXY乃木坂（アンドレア・パラディオ賞入選），軽井沢の別荘（吉岡賞），TERAZZA，Stairway to Heaven（名古屋市都市景観賞），パストラルホールなど．
主な著書：作品集「竹山聖」「都市を呼吸する」CD-ROM作品集「竹山聖／空の建築」


TERAZZA


Kansai Super Building

好きな建築家とか好きな空間はどんなものなのでしょうか.

学生当時はニューヨーク5とよばれる，極めてインテリジェントな感じの建築，これはバックにコーリン・ロウがいただけですが．それからもうひとつ素朴なアメリカの草の根みたいな，ヴェンチューリもその先駆者にはなるだろうけれども，チャールズ・ムーアとか，「gray」とよばれていた人たち.「white and gray」．僕はやっぱり，whiteの方が好きだったかな．それと大学でた頃に，アメリカに2カ月ぐらい旅行に行って，ルイス・カーンの実物を見てやっぱりすごく感動したね．あと，アルド・ロッシのガララテーゼの集合住宅ができた時とかはやっぱりショックだったかな．

それが今に影響を与えていると思いますか.

今にして思えば，尾を引いているんじゃないかなと思うよ．建築的な思春期というか建築的な初心というのがあるでしょ．大学の時とか大学院ぐらいの時．その建築的思春期に何がインプリントされたかが，いちばん重要だと思うし．それから大学をでたり大学院をでた時というのは，全然建築家にとってスタートじゃなくて，30くらいまでにどれだけ自分を磨くかっていう風にちゃんと考えてないと，絶対に良い建築はできないんじゃないかと思いますね．僕はたまたま入ったのが原研で，その頃の原研なんてほとんどまともなところに就職した先輩がいないんですよ．原先生自身が一度も就職したことないというか，自分で設計共同体をいきなり始めた．アモルフは当然原広司を目標にしたわけ．

先生の作品では仕上げに打ち放しコンクリートが多いようですが，材料とか形態についてお聞かせください.

僕はね，素材については音楽と同じように思っていて，好みとしては打てば響くような素材が好きですから，石とか金属とか木とかコンクリートとかそういうものを適切に使おうと．形と形の関係はハーモニーみたいなものでしょ．それで形自体のあり方は，メロディみたいなものだし．全体の構成がリズムみたいなものだろうけど．素材は音色でしょ．

先生は『GA JAPAN』に，神戸の首都計画を発表されていますが，阪神大震災は先生自身はどう感じましたか.

僕もまっただ中にいたからね．僕は地震が起こっている最中にすごくいろいろなことを考えて，まず何よりと「ああこれで日本のシステムは変わる」と思ったね．いろんな意味で．これで変わらなきゃおかしいと．でも結局変わらないね．それが問題だと思いますね．

自分は何ができるだろうと思うんですね．今きちっと記憶にというか歴史に残しておかなければいけない何事かがあるのではないかと思ってね．成すべきことは何かと思った時に，災害があった時の復興ということに対してきちっと勉強しておくことだと．研究室でまず関東大震災後の復興の状態と，第2次世界大戦後コルビュジエたちが提案したヨーロッパ都市の復興について勉強した．

首都を，という発想は，神戸のためにきっちりと財源を確保する方法を考えた時に，たとえば神戸に将来的な居住環境のビジョンをちゃんと踏まえた新しい21世紀型モデル都市を計画する，神戸に首都機能を移転する，そのための税金ですとすれば，かなり大義名分になるのではないかと思ったのが始まりです．

今度は首都機能について勉強し始めた．研究室で地震があった直後から，ぐわっと集中して2月末ぐらいまで．そしてこれは神戸に可能だと．実際に復興の指標となるだろう勉強の検討結果をベースに，3月に入って20日間ぐらいでもうみんな徹夜徹夜で僕もずっと泊まり込みで図面と模型と上げて文章書いて．もともと震災が起こる前に，『GA JAPAN』で神戸の三宮プロジェクトというのを取り上げてもらうことになっていたので，首都計画も併せてだすことになりました．ともかく記録として残す．僕としては自分は京都大学に身をおいて研究室があって何かできるとしたら，そういう格好でちゃんと勉強してプロジェクトとして残すことじゃないかと．ボランティアで炊き出ししているよりも，京大で徹夜している方が今僕自身の人生にとっても神戸にとっても良いんじゃないかと．

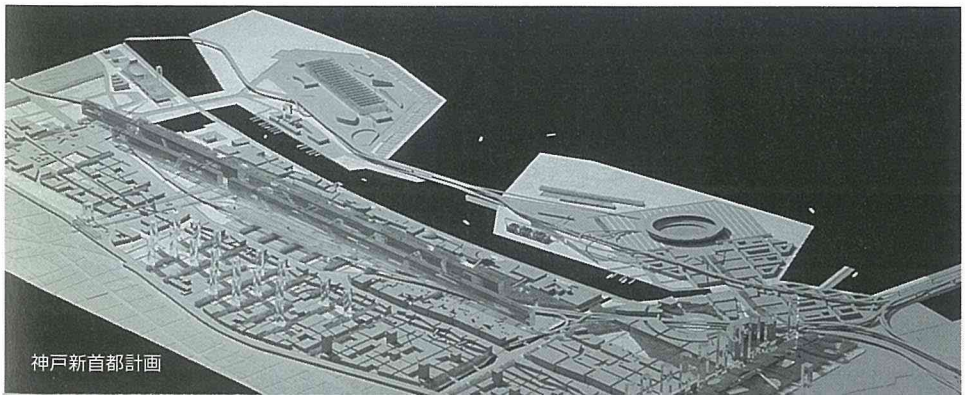
今建築に関して興味をもたれていることとか，やってみたいことはありますか.

紀元あたりに地球上に大体5億いたといわれる人間が，エネルギー革新によって定住化し，都市文明化して飛躍的に増え18世紀に10億，20世紀に一気に20億，40億，60億と，今のエネルギーシステムではそのまま100億を乗り越えようとするのは完全にアウトでしょう．こんな人類の歴史の中で少なくても今自分が何がやれるのか，建築に何ができるかを考えなければいけないというのが今の関心．

ただやっぱり，カルチャーとして感動を与える，人間の気持ちが豊かになるような面白い建築をつくっていくことが使命だろうなとも思っているけどね．建築というフィールドを出発点にして，どこまで広げどこまで守り何を考えられるかということを．僕らにはものを作る，建築を設計するというすごく強い，他のジャンルでは絶対にできない，手に職がついている．だから設計演習頑張れといっているんだ，たとえば(笑)．この手に職をつけるということがもっとも重要なんじゃないかと大学の時ぐらいに思ったかな．目で見ることだけでも良い．好きな建築家とか良いと思う図面を毎日見る．図面を読んで空間を構想したり，描いたものがスケールとしてどんなものか考えるトレーニングをする．やっぱり職人の世界じゃあないですかね．

最後に今の学生にアドバイスを.

必ずしも建築の場合は楽しい仕事，自分の好きな仕事ばかりができるわけではないですけれど，でも，初心があるわけじゃないですか．建築学科へ入って，建築の設計を始めて，建築がすごく面白いなと思ったり，その可能性を感じたり．それは，みんなでそういう場を維持したり可能性を試していかないと，いつのまにかなくなっていくようなものですね．どこにいたって純粋なフィールドをある程度守ったり広げたりしていくグループなり，人間のネットワークがあれば，そこでその建築の純粋さが守られる可能性がある．そういうことを忘れないでやっていけばいいんじゃないかなと思うんですよね．


神戸新首都計画

OB作品紹介
Works by Alumni

インタビュアー
小倉　哲　Satoshi Ogura
千葉　洋　Hiroshi Chiba
本田哲也　Tetsuya Honda

聴覚的建築
Auditory Architecture

篠崎好明さん
Yoshiaki Shinozaki

インタビューは原宿にある，篠崎さんの事務所で行われた．私たちの質問に対し，学生時代の話，建築観，建築家としての生き方など，一つひとつ丁寧にお話しくださいました．

篠崎先生の学生時代のお話をお聞かせください．

よかったことといえば，学年が上がるにつれて割と自由にやらせてもらったことでしょうか．私なんかけっこう勝手なことをやっていた方ですが，先生方は暖かくという苦笑いしながら見てくれていたようです．それは谷口（吉郎）先生や清家先生の方針だったらしいですね．

私は平井研の第一期生ということになりますが，平井先生には「僕は設計の方で，研究者になるつもりはありませんが，建築の古典に触れるのは今しかないんじゃないかと思いますので，先生の研究室に入れてください」とお願いしました．研究室の志望動機をそんな単純にあからさまにいったのは私だけだったようです．先生は「しょうがないなあ」と苦笑されながらも入れてくれました．

研究室に入ると先生から，これこれを見てくるようにと具体的に見るべき建築をキッチリとリストアップされました．私はそのご指示に少し拘束感を感じながらも，何日かかけて京都，奈良，滋賀の書院建築を主として見てまわりました．それらの中には一般コースからはずれて，手続きなしでは見られない，知る人ぞ知る名建築もありました．貴重な体験ができたことは，平井先生への感謝のひとつでもあります．

就職はどのように決められたのですか．

私は製図室や研究室にこもっていた方なので，世間のことはあまり知らなくて，どこにいったらいいのかよくわかりませんでした．たまたま求人欄の中に圓堂事務所があって，書類選考の中に石膏デッサンというのがありました．面白そうなのでちょっと覗いてみようといってみたら，圓堂政嘉さんが私と差しで，小一時間程ぶっつづけに猛烈な勢いで，ご自身の建築観を語ってくれました．お話の終わるころ私が「あのう，石膏デッサンって何ですか？」といったら急に席を立たれて「それじゃあ話にならない」と背を向けようとするので，思わず「僕，石膏デッサンを描いて持ってきます」といってしまいました．

石膏デッサンを描かねばならない事情を平井先生にお話しすると，たしか，今は使われていないがデッサン室のようなものがあるとのことで，平井先生から清家先生にお願いしてその部屋の鍵を開けてもらいました．そのガランとした部屋の隅から石膏像とイーゼルをとりだし，埃をはらって一人描きはじめました．

描き上げた一枚を圓堂事務所に提出し，書類選考となりました．応募者が40人程に絞られてエスキスの試験を受け，合格ということになりました．なんだか，なりゆきのまま夢中でやってるうちに就職が決まってしまいました．

事務所勤務時代の生活についてお聞かせください．

たまたま入った年に圓堂さんが作品で学会賞を受賞され，翌年には平井先生が論文で学会賞を受賞されました．自分も上り坂のいい事務所にきたなと思いました．

ところが，とんでもなくしごかれる事務所で，まるで丁稚奉公でしたね．入って一年目はほとんど製図板に触れさせてもらえず，模型づくりやプレゼンテーションの製本づくり，製図板の水張りなどをしてました．それも，兄弟子からいちいち細かい注文がつけられました．その代わり仕事は5時で終りとなります．

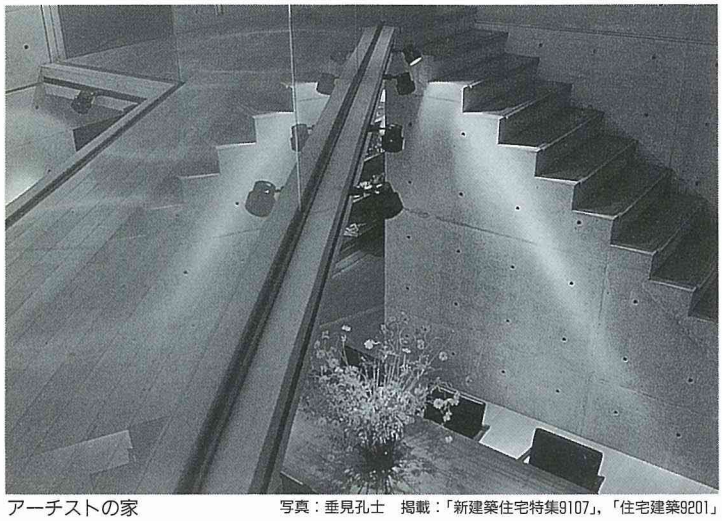
それからお茶の水の，芸大の予備校みたいなところに通わされました．費用は全額事務所負担でしたが，月曜から土曜までの毎晩6時から9時までの3時間，石膏デッサンを描かされました．1週間で1枚描き上げ，土曜の晩に事務所に持ち帰り，製図室のいちばん目立つ壁に，同期の人とともに4人1枚ずつ並べて貼らなければなりません．翌週にはスタッフ全員の評価の目にさらされるわけです．石膏デッサンというのは並べて距離をおいて見ると，だれにでも優劣がわかってしまうのですね．

やってみるとわかるのですが，1枚の石膏デッサンの中に，本質の捉え方とそのプロセス，集中力とその持続力，構成力などがあらわれてしまうのです．圓堂さんとすれば，所員の育成と人材のチェックになったのでしょうね．そして1週間で1枚，1年すると40何枚かになりますが，それをスライドにまとめて，最後に圓堂さんがカチャカチャと映して眺め通します．

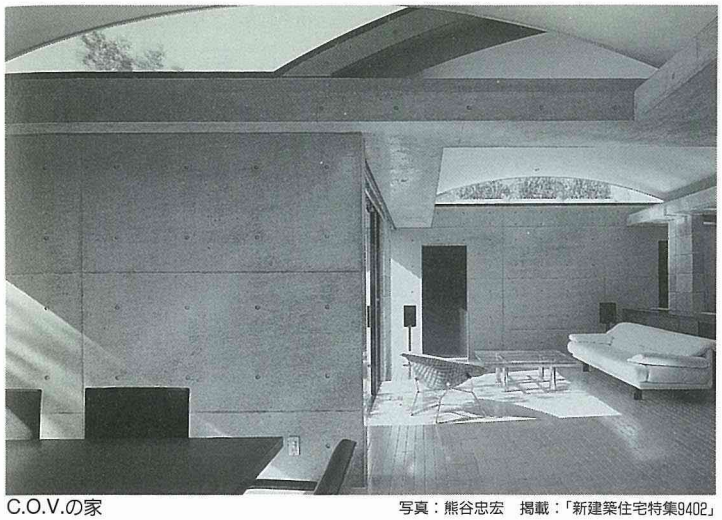
その結果下手だと圓堂さんから「You are hopeless，お引きとりください」，上手だと「You are welcome」といわれて2年目を迎えることができます．私の場合，はじめは圓堂さんから「キミ，チョット弱いね，来年は危ないかもね．」といわれました．私は下手でクビになるのは癪だったので，一所懸命やりました．そして4人のうち，welcome組の2人として2年目を迎えることができました．

しかし，圓堂さんから「石膏デッサンはだまされたと思ってやってみろ」といわれてやったものの，そのデッサンの効果もわからぬまま3年目の半ばには，自分が組織にはどうにも適応できなくなってきて，退職しました．その効果が自覚できたのは，しばらく後の，独立して自分ではじめてエスキスをしようとした時でした．今では圓堂さんには，申し分けない気持ちと感謝の気持ちとで，複雑な思いです．

退職後，1970年に日本万国博があったんですが，その空中テーマ展示設計グループにフリーランスとして入りました．岡本太郎さんがチーフだったんですが，川添登さんや粟津潔さん，黒川紀章さんとかいろんな人がブレーンとして出入りしていて，その中で僕がスタッフでやっていたんです．まあスタッフですがフリーですから，割と自由にものがいえて，けっこういろんな人と対等に近い形でやることができました．こういう


アーチストの家　写真：垂見孔士　掲載：「新建築住宅特集9107」，「住宅建築9201」

G.E.B.の家　写真：熊谷忠宏　掲載：「新建築住宅特集9402」，「住宅建築9602」



C.O.V.の家　写真：熊谷忠宏　掲載：「新建築住宅特集9402」

篠崎好明　Yoshiaki Shinozaki

1940年　東京都生まれ
1966年　東京工業大学建築学科卒業
　　圓堂建築設計事務所，日本万国博テーマ展示設計チーム，アトリエR（斎藤義建築設計事務所）を経て
1973年　AMO設計事務所設立．現在に至る
主な作品：野澤邸，ポリフォーニサウンドの家，音楽家の家，アーチストの家，G.E.B.の家，C.O.V.の家，非線形の家

イベントものは華やかで面白かったのですが，設計も終りになるにつれ，なにか実体のないはかなさと空しさがつのってきました．

そんな時に私のすぐ上の役に斎藤義さんがおられました．斎藤さんはアトリエRという小さな事務所を主宰されていて，そこからの出向でした．当時アトリエRの作品が新建築に載っていて，アットホームな住宅が印象的でした．アトリエを覗くと2，3人のスタッフで住宅やインテリアの仕事をコツコツとやっていました．その時直感的に，これこそ私にピッタリのスケール，私の居るべき世界だと思いました．万博の時はよく議論もした兄貴分の斎藤さんでしたが，頼み込んでスタッフとして入れてもらいました．

厳しい先生としての斎藤さんの忠実な弟子となった私は，マン・ツー・マンで最初から最後まで，全体から原寸の細部にいたるまで，徹底的にものづくりを教え込まれました．机の上の理想と現場での現実とのギャップも味わされましたが，とても充実した時期でしたね．アトリエRで3年半たって，担当の仕事が2サイクルして次の現場がはじまるころ，斎藤さんから「君もそろそろ独立したら」といわれてしまいました．次の現場の監理業務を譲り受ける形で，なんの当てもなく四谷の友だちの家の木造の10畳くらいの部屋を借りて，事務所を始めました．

■ 独立してからはいかがでしたか．

下積み時代が続いたので，どんな依頼でもこんな私を信頼して大金を任してくれるのかと思うとありがたく思えて，なんでも一所懸命やりました．そんな仕事ぶりは世間の人がそれとなくみているようで，なんだかんだと仕事はあるもんですね．その続きで今日があるわけですが，ただひとつ大きな転機がありました．

つきあいのあった村田靖夫さん(68年卒)から「そんだけやってるんだったら何かに発表したら」といわれて，ある家を『モダンリビング』という一般誌に載せました．すると，初めて作品を見ての設計依頼というのがあり，思ったより腕がふるえて，できたのが，野澤邸でした．85年に私は45才で，専門誌に初めての作品として野澤邸をだしました．

それまでは人から人への紹介，どちらかというとこの辺の原宿のファッション関係のオフィスビルやそのオーナーの家を多く手がけていました．常に仕事はたくさんあったので，以前は今の事務所の下のフロアも借りて，ツーフロアの広さで，番頭さんのような人もいました．野澤邸をやってみて，これこそ自分のやりたいことなのだとあらためて気がつきました．

そこで，仕事をのれん分けするようにして，下のフロアを切り上げてコンパクトな事務所にしました．そして作品を通じての設計依頼の受注だけでやっていけるよう，そして自分がすべてに目を通せるようにしました．

それだけ繁盛していて，仕事や組織の規模を小さくするというのは珍しいと思うのですが．

それは，何がメジャーなのかという価値観の問題です．清家先生は「大きな絵がかならずしもいいとはかぎらないよ，モナリザを見たまえ」といわれたそうですが，音楽にたとえるなら，大交響曲より室内楽や独奏曲の方が，心を打つ場合があります．私はベートーベンの交響曲にも感動しますが，J.S.バッハの無伴奏バイオリン曲の方が日々，はるかに広くて深い精神の世界を感じます．

オーケストラのメンバーとして大曲を編みだす一員になるのもいいですが，独奏者として一音一音を，一人でコントロールして独自の音楽の世界を創りだすのも悪くないと思います．大規模建築をやるのは建築家としての醍醐味でしょうが，実際には全体を支配しようとすると部分を支配することが難しく，部分を支配しようとすると全体を支配することが難しい．その点住宅は高密度ながらも程よいスケールなのではないでしょうか．

つまり私は部分も全体も密度高く支配する，〝建築ソリスト〟になりたいのです．

そのソリストになって創りだす篠崎先生の独自な世界とはどんなものですか．

私の作品を通じての設計依頼であれば，施主の求める住宅の物理的，生理的機能を完璧に満たした上で，独自の世界を展開していくことができます．独自というのは，自分はてっきり視覚型の人間かと思っていたんですが，どうも視覚芸術より，音楽の方に心が動かされる，聴覚型人間だったんですね．音楽は時間の芸術です．

私が建築をやっていて何かが欠落していると思っていたら，それは時間というパラメーターだったんですね．よく「建築は凍れる音楽である」とかいわれますが，私はそれを解凍するような気持で，建築の音楽化，視覚の聴覚化，いや聴覚の視覚化というものをやってみようと思っているんです．

そこで，時間とは何だろうかと考えていくと，ひとつには自然科学の世界にヒントがあります．といっても一般向けの科学読物ですが，これが面白い世界でね，進化生物学，生命科学，カオス，フラクタル，複雑系とどんどん深まっていくんです．

もうひとつは音楽の世界，ポリフォニー，対位法，カノン，フーガ，といったものですが，それはもっとこれから勉強しようと思っているところです．

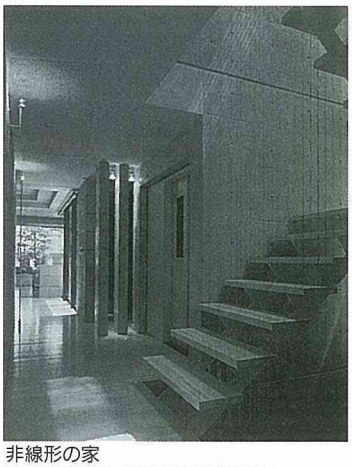
私は一時の建築界が〝芸能とファッション〟の世界のようにみえ，ものたりなくて，もっと普遍的なものを求めたわけでもあります．

■ 最後に今の学生にアドバイスを．

私のような生き方は，順調で良好なコースをたどられる多くの東工大の方々にはあまり参考にはならないかもしれません．

しかし，中には能力や情熱があっても組織社会にはどうしても適応できない人もいるかと思うんですよ．そのような方には，世界は多様である，いろんな生き方，いろんな価値観があるということをお伝えしたいですね．それと，すぐに役に立つ工学的なものだけでなく，ホモ・サピエンスの糧となる理学的な建築があってもよいのではないかと思っています．

もっとも，みんなが私と同じようになったら，社会は発展しませんし，それにライバルが増えて私の居るニッチも狭くなりますので，みなさん，私のマネをしないでください．(笑)



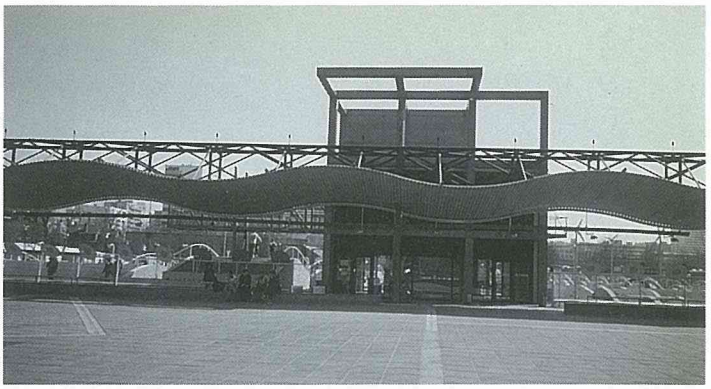
非線形の家
写真：熊谷忠宏　掲載：「住宅建築9602」

OB作品紹介
Works by Alumni

インタビュアー
千葉　洋　Hiroshi Chiba
勝木祐仁　Yuji Katsuki
安森亮雄　Akio Yasumori

アーキテクト再考
Changing Our Idea of the Architect

岡河　貢さん
Mitsugu Okagawa


「ラ・ヴィレット公園」パリ

インタビューは広尾にある岡河さんの事務所で行われた．最近興味のあることや，建築家論など，建築に対する思いをお話くださった．

学生時代の話を聞かせてください．

僕は建築家になろうと思っていたんですよ．入ったらあまり建築家になる教育というのはしていなくてね．大学院に残って，当時篠原研では住宅の設計をしていて，それを周りでみながら，だんだん建築の作り方を学んだように思います．ある時篠原研で，新しくできた住宅の写真を撮影する機会があって，衝撃を受けました．「上原曲がり道の住宅」と，「上原通りの住宅」ですね．それが初めて見た住宅でした．非常に美しいと思いました．美の範疇さえ破壊するほど．篠原研では30〜40坪の住宅を1〜2年に一軒ぐらい設計していて，毎日夕方，先生が建築の議論を学生を交えてやっていました．その過程で少しずつ建築が強くなっていくんですよ．強いものだけが残っていって，最後に残ったものだけが建築として成立していくのを体験しました．大学院の時，篠原先生がパリで展覧会をすることになって，お手伝いで一緒についていきました．篠原先生の仕事が世界での位置づけを問うという時期でした．それまで30近く作品をつくっていて，仕事が世界的になって，住宅から少しずつ大きなものを考え始めるような過渡期を，学生としてみさせていただきました．

大学院の時フランスのコンペに入賞し，それで招待してくれて，チュミの所に行きました．ちょうどラ・ヴィレットの現場が始まっている頃で連絡して，そしたら「いいよ」ということでそのままパリへと．ラ・ヴィレット公園は重要なコンペでしたね．ポストモダンで周りは形のことをやっている中で，それとは無関係なコンピューターエイジのモダンの再生のようでした．意味の発生機構の問題とフォルムとしては，今世紀の初めのモダンなパイオニアたちのやったことを今の目でもう一度見直していく，そういう動きですよね．コールハースはもう少しヴァナキュラーなモダンも問題にしていたようですけれど．僕は当時，不勉強でチュミをあまり知らなかった．僕のアイデアコンペ案を坂本先生がチュミと関係があるんじゃないかと言ってくださって，それで彼のことを勉強して，とても面白いと思った．アーキテクチュアル・マニフェストとかマンハッタン・トランスクリプツなどの建築論読んでも，当時はそんなによくわからなかったのですが，エイゼンシュタインのフォトモンタージュとか，視点が動いたり，場面が重なっていって空間ができるというそんなことが書いてあるような気がしたんです．そこでパリに行ったらすごく面白くて，篠原研で議論していたことがチュミと直接議論できて，連続性を感じました．

事務所でのお仕事は．

最初の住宅は「尾道の住宅」で，まだ6年くらい前です．

それとドミノとよぶ住宅を少しずつやっています．パリでコルビュジエの仕事を見に行ったら，日本で思っていたのと全然違うものなんですよ．何も日本には伝わってないと思いました．近代建築の最初ですよね，コルビュジエは．そこから考えをスタートしても十分意味があると思いました．と同時に現代の考え方を連動させることに意味がある気がしました．近代建築が批判されていた頃は無駄がなくて何もないものじゃいけないという批判があったわけです．でもコルビュジエの近代建築をみたら，もっと複雑な一種の快楽の機械なんですよ．ある意味ではチュミがいっていた映画のような気もしたし．それと，シュールレアリズムは脳味噌の中でイメージの旅をするわけですが，そういうものも一緒に連動するような機械だという感じがしたんです．

近代建築を工法として輸入せざるを得なかった時期，そのことだけをドグマとして再生産した近代建築に対する批判，というのはどうも違う．決して近代建築は貧しいものではない．そうしたのはひとつのロジックの勝手であったのかもしれないと．近代建築を批判する方法としては歴史，地域主義があった気がするんですよ．だけどもわれわれはもう近代的な生産システムや思考に囲われているわけだから，それに対して歴史主義でやるといっても有効とは思わなかった．むしろ近代の内部に入り込んで，内部からそのロジックを破綻させていくということを意識してみようと思いました．

「尾道の家」は環境が良くて周りに開かれてつくられている．それ以降のドミノは，近代のドミノに対して問題が設定されている気がしたんですが，それらの関係と，篠原研の時の空間性の強いものとの関係は．

「尾道の家」はハイアーキテクチャーだと思う．つまり条件がすごく良かった．あのとき考えたことは，本当の自然も形もマテリアルも等価でいいというような，うその波も本物の波も連続したフィクションをつくりました．次の住宅は一般的な住宅で，日本の現実というものにものすごくぶち当たって，思ったことがなかなかできない．ドミノを意識し始めたときは現実の世界の中で有効な方法として，日本の近代建築としてストラグルしようと．その時からある意味では空間性というものは，有効性を失ったんです．最初に空間ありきみたいな．次の「いとこの家」では，東京にしては割合条件が良かったけどあまりお金がなかった．それでスラブを配置して穴だけあけるということをもっと自然に展開しようと，居間のところにぽんと穴をあけました．洋ランセンターでは花を飾るだけではなくて，他にもいろいろ使えるようにと提案したら，その方がいいですねと．構造を考えたときに，均等スパンだと人が集まれないから，柱をランダムに配置しました．柱とスラブを最近やってきて，非常にシンプルな話なんだけど，いろんな現実への適応が可能だと．

穴の形が不定形なのは，スラブの地を意識させるためですか．

あの時だからああいう形になった，ということです．ただほんわかした形の方が大きさがわからなくて，有効だというのがリアリティーとしてあります．

本当はいわゆるデザインはしたくないと思います．どうやってデザインから逃げようかと．それはものすごくデザインしたいという気持ちと裏腹です．それはすごく大変で難し

「尾道の家」

「向島洋ランセンター」

岡河　貢　Mitsugu Okagawa

1953年　広島県生まれ
1986年　東京工業大学大学院博士課程修了
1985年ー86年　ラ・ヴィレット公園計画に参加
現在　パラディサスアーキテクツ主宰
　　東洋大学工学部建築学科非常勤講師
受賞歴：アンドレア・パラディオ賞国際建築賞ファイナリスト入賞　新建築住宅設計競技1992入賞，その他多数
作品：尾道の家，ドミノ1994，ドミノ1995，向島洋ランセンター展示棟，ドミノ1996，かわぐちかいじ仕事場・住居

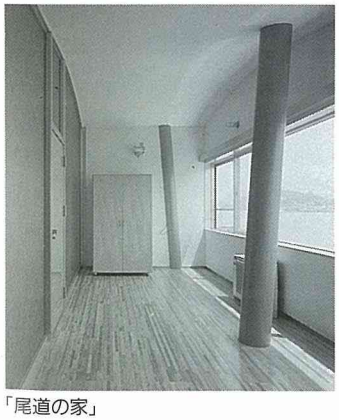
いことなんです．やっぱりデザインというのは残酷なもので，形の善し悪しの判断を人間は最後にしているんだと思います．

もっと深い話になると，建築はやはり権力が働きます．最終的に判断されているのは，美であれ形式であれひとつの権力としてのジャッジメントが働く，という建築の絶対矛盾があるんです．それを逃れて建築があるかないかというのがこれからの問題です．また，そういう機構の中で何を作るか，何をみるかということです．それをなくすと，何もなくなってしまうかもしれない．ホワイトノイズです．全部等価．けれども建築というのは実態をもちますから，言語で説明不可能な何かを伝えるんですよ．そこで判断せざるを得ないと思います．

斜めの柱は貫いている表現なんですか．

理由としては力学的に安定方向にいくというのがありました．そのあともっと自由にやってみてもいいかなと思って構造家とシミュレーションしたら，まっすぐ立てたのより，傾斜柱の方が力学的に強いということでした．

人間というのは意外に重力とXYZというグリット空間になじんでるけど，コンピューターのモニターの映像にはほとんど重力を感じない．すごく自由なわけです．飯島洋一さんがデジタルアーキテクトの中で，僕の柱を一種のそういう時代の思考だとクリティックしてくれた．僕はその時はそうは思わなかったけれども，後になってみるとそうなのかなぁと．非常にスタティックな中に，何かノイズのようなものや別の系のものをどうやっていれられるかと，考えていた気がします．それがたまたま建築的に有効なら，それで決定してきました．ただの表現の場合はアウト．なぜならアーティストじゃないからです．最近の洋ランセンターではランダムな柱になっています．こうでなくちゃいけないというのはないわけです．たまたまいくつかやってみてシミュレーションしたら，上手くバランスがとれました．今はコンピューターと一緒になって，根拠を探して根拠があるということになればクライアントにきちっと説明をして，予算の範囲内でおさまればそれで決定します．



「尾道の家」

コルビュジエのドミノが串刺しにされることで，それぞれが固有の空間になっていると思いますが．

そういう可能性がでてくる．均質なスラブなんだけれども，場所が崩れるから均質にならない．疎密状態みたいなものができてくる．やりたいことと条件が出会いますね．その時に何か有効な効果ができれば作ってきました．篠原先生の作品は，一見断絶しているようにみえるけど，よくよく追いかけてみると，連続性があります．そういう思考というのは篠原研で勉強したような気がします．割と前やったことで無意識にやったことを考えてみて，今度はもう少し意識してやってみて，前よりもっと建築的効果がでてみたりね．

最近の若い世代の建築家がヒエラルキーなどを使って情報のピックアップの仕方に表現をおいて，形は扱っていないようにするというのが似てきていると思うんです．結局，建築家が建築を作るというのがどういう風になっていくのかと．それに関しては．

デザインというものが建築だっていうとそうなるでしょうね．洋服のデザインと同じレベルだと思う．ただ建築家かどうかということに対して，もう一回再定義を若い人がすれば，そこから逃れられる可能性はあると思う．ただその時に建築家であるということは社会の中ではある意味で認知されていないわけです．もちろん，設計技術者であり，デザイナーでありということでは社会は対応してくれるけれど，建築家であるかどうかということが社会にとってはある意味では認知されていないと思います．けれどもすごく大事なことで，社会の根本的な問題を何か変えるかもしれない．だから建築家の定義が，社会の中のどういう関係性で捉えられているのか，ということに，かかわっていくという気がしています．

先ほどの根拠というお話で，割と東京という環境が，建築の形式に妥当性をもたらしていると思うんです．何重ものスラブの積層とか，広告とか，東京がどういう状態にあるかが建築の根拠に入ってもいいと思うんですが．

東京の特異な問題というより，近代の問題だと思います．僕は川崎の工場のあたりをうろうろしていたことがあるんですよ．なりふり構わず，有効であればよいというでき方ですよね．東京というのもある意味ではもっとも近代的な都市です．東京は膨大にいろいろなストラグルをやってきた．そこで生まれてきたエキセントリックなものが東京のオリジナリティーのある現象だ，ということはいえなくはないかもしれないけれども，環境といってもボアリングなものですよね．そんなにエキサイティングじゃない．だからもっと全然関係ない人たちがいて，近代のテクやら経済のシステムでできて，イデオロギーではできない有効なものがでてくれば，それはそれで面白いと思います．

具体的に今考えていることは．

今は分節性のはっきりしない，疎密な空間に興味があります．それと建築じゃないもの，というのがあります．そこからいうと普通の街が最終的にそういうロジックでできています．建築家が全然介入していない，普通の予算で普通の人が住んでいるただの建物です．それはどういうことなのか，それをつくるのが建築家なのかと．

つまり建築として考えてつくることそのものの限界というのも，考えていかなければいけない．洋服のデザインは考えても仕方ないところまでいってるんだと思うんです．だけど建築の場合それを考えるのかというと，建築という制度の権力の問題というのが重くのしかかって，建築という思考そのものが権力になるわけですね．成立させるということさえも権力になる．それを考えた時，何か違うあり方が，と思ったりします．そういう意味でいうと建築は非常に危険な領域であると思いますね．

それは肯定的，あるいは否定的に．

アンビバレントにです．建築というものは根本的にアンビバレントなものだと思います．ある意味で制度は強化されている．テクノロジーも，コンピューターも，どんどん不可欠になっている．それが本当にいいのかなと思っています．それが混乱状態になるともっと面白いのかなと思ったり，その辺が難しいですね．本当はそれを考えるというのは，建築というものが社会の中でどういうものかということと根本的に絡んでいる．それはみんなで共有して考えていくしかないでしょう．

最後に学生にアドバイスを．

まぁ楽しく建築やってください．悩むのも楽しく．

異文化体験 留学生からのメッセージ
Overseas Culture Experience

日本文化の多様性

張 建民 Jian-Min ZHANG
社会人博士課程２年
中国出身
西安理工大学大学院修了

早いもので日本へ来てから，もう９年目の春を迎えようとしています．この５年を振り返ると，私はまるで親鳥に餌を求めるヒナのように，日本の多くを見たい，知りたい，体験したいという気持ちでいっぱいだったように思います．そのおかげで，仕事や勉強などを通して独創的な日本文化と，その多様性を理解できるようになりました．

最初に日本にきたとき，街の中に四川料理や広東料理など，中華料理の主な種類のレストランが数多くあり，その中には，本場中国でも珍しい店をみかけることがありました．住まいの近くで，初めて日本の中華料理を食べたときのことです．注文の際，メニューは漢字なので，どんな材料がどのように料理されてくるか予想がつきます．何のためらいもなく自分の好きな料理を選びました．意外にも美味しい料理でしたが，味は「本場」とかなり違ったのを覚えています．その後，いろいろな中華料理店で食事する機会がありましたが，結局，日本の中華料理は，中華風の日本料理だといったほうが適切なんだと納得しました．日本の料理店のメニューは他国の料理名が，そのまま載っていますので，ほとんどオリジナリティーがないようにみえるのですが，実は外国からの料理の大部分は，日本人の口に合うような味に変えられ，日本特有の食文化と自然に融合し，この国の食文化の一部分になっています．このように，日本ではそれぞれの国の食文化も豊かになり，多様性が広がり，魅力的なものとなっています．

この数年間，観光，学会発表，出張などを通して，日本の東西南北各地を訪れ，四季の豊かな表情に接する機会を多く得ました．雲間にそびえる富士山の雄姿，春陽麗和を楽しめる桜花の満開，松葉牡丹が和風の庭に踊る青雲閣温泉，野原を渡る雪国の春風，緑滴る佐渡島の金山物語，霧けぶる戸隠高原の虫鳴き，野尻湖の寂しい渡り鳥，百花爛漫と咲く足羽川畔の細雨，盛観を極める隅田川の花火，歴史溢れる清水寺の除夜鐘鳴，生気がみなぎっている水郷柳川の南国風采など，枚挙に暇がないほどで，そのごく自然な風景が印象深かったのです．

私もこの生き生きしている素晴らしい自然の中で，日本のことを少しずつ理解してきました．日本の文化は津々浦々から集まって，深く積もり積もったものを，この広大な自然の中に融合し，この自然から再び生み出された新しいものです．その多様性と独創性もこの自然と調和した結果です．

ここでは「日本文化の多様性」に関して，自分で見学したり，勉強したりして日本の生の姿を，肌で感じることによって理解できたものを，直感的に述べました．これはもちろん「氷山の一角」に過ぎません．中国の諺で表現すれば，「千里之始於足下」（千里の道も一歩より始まる）ということです．

Study in Japan

Merina Burhan A.
修士課程２年
インドネシア出身
バンドン工科大学卒業

To further my studies abroad has always been one of my study plans since I was very young. I realized that education and knowledge has become essential for everyone.

After I graduated from Bandung Institute of Technology, Indonesia as a Bachelor of Architecture, I joined the Faculty as a junior lecturer. It is very difficult to get a scholarship to study abroad for people in my country, but as one of the Faculty member I have more opportunity to get this chance.

I came to Japan on April 1995 and since that I encountered many things and learned from it. Communication and information was my first problems in the first couple of months, when I just started my new life here in Japan. Although I prepared myself by learning the Japanese language before I came to Japan, but I was still far from being capable to understand any lectures which was given in Japanese. Even though I enrolled in the International program, in fact there are not that many classes in English. This condition pushed me to study harder in order understand all the information, including knowledge around me. There are many of advantages I found being a student belonging to a certain laboratory. Because it always makes it possible for students to work together with other students with the same interest under one Professor as our supervisor. My friends in the lab has been helping me in many aspects. We care about each other, and that makes us feel like a big family. I feel very lucky to be one of the member of that family.

Studying in Japan also tought me how to live independently and to be disciplined in both organizing my academic life and my daily life. Besides it teaches me how to be more responsible in doing everything. And I think this kind of experience is very important and it could give me many positive impacts in my life.

There are some other advantage from studying abroad, we can learn about its culture closely. And Japan has a unique culture that makes it very interesting to learn more. As an architect I am interested in many aspects of Japan. It is not only its traditional culture which in some extent is still strongly kept in the society, but also on the other hand Japan has successfully become one of the most powerful country in the world. I had chance to travel to some other cities in Japan, there I cound see how fast this country has been developed and on the other hand the beauty of this country's landscape has amazed me.

Now I am almost in my last semester of my Masters Course program and I found my study in Japan has become more and more interesting and very meaningful. With what I am going to achieve after I finish my studies here, I hope I will be able to dedicate it all to improving the development of my country. And internationally I want to dedicate my knowledge and experience to the improvement of human life.

Special thanks for all Senda Lab's member for being part of my family and for being so kind in helping me in many aspects, this has made my stay in Japan easier and more precious.

日本人って……

李 知映 Lee ji-young
修士課程２年
韓国出身
弘益大学卒業

久しぶりに日本語学校に通っていたときのように，日本語で小論文を書くような気分です．私が日本に来てもう３年目になりました．今までをふりかえってみると，他の留学生のように，いろいろ大変なこともありましたが，よくやってきたと思っています．でも，文化の差が少ない私にとって，遠い国からの学生よりは，慣れやすかったかもしれません．今はむしろ，日本の文化の一部が，自分の中に溶け込んで，自分の生活様式や思考方法に影響を与えるときもあると感じています．

この間，交換留学生として２カ月ぐらいイスラエルにいったときは，全然違う文化の中で，違う食べ物と分からない言語に囲まれ，生活は慣れにくく，少し日本が懐かしくなったこともあります．

そこで第三者の立場として，時々イスラエル人と日本人の性格の差を考えることがありました．イスラエルと日本は子育てや教育が世界的に有名

な国として，よく例にあげられます．イスラエルでは子供のときから砂漠の探検，岩山の登山などを通じて，自然を愛する強い人間に育てようとします．さらに男子と女子に対する教育の区別はあまりなさそうで，大人になると，女の人も男の人のように軍隊に入ります．

いっぽう日本では女子は女らしく，男子は男らしくという考え方があります．その点では韓国と同じです．でも日本は言葉だけでも区別がつくほど，その程度が強いと感じられます．そして私からみると，日本人が子供を育てる際は，「他人に迷惑をかけない，礼儀正しい人」にすることにその焦点があるらしいのです．私はいきなり子育ての話をしましたが，私の意見はそういうふうに育てられた子供が大人になり，それが結局，その国の国民性になると思うからです．

時折強烈な野生を感じさせたイスラエルの人たちと別れ，成田空港に着いたとき，「日本人は本当に礼儀正しい」と思い，ホッとしました．私の友人のラテンアメリカからきた日系の留学生は，空港で税関の人に「お帰りなさい」といわれたとき，涙がでそうなほど感動したと話していました．

でも，他人に迷惑をかけないように，他人を傷つけないように生活している日本人は，心を開いて本当の話をすることが，難しいのではないかと思ったときもあります．そういうことで日本には，「本音と建前の文化」ができたのではないかと思っています．自分の本音を思いっきりみせることを気にする，恥ずかしがりやの日本人になってしまったのではないかと，私は考えます．恥ずかしがりやの日本人！私自身は可愛いと思うときもあるのですが…．

いろいろいってきましたが，何より印象的なのは，「侘」「寂」に代表される素朴な心，小さいものや小さい事柄も大切にすることです．そして，日本人のイメージは，日曜日のアニメ『サザエさん』の登場人物によくみてとれると思うのです．たまに『ちびまるこちゃん』のおじいさんのようなイメージもありますけど…．

A Japanese Education

Rebecca Cameron

修士課程２年
オーストラリア出身
メルボルン大学卒業

My first introduction to 'things Japanese' began when I was just three years old. At this time, I received a tiny violin and once a week my parents took me to Suzuki Method violin classes. During these lessons and ensuing hours of home practice, I learnt to play the Suzuki repetoire by listening, repetition and memorisation, and I gradually developed my technique and musical education to a certain level of proficiency. The skills that I gained from this(continuing) experience helped to build a solid base for the rest of my formal education. In addition, it also fostered an ongoing interest in Japan and almost everything Japanese.

Throughout my schooling and university education I remained interested in Japan, and in order to learn more about this country I studied subjects such as Asian architectural History, Japanese Culture and History and even a little Japanese Language. The variety of Japanese things widely available in Australia also provided an intriguing source of information and delight. I learnt to use ohashi(chopsticks) and, despite being rather expensive, sushi and sashimi rapidly became my favorite food. I frequented Japanese exhibitions at the museums and galleries, tried desperately to help dislocated Japanese tourists in my broken Japanese and watched dumbfounded as Kiso Kurokawa's Daimaru and Melbourne Central project rose from the city centre. Eventually, twenty or so years after my initial introduction, I was able to further this inherent interest by coming to Japan to study.

Arriving in Japan to start studying for my Masters Course at Tokyo Institute of Technology, was my first experience of being in Japan. At the very beginning of my stay, I found everything exciting, but the panic level rabidly rose. I hadn't studied enough kanji, the structure of architectural training was different, I couldn't remember everyone's names and for the first time I had to live with a group of complete strangers. At least I was relatively familiar with Japanese food and even if I couldn't properly read the menu, I was confident that I could eat whatever I ordered by mistake(especially if it turned out to be sashimi or sushi with lots of wasabi, and even natto was OK!). I took comfort in the fact that my "Japanese Education" was sufficient enough to allow me not to starve and that I could communicate on a basic, but uninteresting level. However, the differences that I had not been prepared for continued to interest me.

In Australia, architecture is neither a science nor a pure art. For most people it lies somewhere in between, resulting in a strong notion that the tension and confict of the interface between these two disciplines is the region of intriguing and dynamic architecture. However, not all architects practise on this "edge", and the architecture produced ranges from engineered sterility to the impossibly creative. As university students, we were encouraged to debate the merits and shortfalls of these varied works and to then establish our own, personal science/arts interface. Therefore, when I first entered this Institute, I was mystifield by the strength of the idea that "architecture is a science". I was not used to the absence of the equally strong, counterbalancing idea that "architecture is also an art". In reality, both ideas do exist here, but it took time to discover their relative proportions and their locations. Only then was it possible to make a connection between the unique interface established by this university and my own ideals and personal interface.

The FUTURE? - work with an Australian based firm that has offices or work projects in the Asian region. Then I can continue my interest in Japan and Asia as a whole, and to develop my skills in the management area. Before then, however, I must work in the Australian architectural industry, clock up some more experience and negotiate the Australian architectural registration process. For NOW? - happily continuing my "Japanese Education" here in Japan, but I need to find a way of remembering more Kanji!

発展の基礎

高 智龍 Gao Zhi Long

修士課程２年
中国出身
ハルピン建築大学建築工程学科修了

みなさんもご存じのように，日本と中国は一衣帯水の友邦で，唐朝の時代から，２国間の民間の交流は続いている．だから，２国の文化は似通っているところが多くみられる．だがこんなに似通った文化の背景があるにもかかわらず，２国の発展のスピードには極めて大きな差異がある．日本へ留学するきっかけのひとつは，どうやって日本は先進国となったのかという疑問を，自分の目でみて解決することも含まれていた．

時間の経つのは早いものである．日本に来てから，もう１年が過ぎた．日本語がまったく話せなかった私が，日本人と簡単な交流ができるようになるまでの間，さまざまな感慨を抱いたのである．その中でも，日本人の仕事に対する意欲的な姿勢は，私を深く感銘させた．日本のサラリーマンの１日の労働時間と通勤時間を合わせると，その平均は約12時間で，その中には，サービス残業も多く含まれているという．自分の身近なところでは，大学の先生と大学院生も毎日研究室で，一日中科学技術に関係あるいろいろな基礎研究をして頑張っている．学生たちは，常に疑問を解決するために，徹夜で仕事をしているし，教授も時間を惜しまずに研究に打ち込んでいる．みんな自分の仕事に真面目に取り組み，研究の上に研究を重ねている．

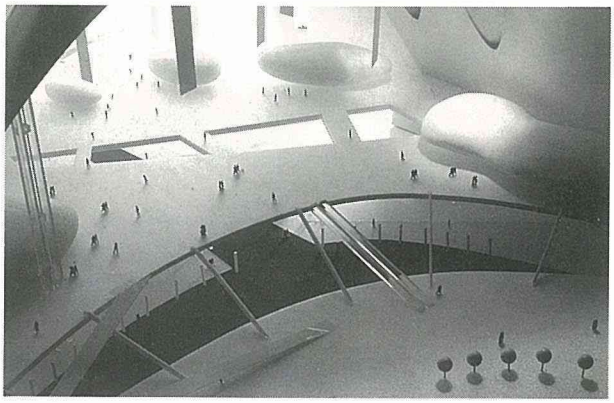
それだけではない．日本人は互いに協力することを重視する．難しい問題に遭遇すると，みんなは力を合わせて解決しようとする．「和の精神」は十分に体現されている．今までに話をした日本人をみてみると，仕事がいちばん大事なことだと考えている人が多数を占める．

また日本人は，仕事に勤勉で忠実であるばかりでなく，同時に効率アップも追求する目標となっている．企業が数多く集まっている新宿に行くと，緊張感をもって仕事をする会社員に出会い，深い印象を受けたことがある．日本人は，自分の具体的な行動によって，精確に勤労と効率の意味を，闡明（せんめい）にしてしまっているようにみえる．

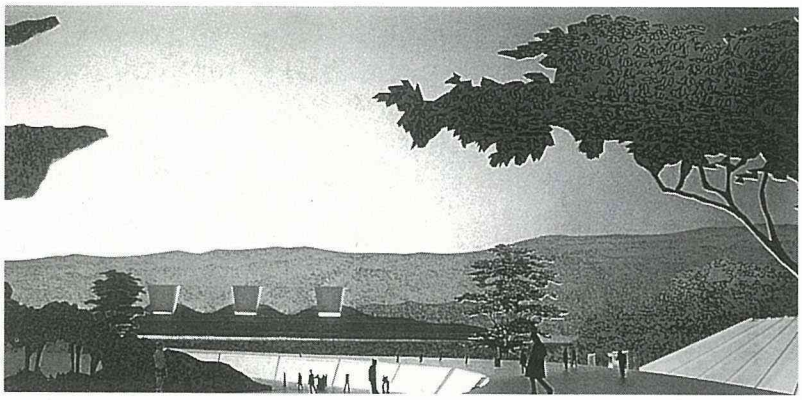
新宿の高層建築群の中に立つとき，私は日本人の創造した高くそびえるビルに驚嘆するばかりではなく，自分の力を信頼し，世の人に自己の実力を証明する勇気と決心に心から感服した．

Ka No.13 1997
design journal of
the department of architecture
and building engineering
Tokyo Institute of Technology
published by TIT society
of architecturaldesign education

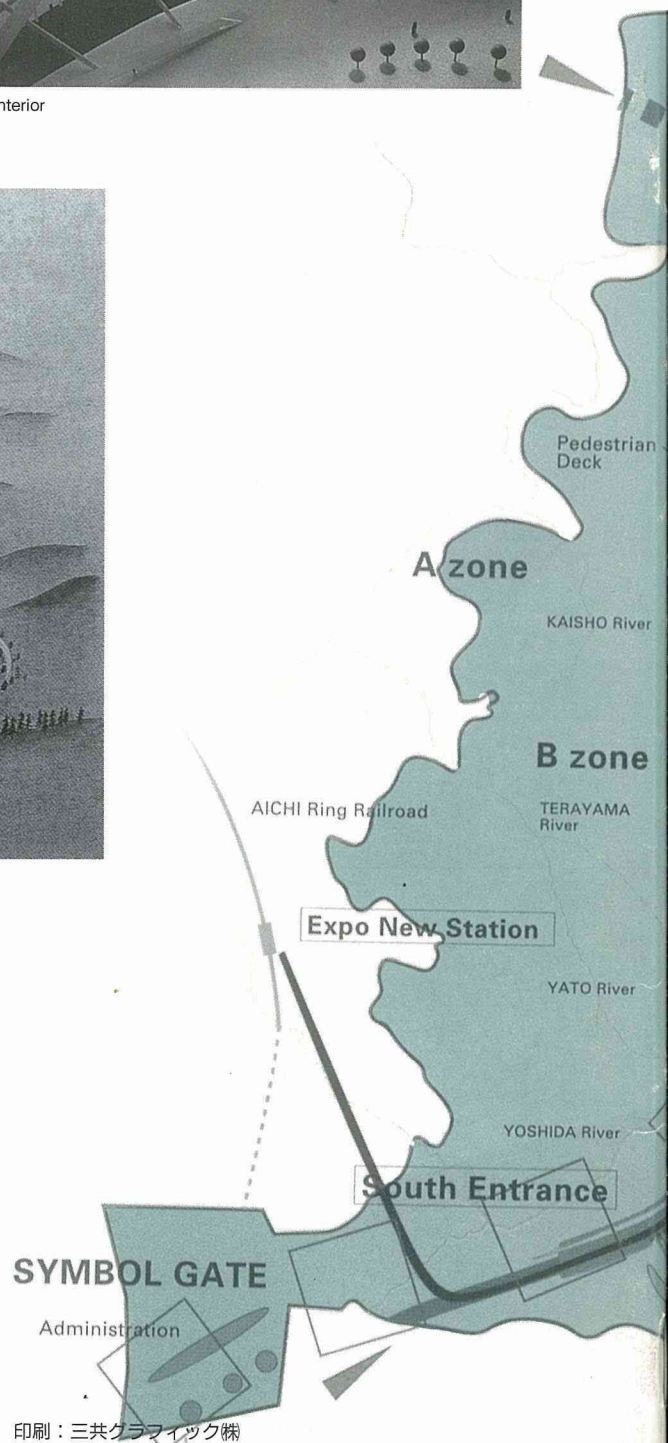
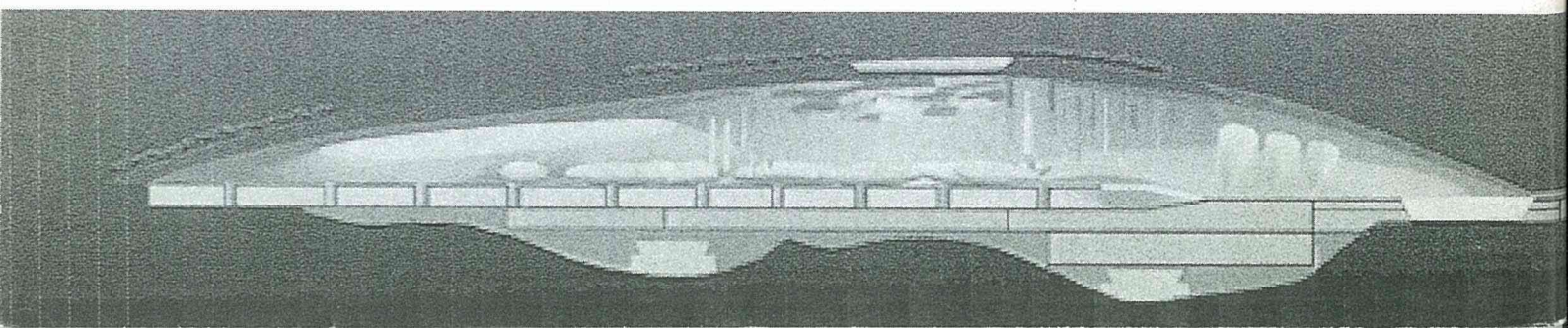
編集：東京工業大学工学部建築学科　華編集委員会
委員長／仙田満　委員／八木幸二　三上貴正　堀田久人　奥山信一　團紀彦
事務局／井上寿
発行：TIT建築設計教育研究会
定価：800円



Eco-City interior



Eco-Park



編集協力：(有)松井編集室　翻訳：デビット・スチュアート　取材協力：建築学科修士・研究生有志　印刷：三共グラフィック㈱
Edition: "Ka" Editional Committee, chairman／Mitsuru Senda member／Koji Yagi Takamasa Mikami Hisato Hotta Shinichi Okuyama Norihiko Dan
secretariat／Hisashi Inoue translation／David Stewart
Department of Architecture and Building Engineering Tokyo Institute of Technology
2-12-1 O-okayama Meguro-ku Tokyo 〒152 phone 03-5734-3163